

第14回 2022(令和4)年度

# 子どもアクション文学賞

受賞  
作品集

～見て、聞いて、調べて、自分の言葉で書いてみよう～



# もくじ

ごあいさつ

北九州市長 武内和久

2

選考講評

あさのあつこ／最相葉月／リリー・フランキー

4

小学生の部



## 大賞

ゆらゆらゆれる、かかのこと

藤本千尋

10

## 佳作

小学三年生、アクセサリーショップを開く

久保咲楽

17

アサガオの観察記録

志賀優龍

27

## 選考委員特別賞

あさのあつこ賞

しょうゆがみをつくるけんきゆう

川名 蒔子

39

最相葉月賞

私ができる恩返し

中村 心美

42

リリー・フランキー賞

僕は、いつだって空を想う

柚野 薫三郎

47

中学生の部  
 大賞

鳥取に飛来する黄砂

田村 萌梨 たむら もえり

50

佳作

この夏の自分の思いきったこと

萩原 虎徹 はぎわら こてつ

69

伝えたい、この気持ち

島崎 結衣 しまざき ゆい

72

選考委員特別賞

あさのあつこ賞  
闇の中から扉を探して

内田 博仁 うちだ たくと

83

最相葉月賞

仲間と共に

〜28人の努力、甲子園への切符〜

佐伯 皆人 さえき みなと

97

リリー・フランキー賞

父は誇り

チャン コク アン

120

資料

小学生の部 受賞作品・最終候補作品・学校団体賞

124

資料

中学生の部 受賞作品・最終候補作品・学校団体賞

125

資料

応募結果

126

ごあいさつ



北九州市長 武内 和久

第14回子どもノンフィクション文学賞を受賞された皆様、そして、ご家族、学校関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

この文学賞は、子どもたちが体験した出来事や取材したことを「ノンフィクション」として書くことで、人々や社会への関心を持つきっかけとなること、そして北九州ゆかりの文学者たちが築いてきた豊かな文芸土壌を継承していくことを願って開催しています。

今回は、国内外から、小学生の部253編、中学生の部207編の合計460編の作品が寄せられました。

応募された作品の中から、小学生の部は藤本千尋さんの「ゆらゆらゆれる、かかのこと」、中学生の部は田村萌梨さんの「鳥取に飛来する黄砂」が大賞に決定しました。

このほか10名の方の作品が佳作、選考委員特別賞に選ばれました。

併せて、この文学賞に特に熱心に取り組んでいた小・中学校に贈られる学校団体賞は、「北九州市立小石小学校」、「智辯学園和歌山小学校」、「横浜市立茅ヶ崎台小学校」、「柏原市立玉手中学校」、「熊本大学教育学部附属中学校」、「筑波大学附属中学校」に決定しました。

当文学賞の応募作品は、子どもたちの日々の出来事への素直な感情や体験した事を受け止めていく過程が、心洗われるような豊かな表現で書かれています。また、根気強く調べることや自分の言葉で表現するという挑戦を感じることもできます。

今回、この文学賞に応募された皆様が、今後も様々な事に関心を持ち、文章を書くことの楽しさを感じ、作品の創作を続けていかれることを願っています。

また、大人の皆さまにも、子どもたちと同じ目線、気持ちになって、子どもの頃を思い出しながら、この作品集を読んでいただけると幸いです。

選考にご尽力を賜りました選考委員の皆様、多忙な中、応募を取りまとめいただいた学校関係者の皆様をはじめ、実施に当たりご協力いただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。

北九州市は今後とも、未来ある子どもたちのために、文学をはじめとした文化芸術の力を活用し、創造的なまちづくりを推進してまいりますので、皆様のご理解とご協力をお願いします。

## 新しい風景

児童文学作家 あさのあつこ



1954年岡山県美作市生まれ、青山学院大学卒業。  
岡山市にて小学校の臨時教諭を勤めたのち、作家デビュー。  
『ハツテリ』で第35回野間児童文学賞受賞。  
『ハツテリ』全6巻で第4回小学館児童出版文化賞受賞。  
『たまゆら』島浦恋愛文学賞受賞。  
著書に『NO.6』シリーズ、THE MANZAIシリーズ、  
『グリーン・グリーン』『烈風ただなご』『白兎』シリーズなど多数。

今回も読みごたえのある作品の数々を堪能させてもらいました。堪能とは十分に満ち足りた心持ちになることですが、本当にその通りに、最終候補作品を読み終えた後、わたしはとても満ち足りた気持ちになりました。どの作品にも個性があり、読み手を未知の世界に誘ってくれる力を感じたのです。ほんと、おもしろかったあ！わたしは、いちおうプロの書き手なのですが、作品を読みながら「すてきだな」「かなわないなあ」と唸る一時がありました。かなり、ありました。みんな、すごいです。自分の世界を自分の言葉で、自分ではない誰かに伝えることができるのですから。もう、ひたすら感心するしかありませんでした。読み手としては、貴重で楽しい

時間でしたが、選考者としては、苦しい思いを強いられたと告白します。これだけの作品群の中から数編を選びださねばならないのですから、なかなか、大変な作業だったのですよ。

それでも、小学生の部は藤本千尋さんの『ゆらゆらゆれる、かかのこと』に選考委員全員が最高点をつけ、大賞と決まりました。この作品を読み終えた後、作者がまだ一年生だと気が付き、わたしはかなりのショックを受けたものです。「信じられない」と叫びそうになりました。表現のすばらしさもさることながら、周りの人たち、特に『かか』に対する温かで冷静な視点はみごととしかいようがないのです。ASDについて自分で調べ、知識として身につけ、それを現実には生かしていく。そして、『かか』を理解していく。なんと豊かな世界なのでしょう。どとどとの存在もきらりと輝いていました。この『かか』とこの『どとど』がいるからこそ千尋さんの豊かさが育ったのだと、納得させられました。

あさのあつこ賞には川名蒔子さんの『しょうゆがみをつくるけんきゅう』を選ばせてもらいました。これは、もう、ともかくおもしろくておもしろくて、蒔子さんの

ユーモアセンスに圧倒されました。本人はそのつもりはなくても、作品から上質のユーモアが滲にじんでくるのです。才能だなあと、しみじみ感心してしまいました。しょうゆかすから紙を作るという発想もおもしろいし、しょうゆ会社の社長さんとのやりとりも秀逸でした。なにより、ラストが最高で、ががっかりです。の一行には吹き出しながら、うなずいてしまいました。上手くまとめるのではなく、ありのままの現実をきちんと書き表しながら、読み手を夢中にさせてしまう。うーん、やっぱり才能としか言いようがありません。『アサガオの観察記録』も『小学三年生、アクセサリーショップを開く』も大すきな作品でした。

中学生の部の大賞は田村萌梨さんの『鳥取に飛来する黄砂』に決まりました。労作であり傑作です。これほどの研究、実験が大人の助けを得ながらも、一人の中学生の手によって為されたことに畏敬の念さえ抱きます。わたしの暮らしている町から鳥取市までは車で二時間もかかりません。黄砂ももちろん飛んできます。しかし、厄介なもの、中国あたりから飛んできたもの程度にしか認識していませんでした。萌梨さんの作品を読んで、まさに目から鱗が落ち、未知の世界を見ること、触れること

ができた、そんな感覚すら覚えました。萌梨さんは、この知性と感性をさらに育み、世界に飛び立つ研究者になるのだろうかなんて、勝手な想像をしています。あさのあつこ賞には内田博仁さんの『闇の中から扉を探して』をどうしても選びたいと思って、選考会に臨みました。僕はずっと暗闇の中にいた。出だしのこの一文から、心を掴まれたのです。内なる世界の孤独と苦悩。博仁さんはそれを言語化、文章化してわたしたちに示してくれたのです。それは、博仁さんしか生み出せない作品でしかた。ビルガー・ゼリーンの手記と重なりつつ、博仁さんだけの言葉でつづられた世界には大きな力があり、わたしたちの常識を打ち砕きます。おそろしいほど剛力で繊細な作品でした。『伝えたい、この気持ち』も同じように内なる世界の力を持つていると感じました。『この夏の自分の思いきったこと』は、ともかく愉快です。ひょうひょうとした作者の佇まいとからりと明るい文体があいまって、独特の雰囲気漂います。最高です。市長さんの反応が気になってたまりませんでした。

あっぱれ

ノンフィクションライター 最相 葉月



1963年生まれ「絶対音感」で小学館ノンフィクション大賞、星新一「〇」話をくった人で大佛次郎賞、講談社ノンフィクション賞などを受賞。他の著作に「青いバコ」エッセイ、「セラピスト」「れるるるる」「ナカネ 中国朝鮮族の友と日本」「家という生き方」「証し 日本のリリスト巻」「胎児のはなし」共著、当賞受賞者への取材を含む「調べてみよう、書いてみよう」講談社など。主なテーマは科学技術と人間の関係性、精神医学、教育、童話ほか。

今年は社会情勢の影響もあるのでしょうか、紛争地支援やSDGsをテーマにした作品が目立ちました。どれもが善とみなす活動を題材にする場合、「よいことをしている自分」の話で終わってしまう傾向があります。作品として人に読んでもらうためには、その先を問う必要があります。疑問をもったり迷ったりすることを恐れないでください。

小学生の部大賞「ゆらゆらゆれる、かかのこと」は一読して、これが大賞だろうと思えました。ごっこ遊びをしてもとんちんかん。音が苦手で記憶力がよすぎるため生きづらい。そんなちよっと変わった「かか」をなんと

か理解したい、発達障害の解説書を読んでもわからないから自分が「かか」についての本を書こう。そんな想いが家族にとって本当に大切なものをたぐり寄せていきます。多くの読者に気づきを与えるみごとな作品です。

佳作「小学三年生、アクセサリーショップを開く」は自作のアクセサリーを自分の店で売ってお金を稼ぐまでを描く貴重な体験談です。値段はどつやつて決まるのか、客層や好みをどう考えるのか、働くことの意味を問うこれまででないテーマを扱った作品です。こちらも高い評価を集めました。

もう一つの佳作は「アサガオの観察記録」です。つばみと日照時間の関係や支柱がないときのつるの動きなど、仮説をたてて実験と観察で検証していく。見慣れたアサガオにもたくさん不思議があります。淡々と冷静に記述しているところにも好感をもちました。

最相賞の「私ができる恩返し」は、祖父の足湯をしながら聞いた東京大空襲の話です。火の手が迫る中、道に倒れた弟に見向きもせず群衆が押し寄せてきたこと。差し

入れのおにぎりがおいしかったこと。祖父は現在ボランティアで町会の仕事をしていますが、そこには戦時中、町の人たちに助けられたからという思いがあったのです。足湯のひとつを通して知る戦争。映画の一場面のようです。

中学生の部大賞「鳥取に飛来する黄砂」は、黄砂の正体を見極めるまでの試行錯誤と研究の道のりを描いた作品です。発表会で審査員から受けた「飛来してきたものは、本当は、黄砂じゃなくて鳥取砂丘の砂じゃないの」という一言に衝撃を受けて、地元の砂丘も調べます。砂丘と砂漠の違いや春に黄砂が飛んでくる理由など、真実に近づいていく科学的思考がすばらしいと思いました。

佳作「この夏の自分の思いきったこと」はとても微笑ましい作品です。白い靴しか履いてはならないという学校のルールのため、29センチというオーバーサイズの著者は靴探しに苦労します。たぶんほかにも困っている人があるだろうと気づき、市長に手紙を出してルールを変えてほしいとお願いすることにしました。ずいぶん思いきったことをしたわけですが、この賞に応募したのもず

いぶん思いきったこと。みんながハッピーになりますようにと願わずにはいられませんでした。

佳作「伝えたい、この気持ち」は、特定の場面で言葉が出なくなる「場面緘黙<sup>かんもく</sup>」の症状をもつ当事者が日常でどんな悩みを抱えているかがよくわかる作品でした。学校に来るとしゃべりたいのにしゃべれなくなる。人から誤解されることもあって苦しい日々。画鋏のことも喉に刺さったトゲのようで気になります。でもこうして想いを文章にできたことできっと著者の世界は広がるでしょう。

最相賞は「仲間と共に」28人の努力、甲子園への切符です。軟式野球部のピッチャーでもある著者が、48年ぶりに夏の甲子園に出場した同校の高校野球部員をエースから補欠、マネジャーまで全員に取材して各人を紹介した作品です。ただの人物紹介ではないのは、その人物ならではのエピソードや第三者評を交えて立体的に描き出していること。この28人のエネルギーと強い精神力があったからこそ甲子園の扉が開いたのだと思われました。よく取材しましたね。あっぱれです。

## 楽しく読みました、ありがとうございます

イラストレーター・作家・俳優  
リリー・フランキー



1963年、北九州市小倉生まれ。武蔵野美術大学卒業。イラストやデザインのほか、文筆、写真、作詞・作曲、俳優など、多種多様な分野で活動する。自身初の長編小説「東京タワーオカンとボクと、時々、オトコ」は06年本屋大賞を受賞、2010万部を超すベストセラーとなった。オリジナル絵本「おでんくん」はアニメ化され、オリジナルグッズも性別別世代を超え幅広い人気を集めている。

### 小学生の部

大賞「ゆらゆらゆれる、かかのこと」は、一年生の作品です。一年生で大賞を受賞したのは昨年につき2人目です。物事に対する距離感とかバランス感覚というか、それを含めた文章力とか、一つ一つがみずみずしい作品で、大人が読むような文献でも理解できるんじゃないかというくらいの知力を感じました。しかも、一年生なのでまだ語彙力がそんなにないと思われるなか、自分が生きていく生活の中の言葉だけで、これだけの文章を組み上げているので説得力がありました。

佳作「小学三年生、アクセサリーショップを開く」は、

自ら考え、自ら行動する様子が生き生きと描かれています。大好きなアクセサリーづくりから、それを売るにはどうしたらよいか、場所は、値段はなど、さまざまな課題が浮かび上がります。周りの人に相談し助けてもらいながら、私らしいお店が出来上がっていきます。自分で考えたショップで販売するまでの話で、最後まで、とても楽しく読ませてもらいました。

佳作「アサガオの観察記録」は、身近なアサガオを毎日観察した作品です。アサガオの特徴や生態をしっかりと調べたうえで、日々の観察を行っています。本当に調べたとおり成長するのか、ときに支柱やひもの場所を変えたりするなど、環境を変えながら検証をしています。丁寧な観察記録で、お見事です。

リリー・フランキー賞「僕は、いつだって空を想う」は、いなくなつたお兄ちゃんのことを思いながら、家族との日常や作者の心の動きを淡々とつづつた作品で文章がとても好きです。

中学生の部

大賞「鳥取に飛来する黄砂」は、根気強く、黄砂に真正面から向き合った大作です。私も街中で息苦しくなったりすると、黄砂のせいか、PM2.5のせいかなど思ったりはするけれど、どんな理由でその現象が起きているのか突き詰めて考えたりはしません。学校があつて、部活で陸上をやっている、さらにこうした研究に取り組んで、すごい一言です。調べ学習としてトップクラスです。

佳作「この夏の自分の思いきったこと」は、足のサイズが29センチの男の子の靴探しの悩みを書いた作品です。校則で決められた白の靴がなかなか見つからず、自分の思い切ったこととして、「市長に手紙を書く」という達成感はずごく大事にしてほしいです。足のサイズが29センチの男の子の現場の声なので、面白かったです。最終的に自分で悦に入っているのが気持ちいい。

佳作「伝えたい、この気持ち」は、作者の文章、作者のものの見方が好きです。途中、自分でこの状態に病名

をつけているところがあるんですが、内気な作者の頑張っていることと挫折など、なろうとしてなれないところの気持ちがとても伝わってきました。

リリー・フランキー賞「父は誇り」は、お父さんに対する素直な気持ちをにつづった作品です。お父さんの苦勞や努力、自分に対するやさしさなど、想像したとおりに話は進んでいきますが、父への思いがしっかり書けているところがとても評価できます。一生懸命努力して、家族を思いやる父さんを超えることを目標にするなんて、父さんもうれしくてたまらないのではないでしょうか。

この文学賞には、たくさん子どもたちに挑戦してほしいと願っています。自分でこの賞を見つけて応募する子もいるでしょうし、学校で書かされて応募する子もいるかもしれません、感じたまま、思ったままをぶつけてください。粗削りの、ありのままの原石に出会えることを楽しみに待っています。(談)



# 大賞

## ゆらゆらゆれる、かかのこと

名古屋市立八事東小学校 一年

藤本 千尋

うちのかかはちょっとへん。はじめにそうおもったのは、ねん中のときでした。

「いっしょにあそぼう。」

とさそつと、かかはいつもニコニコうなずいてくれます。でも、あそびはなかなかはじまりません。わくわくしてまっていると、そのうち、かかはこまったかおでゆれはじめました。右へ左へ、ゆーらゆら。そしてそのまま、

手をはなしちゃったふうせんみたいに、ふわーっとどこかへとんでいってしまいました。

「かかがあそんでくれない。」

ととにいたら、

「なにをしてあそびたいのか、ちゃんどつたえてごらん。」といわれました。かかは、「あいまい」がにがてです。本とうはいっしょにあそびたいけど、なにをすればいいかわからなくてこまってしまふんだといっていました。ととがいったとおり、ちゃんどつたえたら、かかはえ本をよんでくれたし、おえかきやおりがみもじょうずにして、いっしょにブランコにものつてくれました。

でも、「おままごとしよう」とさそつた日、かかはまたこまったかおをしました。

「かか、おひめさまやくね。」

「ばんいやくをあげたのに、ゆーらゆら。お人ぎょうをもつたまま、ちっともしゃべりません。」

「こんにちは、おひめさま。」

わたしのくまちゃんのはなしかけたら、かかはしばらく

かんがえて、

「いらっしやいませ、なににしますか?」

といいました。ちがう、ちがう。そんなのおひめさまじゃありません。

「こんにちはくまちゃん、だよ。」

「こんにちは、くまちゃん。」

おしえたら、そのとおりにいつてくれるけど、ずっとそればかり。これじゃあちっもおもしろくありません。わたしはまたとにいいました。すると、かかはやくになりきるのも、ばめんにあわせてかんがえるものもにがてなんだということがわかりました。だからかかは、ふつうのおしやべりもにがてなんだそうです。ちよつとなつとくしました。

おしやべりがにがてなのには、べつのもうもありません。かかは、ほかのおとがたくさんあるばしよだと、ひつようなこええだけききわけることができます。だから、なん回もききなおしたり、ききまちがえたり、きこえたふりをしたりして、よくわからなくなつてしまいます。

みみのけんさは大じょうぶです。のうみそのせいだそうです。

ほかの人がふつうにできることが、どうしてかかにはむずかしいんだろう。ずっとふしぎだったので、わたしはこのまえ、かかにきいてみました。

「かかにはASDってしょうがいがあるの。」

かかはいいました。どんなしょうがいがかかいたら、かかはうーんとかんがえて、

「かかのASDは、かかみたいになるの。」

といいました。よくわかりません。とにきいたら、おなじしょうがいでも、人によつてとくちやうがちよつとずつちがって、こまりごとや、たすけかたもかわるんだとおしえてくれました。

「じゃあ、かかのことは、しょうがいの本をよんでもわからないの?」

「しょうがいのことをせつめいしてくれる本はあるけど、かかのことをかいた本はないかな。」

ととはいいました。それなら、わたしがかかのことをし

らべてつくってあげようとおもいました。なぜなら、3月に生まれてくるきょうだいが、わたしみたいにかかをしりたいとおもったとき、ちゃんとせつめいしてあげられるようになりたかったからです。

まず、ASDのことをしらべました。ASDは、はつたつしょうがいの一つで、人とのかわりがにがてだったり、つよいこだわりがあったりするそうです。とくいなことと、にがてなことのがデコボコのしょうがいで、とどがいったとおり、人によってとくちょうがちがうこともわかりました。たしかに、おなじクラスにも、はつたつしょうがいのこがいるけど、かかとにているところもちがうところもあります。

ASDの人のにがてなことは、たくさんの本やかみにかかれています。よくかいてあったのは、「あいまいなこと」「あいてのきもちやばめんをわかること」「さわがしいばしょ」の3つです。この3つを、わたしはかかにインタビューしたり、かんさつしたりしてみることにしました。

まずは、あいまいなこと。おままごとのほかに、かかがゆらゆらするのはどんなときだろう。みつけたのは、そうじのときでした。

「それ、じゃまにならんどこにおいといて。」

とどにいわれて、かかはうなずいたのに、そこからぜんぜんうごきません。ゆーらゆら。

「こまつてる？」

こえをかけると、かかは、

「なにを、どこにおけばいいのかな？」

と小さなこえでいいました。とどがゆびをさしたのは人ぎょうです。そうじをするからどけてといっただとわかっていたので、

「おんぎょう、どけたらいいんだよ。」

と、おしえてあげました。なのに、かかはまだこまつたかお。

「どこならじゃまにならないのかな？」

「そうじきをしなるところならいいんじゃない？どっかのうととか。」



したら、わたしのとなりで、だれかとおしゃべりしているときも。だから、かかのしっぱいにきづいたら、こういったほうがいいよとおしえてあげたり、あいてがいやなきもちになったら、かかのつたえたいきもちをかわりにおしえてあげたりして、たすけてあげたいとおもいました。

さいごは、さわがしいばしょ。かかは、はじめにかいたみたいに、ほかのおとがあるところえがきこえません。でも、

「しずかならいいの？」

ときいたら、かかはくびをふりました。

「おとのほかにも、いろとか、うごきとか、においと、かわりごちとか。いろいろなものじゃましてくるから、そういうのぜんぶ、なるべくないほうがいい。」

ぜんぶまとめて、かんかくかびんというそうです。かかはよく、「ひかりがささった」「おとがいたい」とにげまわっています。おもしろいいかただな、とおもっていたけど、かかには本とうにそれくらいくるしいことなの

かもしれないとおもいました。ピカピカひかるまほうのステッキも、かかにはあくまのつえにみえるのかな。おきにいりのおもちゃだけど、かかのまえでふりまわすのはやめようとおもいました。

3つのがてがわかってから、わたしは

「ほかににがてなことはある？」

と、かかにききました。

「ごだわらないこと。しゅうちゅうしすぎないこと。ことばでいわれただけでわかること。ほかにもいろいろあるけど、1ばんは、わすれること。」

と、かかはいいました。わすれないのはいいことなんじゃないの？とおもったけど、きいてみたらぜんぜんよくありませんでした。かかの中にはたくさんのきおくがありすぎて、たまにそれがおわーっとあふれてくるそうです。あふれるのは、だいたい、しっぱいしたりこわかった、いやなきおくだといっていました。かかはたまに、きゅうにしょんぼりまるまったり、ぶんぶんおこったり、「わっ」とばんざいしたりします。わたしはそれが、な

んでかわからなくて、いやだなとおもっていただけ、それはそういういやなきおくがおそってきたときになっちゃうことなんだとわかって、しかたないかもしれないとおもいました。それから、じゃあどうしてあげたらいいのかなとかんがえました。

「ほおっといてほしい。」

かかはいいました。でも、なにもしないのはいやで、わたしはしてあげられることをいっばい、いっばいかんがえました。そして、

「たのしいきおくだらけにしよう。」

と、おもいつきました。かかに、たのしいきおくをいっばいつめこんだら、いいきおくがあふれてくるからおおくなるかもしれない。そしたらきつと、おもいだすたぶうれしいきもちになってくれる。そうぞうしたら、わくわくしてきました。それに、このさくせんなら、ととや、うまれたてのあかちゃんともいっしょにできます。かかがたのしかったら、きつとかぞくもたのしいから、みんなのニコニコがふえる、とってもいいさくせんです。

「かか、どんなときがたのしい？」

さくせんのもとにしようとおもって、わたしはききました。みんなであそびにいくときかな？おいしいごはんをたべるときかな？りょこうでとおまりするときかな？いろいろよそうしてたけど、かかはぜんぜんちがうことをいいました。

「かかがしっばいしても、おこらずわらってくれたとき。あと、かかいがいがしっばいして、みんなでわらっちゃったとき。」

え、そんなこと？とわたしはびっくりしました。だってそれは、いつもかぞくでやってることだからです。

「あ、ねえねえ、おぼえてる？」

かかはわたしが小さかったときにあった、おもしろいなしをいくつもはなしました。それから、かかのしっばいや、へんなところをみんなでわらったはなしも。ぜんぶ、ふつうの日に、ふつうにおきたことばかりでした。でもとってもおもしろくて、わたしたちはいっしょに、かかがまっかになるまでわらいました。かかは小さなた

のしいを、だいにだいにあつめてるんだ。大きなやなぎおくに、すぐにはかてないけど、それはとてもすてきなことだとおもいました。それに、しょうがいがあるからといってとくべつにおもわなくても、いつもしているみたいにふつうにすごすことも、えがおにつながるんだときびきました。

うちのかかはちよつとへん！だけどおもしろくて、わたしのじまんのおかあさん。あのへんなおままごとだつて、うちだけのとくべつだとおもったら、なんだかとてもいいものにおもえてきました。ほかのしっぱいや、おともだちのおかあさんとちがうところだつて、おもいだしてみたらわかることばかりでした。それに、かかのふしぎなところも、いやなところも、りゆうがわかったらちよつとすつきりしました。きつと、しょうがいのことをかいた本をよむだけじゃ、こんなきもちにはなれませんでした。

「あかちゃんがうまれたら、ぜんぶおしえてあげようとおもったけど、やーめた。」

わたしはきめました。なぜなら、きょうだいにも、かかといっぱいはなして、いっばいいっしょにすごして、そうやってかかをしてほしいとおもうようになったからです。もちろん、こまったり、いやなきもちになったり、ふしぎにおもっているときは、ちよつとおたすけマンになつておしえてあげます。りゆうがわからないまま、かかをきらいになつたらもつたないからです。わたしはかかが大すきで、ずつとなかよしでわらつていたいから、しりたいし、たすけたいとおもいました。とともきつとそうです。あたらしくかぞくになるきょうだいも、おなじきもちになつてくれたらうれしいです。かかのことをしらべて、たくさんおはなしをして、ながーい、ながーいこのさくぶんをかいて。そうなるようにおてつだいていくことが、わたしのもくひょうになりました。



# 佳作

小学生の部

## 小学三年生、アクセサリーショップを開く

帯広サドベリーの風  
帯広市立大正小学校

三年

久保 咲楽

一、はじめりはライフプランシート

私には夢がいっぱいある。

一番の夢は子どもむけの科学の本を書くことだけれど、宇宙のベン強もしてみたいし、飛行機をせっ計して鳥人間コンテストにも出場してみたい。美しい森の中の晴耕雨読の生活にもあこがれる。だから、夢を一つに

なんて決められない。

十月のある日、お母さんが言った。

「ライフプランシートを書いてみない？」

ライフプランシートは夢をかなえるためにはどんなことをしたらいいか、それにかかるお金はどの位かかるのかを調べてまとめていくシートだ。「夢や目標をかなえるための第一歩だ」ともらったしりようには書いてあった。

実さいにライフプランシートを作ってみると、自分がやりたいことを全部するにはものすごくたく山のお金がかかるらしいと分かった。学校に通うための学費、交通費。ごはんを食べたり、電気や水道を使ったりするための生活費。本を買うにもお金がかかるし、何かを作るのにも材料費がかかる。なんてこった！これでは夢をたく山見られない。

このことをきっかけに、私は自分の力でお金をかせぎたいと思うようになった。大人になるまで待っている時間がもったいない。今すぐにでもかせぐのだ。

## 二、オビサド

私は「帯広サドベリーの風」というオルタナティブスクールに通っている。学校の名前が長いのでみんな「オビサド」と呼んでいる。

オビサドには先生もいないし、授業も無い。だから、子ども達は自分で予定を立てて、スタッフに助けをもらいながら一日をすごしている。

オビサドでは一時期プラバンが大流行した。今はそんなにはやっていないけれど、私は今でもプラバンをつづけている。なぜあきずにつづけているかといえば、焼き立てアツアツのプラバンを軍手をつけて曲げ、立体的な花を作ることにはまったからだ。最近では、思い通りのきれいな形の花が作れるようになり、アクセサリーにして友達や家族にプレゼントすると、かなりよろこんでもらえている。

そうだ！ プラバンのアクセサリーを売ってお金をかせごう！

これなら私でもお金をかせげそうだ。

## 三、作品ってどうやって売るの？

プラバンアクセサリーを売ってお金をかせぐアイデアは良かったけれど、そこには大きな問題があった。作品ってどうやって売るんだろう？

どこかのお店に取り扱ってもらえるようにお願いしてみよう？ それとも、メルカリやインスタなどのネットを使う？ どちらにしても方法が分からない。そこでお母さんに相談してみた。

「お母さんは作る方法は教えられるけど、売る方法にはくわしくないの。はる香さんに相談してみたら？」

はる香さんはオビサドの友達のお母さんで、体にやさしい食べものや雑貨を売る仕事をしている。

次の日の朝、さっそくはる香さんに私の作品を売る方法が何かないかを相談してみた。

「十月二十三日に『ひだまりマルシェ』っていうイベントがあるから自分のお店を出したら良いと思う。これ、売れると思うよ。」私の作品を見たはる香さんが言った。「子どももいっぱい遊びに来るから、ワークシヨップも

してみたら？ これははる香さんの意見だから無理にやらなくてもいいよ。」

お店！ ワークショップ！

私の心は、うれしくて今にもおどろ出しそうになった。やった！ がんばるぞ。

#### 四、ざせつ

有頂天な私は、家に帰るとさっそくお母さんに手伝わしてもらいながらワークショップで何が出来るのかを考えてみた。私の考えるワークショップに必要なじょうけんは三つ。

- ・小学生のお小づかいで気軽に参加できる。
- ・プラバンで立体的な花を作る体験ができる。
- ・みんながせいこうできる題材。

三つのじょうけんをクリアできそうな題材として小さな花のモチーフのノンホールピアスを考えた。これを百円でいきょうしたい。

ところが、お母さんが言った。

「原価は計算してみたの？」

国語辞典で調べると、原価は「商品売り上げるまでにかかったお金」と書かれている。私はノンホールピアスを一組作るのにどの位のお金がかかるのかを計算してみた。プラバン、ビーズ、ピアスパーツ…。およそ百五十円かかる。

「それだけじゃないよ。材料を買いに行く交通費、商品をつつむふくろや台紙のお金、オーブントースターを使うための電気代とかもかかっているよ。」

なんてこった！ お客さんが来れば来るほどお金がへっってしまう。しかも、これだけではない。今度はお父さんが言った。

「安くしたらお客さんもいっぱい来るぞ。お店とワークショップ、一人で回せるの？」

私はあせると頭が真っ白になって何もできなくなってしまう。そんなじょうたいでお客さんがプラバンで立体的な花を作る体験がせいこうできるようにサポートするのは無理だ。

ワークショップの価かくを上げる？

材料の質を下げて原価を下げる？

お客さんの人数にせいげんをかける？

考えれば考えるほどどうしたらいいのかわからなくなる。頭はぐちゃぐちゃで涙が出てきた。

もう無理！ 私にはワークショップなんてできない！  
けっきょく私はワークショップはあきらめて、お店に集中することにした。

作品の値段は原価に自分がなっとくできる手間賃を加えて決めることにした。

はる香さんの期待にこたえられなかったのはくやし  
かったけれど、私の心は羽のように軽くなった。やるべきことは決まった。一つは商品になる作品を作ること、  
もう一つはお店そのものを作ることだ。

五、どんなお店にしようかな？

ひだまりマルシェには、自分でお店にするテーブルや  
イスを持って行かなければならない。そこで、ふだん外

で遊ぶ時に使っている古い木のテーブルを持って行くことにした。

オビサドが休みの水曜日、お父さんがサンダーでテーブルをみがいでくれて、私とお母さんでアーモンドオイルをぬりこんでピカピカに仕上げた。落ちついた茶色がしぶくてイケていたので、お店のテーマは「森のアンティークショップ」にすることにした。テーブルのサイズを考えると、商品はノンホールピアスを中心に二十個くらいがちょうど良さそうだ。

お店には、商品をあててみるための鏡と商品をかざるためのディスプレイボードを置きたい。鏡は前にDIY教室で作ったものがイメージにピッタリだったのでそれを使うことにした。ディスプレイボードは私のイメージを伝えると、お母さんが家にあるものを利用して理想に近いものを作ってくれた。

私のお店のイメージがどんどん形になっていく。まるでサントさんからのプレゼントを開ける時みたいなワクワクが心の中からあふれてくる。

お店の名前は自分の名前にちなんでCherry\*Saku（チェリー・サク）にした。「桜咲く」と言う意味だ。春の森みたいにお店いっぱいプラバンの花を咲かせよう。

私は、作品をきれいに見せるための台紙や紙のかん板を商用利用可のフリー素材とワードを使ってパソコンで作った。

六、しまった、商品が足りない！

ひだまりマルシェまで残り三日の木曜朝。

お店のディスプレイがほぼ完成して満足していた私にお母さんが言った。

「商品って、何個作るんだっけ？」

なんてこった！ お店には二十個ならべる予定なのに、この時、完成していたのは八個だけ。つまり、三日で十二個作品を作り、それをこんぼう、値付けまでしなくてはならない。とてもじゃないが、家での作りようだけでは間に合わない。仕方がないのでオビサドでも遊ぶのがまんして作りようの時間を増やすことにした。

オビサドには時間わりが無いから、みんな自分のペー  
スで遊んだりべん強したりする。当然、私がいそがしく  
作りようをしていても、他の子達は自分の活動が一段落  
すると遊び出す。

いつもなら大好きな友達の声も、心によゆうが無いせ  
いか「うるさいなあ。」とイライラしてしまう。人の心っ  
てフクザツだな。

でも、こんな時にかぎって新しい作品のアイデアが  
うかんできたりもする。残り時間は少なかったけれど、  
新たにスズランモチーフのネックレスとブレスレットを  
作ってみることにした。

帰りの車でお母さんにアイデアを話したら、少しあ  
きれながらも材料を買いにお店に連れていってくれた。  
さあ、ラストスパート。木曜日と金曜日は流れ星のよ  
うなスピードですぎていった。

七、前日じゅんぴ

いよいよひだまりマルシェ前日。お日さまがキラキラ

かがやく気もちが良い土曜日。

私は朝から急ピッチで新作のスズランモチーフのプレスレットを作っていた。私の作品は、パステルで色をつけたプラバンをトースターで焼き、軍手をつけた手で立体的な花の形にととのえ、最後にレジンをぬって硬化させて仕上げる。だから、天気の良い日は絶好のレジン日和だ。私はまだ、硬化用のUVライトを持っていないのでお日さまの力をかりている。

レジンで仕上げたスズランの葉っぱパーツはガラスのようにすき通り、お日さまの光をあびてつやつや光る。新作のプレスレットは私の作品の中で一番多く花と葉っぱのパーツを使う。どんどんでき上がっていくパーツを見ていたら「これはかわいい作品になるぞ。」とかく信じた。きつとお客さんによるこんでもらえる。

夢中になって作っていたら、作品の数が目ひょうの二十個をこえるころには、日はすっかりかたむいて、外は暗くなり始めていた。

「やっと出来たー！」

お母さんに手伝ってもらって作品を急いでこんぼうし、一しよにマルシエに持って行くものをチェックリストを見ながら用意した。

車への荷物の積みこみはお父さんが一しよにしてくれた。

やりとげた達成感と、作ぎよのつかれ、間に合ったという安心感で私は心も体もクタクタだった。

明日は本番。夜、お父さんに

「お店って大変。お金かせぐのナメてた。」

と話したら大わらいされた。とりあえずゆっくりねよう。

八、ひだまりマルシエ当日

夜、ドキドキして寝つけなかった私は、つかれが少しも取れないまま、朝をむかえた。

かばんにお弁当や飲み物をつめて、身じたくをととのえる。お店の名前のCherry\*Sakuにちなんでサクランのワンプイントがプリントされたカーディガンを着ることにした。

会場まではお父さんが車でおくつてくれた。

会場は駅前のりっぱな時計屋さんの二階。照明が沢山ついでいて、キラキラしたおしゃれな部屋だ。会場では大人たちがお店のしたくをいそがしそうにしていた。

私も、お父さんやお母さんに手伝ってもらいながら運んだ荷物をおろし、はる香さんに指定された場所でお店のじゅんびを始めた。

まずはテーブルとイスを広げる。テーブルの上には鏡とディスプレイボードを置き、最後に作品を値段ごとに分けていねいに並べる。全部の作品を並べおえたお店は、まさに森のアンティークショップ。イメージ通り！

一息つくと、ひだまりマルシェに出店する人達が全員集まって自己しょうかいをした。

「Cherry\*Sakuの久保咲楽です。よろしくお願ひします。」

ものすごくドキドキしたけれど、背筋をピンと伸ばして大きな声であいさつをした。

何人かの人私にも名刺をくれた。大人と同じように

扱ってもらえてうれしかった。私も名刺を作ってきたらよかったな、と思った。

## 九、Cherry\*Sakuオープン

十時になって、ひだまりマルシェがオープンした。私のお店には最初、お客さんが来なくて「このままお客さんが来てくれなかったらどうしよう。」と心配でハラハラした。きんちょうで太もものあたりがムズムズしたのでお母さんの持たせてくれた甘くて温かいチャイを何回も飲んだ。

十五分ぐらいすると、お店の前で足を止めて作品を見てくれるお客さんが現れ始めた。鏡の前でお客さんが「これかわいいね。」

「これもかわいいね。」

と言いながら楽しそうにノンホールピアスを自分の耳にあててくれるのを見るのはうれしい。自分の作ったアクセサリーが他のだれかを笑顔にできる。トクトクトクトクと体中の血が私の中でかけっこしているみたいだ。

そしてついに、女性の二人組のお客さんが、小花のノンホールピアスを一つずつ買ってくれた。

「ありがとうございます。」

とお金をうけとった時には、心ぞうがバックンバックンと音を立てて口から飛び出すかと思った。

これが、私が初めて自分でかせいだお金だ。

十、オシャレ女子、あらわる。

その後もCherry\*Sakuの前で足を止めて作品を見てくれる人や、手に取って買ってくれる人が時々来てくれた。

色んなお客さんが来てくれたけど、一番ドキドキしたお客さんはヒールのついたブーツとワイドパンツのよくに合う私と同じくらいの年れいのオシャレな女の子だ。

女の子は、作品を一つ一つ手に取ってしんけんな顔で見てくれた。その間、私の体の中の時計はぐるぐるものすごい速さで針を回す。とても長い時間がすぎたように感じた。

「これ、ください！」

ついに、女の子が銀の金具のスズランのイヤリングを私にさし出した。年れいの近いオシャレな女の子にえらばれた！ 私の作品のセンスもなかなかじゃない？ 作品を手わたした後、女の子のお母さんに学年を聞かれたので、三年生だと答えると、

「一つお姉さんだね。」

と言われてびっくりした。こんなに大人っぽい二年生がいるのか！

十一、そして長い一日がおわる

お昼の時間もすぎて、お客さんの数も落ちついた午後二時。大人達よりも一足早くCherry\*Sakuは店じまいをした。

予想よりもたく山お客さんが来てくれたので最初にあった二十二個の作品のうち、およそ半分の十個が売れた。

実さいにお店を出して初めて分かったことがいく

つかあった。

まず、私は銀色の金具を使ったアクセサリーが好きだし、お店に来てくれた子どものお客さん達も銀色の金具を使ったアクセサリーを手に取ってくれる事が多かった。けれども、大人のお客さん達のはほとんどは金色の金具を使ったアクセサリーを手に取っていた。

それから、子どものお客さんは白や青などの寒色を手にとることが多かったが、大人のお客さんには暖色の作品が人気だった。

子どもと大人は色の好みが大きく分かれるようだ。

一番予想外だったのは大人のお客さんに

「ふつうのピアスは無いの?」

と何回も聞かれた事だ。はる香さんが、ふつうのピアスは耳に開けた穴に通すから落としてなくさないのだ、と教えてくれた。こんなにたく山の人が耳に穴を開けているなんて知らなかった。オシャレのためなら耳に穴を開けてしまえるなんて、大人ってすごいな。

ずっと自分がほしいと思う作品を作っていたけれど、

お客さんがほしいと思ってくれる作品は、それだけではないようだ。次にチャンスがあれば、大人のお客さんがほしいと思ってくれる作品も、たく山作りたい。

十二、さいごに

お金をかせぐことは想像よりもずっと大変なことだった。それでも、自分の作品でよこんでくれる人がいるのは、大変さをふき飛ばすくらいうれしい。

自分でお店を出してみたことで「働く」ということは、お金をかせぐだけではなく、自分とだれかを幸せにする大切な活動だと分かった。とてもつかれたけれど、楽しい経験だった。

はる香さんが

「咲楽ちゃん、次は二月ね。」

と言ってくれた。次のマルシェにもお店を出せるんだ! そう考えると、ワクワクする。

今度はもっと計画的にじゅんぴをして、よりすてきなお店にしたい。

みんなもCherry\*Sakuに遊びに来てね。

参考資料

- ・マンガ「夢をかなえる」
  - ↳FPはライフプランのサポーター
  - ↳
- NPO法人 日本FP協会 発行



小学生の部

## 佳作

## アサガオの観察記録

豊橋市立福岡小学校 三年

志賀 優龍

ぼくは、身近な植物の一つであるアサガオのことを意外と知らないことに気が付き、アサガオの生態について、観察を通して、もっとアサガオのことを知りたいと思うようになりました。それが、アサガオの観察をしようと考えたきっかけです。

ぼくは、アサガオについて調べて不思議に思ったこと

や検証をしたいと考えていたこと、種まきをしてから花が咲いて種をつけるまでの毎日の観察を通して起きた出来事から気づいた発見や検証した結果等をまとめました。

アサガオは、中南米を原産とし、ヒルガオ科サツマイモ属のツル性一年草です。

花びらは、つながっていて一枚のように見えますが、五枚あります。アサガオのように花びらが一枚につながっている植物を「合弁花類」といいます。

アサガオの花のつくりは、花びら五枚、めしべ一本、おしべ五本、がく五枚です。めしべとおしべが一つの花の中にあるので、お花とめ花があるヘチマとは異なります。

そして、アサガオは、概日時計と呼ばれる日長や季節などを感じるための機能が備わっていることから「短日（一日の日照時間が短くなること）夜（夜の時間が長くなること）」を認識し、花芽をつけ、「朝」を認識し、花を咲かせる短日植物です。

さらに、アサガオのように、開花したときにほとんど

の花がすでに受粉をすませる花を「自家受粉」といい、アサガオのように、花そのもののつくりが変わって受粉をする花を「自動受粉」といいます。

「自動受粉」は、夜のうちに短かったおしべが伸びて、めしべの先である「柱頭」をおいこすときに花粉をこすりつける、という方法です。

アサガオは、種で冬を越して、春（五月ころ）に種まきをします。確実に子孫を残すために、「自動受粉」をするように進化したのでしょうか。

そこで、ぼくは、アサガオの観察を通して、次のことを検証したいと考え、五月十八日にアサガオの種をプラントーに一八粒まきました。

アサガオの種は、丸いスイカを四分の一に切ったような、半円の形をしていて、黒色をしており、表面はすべすべしていました。アサガオの種は、土の色ととてもよく似ていました。

ぼくは、毎日、アサガオの成長を観察し、次にあるようなアサガオの生態を観察し、検証しました。

1. つばみを付け始めるのは、日照時間が短くなるのをアサガオが感じるからである。

2. つるの巻き方は、必ず左巻き（反時計回り）である。

3. つるは、巻き付くものがないときは、かなり伸びながら巻き付けるものを探す。

4. 開花する前の花と開花した後の花のつくりを比較し、自動受粉の仕組みを調べる。

5. アサガオの花は、前の日が暗くなってから九～十時間後に開く（つまり、朝日を受けて「朝」と感じてから開花するわけではない）。

6. アサガオの花びらが五枚あること、花粉の様子等を観察する。

7. 観察を通して気づいたことを検証する。

まず、つばみを付け始めるのは、日照時間が短くなるのをアサガオが感じるからである、について観察と検証をしました。

ぼくは、二〇二二年の日の出と日の入りの時刻を国立天文台のホームページにある暦計算室から調べて確認を

しました。

すると、次のように、二〇二二年は七月十一日を境に日照時間が短くなることがわかりました。

七月十日の日の出は、四時四十六分、日の入りは、十九時九分、七月十一日の日の出は、四時四十六分、日の入りは、十九時九分、七月十二日の日の出は四時四十七分、日の入りは十九時九分でした。

ぼくは、アサガオが日照時間が短くなることを感じてつばみをつけるのであれば、七月十一日以降の数日内につばみがでてくると予想をしました。

アサガオがつばみをつけたのは、なんと、日照時間が短くなったと感じた七月十一日の三日後となる七月十四日でした。

アサガオは日照時間が短くなったことを感じてつばみをつける、という一つめの検証は、ぼくの予想通り数日内につばみがついたことから、成功しました。

二つめは、アサガオのつるの巻き方は、必ず左巻き（反時計回り）である、についてです。

ぼくは、アサガオのつるが出てきたとき、左巻きになるかどうか検証をしました。つるをあえて右巻き（時計回り）に紐にからませたりしましたが、時間がたつと、いつのまにか、左巻き（反時計回り）にもどっていました。

ぼくは、アサガオの観察をしていて、つるだけではなく、つばみの時も上からみると、左巻き（反時計回り）に花びらがたたまれていることに気が付きました。つばみの中心から左巻き（反時計回り）に花びらがねじれてたたまれて、咲くときは、時計回りに花びらがほどけて咲きました。

アサガオのつばみのときの様子を真上から観察すると、まるでソフトクリームを真上から見ているような気分になりました。

ソフトクリームは、コインの口のところから、左巻き（反時計回り）に下から上に向かってくるとソフトクリームが積み重なって巻かれて、上の方に向かって細くなります。

アサガオのつばみは、がくのある根元のところから上

に向かって左巻き（反時計回り）に花びらができるようにしたがって、つぼみが上の方に向かって長く伸び、真ん中で少しふっくらとふくらんで、上の方は細くなっています。

ぼくは、アサガオのつぼみとソフトクリームの二つがとてもよく似ていることに気づいた時、すごい発見をした、と思って、お母さんにすぐに教えてあげました。

お母さんは、ぼくが興奮してアサガオのつぼみとソフトクリームの似ているところを説明するのをとても真剣に聞いてくれて、

「すごい発見をしたねー」

と、目を大きくして、拍手して、ほめてくれました。

ぼくは、とてもうれしかったです。

三つめは、アサガオのつるは、巻き付くものがないときは、かなり伸びながら巻き付けるものを探す、についてです。

アサガオのつるは、支柱や紐のようなものに巻き付きながらつるを伸ばし、成長をします。

ぼくは、アサガオのつるが支柱や紐のようなものがないときに、どこまで伸びるのか、関心を持っていました。

アサガオのつるが伸びるのは、つるの先にセンサーみたいなものがあって、どこまで伸びたら巻き付けるのか、ということを感じるから、つるを伸ばしていくことができるのだろうか、とぼくは考えていました。

そこで、あえて、支柱や紐をすぐ近くに作らなかった場合に、どこまでつるがのびるのかを検証しました。

すると、アサガオのつるは、巻き付けるものがなくても、二十センチくらいまでつるを伸ばし続けました。時には、近くに伸びていたアサガオのつる同士が絡み合って、一本の太いつるようになって、より遠くへ遠くへとつるを伸ばしていきました。

ぼくがした検証方法は、つるが伸びた先に何もなければ、巻き付くことのできる棒や紐がある、という条件でした。どうして、こうした検証方法をぼくが選んだかという理由は、つるが伸びた先に何も巻き付けなるとアサガオが感じたならば、そこでつるの先は枯れる

と予想したからです。

どこまでアサガオのつるは伸びるのか、がぼくの検証したい一番のことだったので、アサガオのつるが、巻き付きたいという欲望をどこまで引き出すことができるのか、ということに検証方法の一番の課題がありました。近すぎず、遠すぎず、細すぎず、太すぎず、棒や紐をどのように設置するか、いろいろと考えて、微妙な空間を開けておきました。

結果、アサガオのつるには、伸びれば巻き付けるものがある、というセンサーみたいなものが先にあり、だからこそ、枯れることなくつるが伸び、二十センチくらいまで何もなくても伸ばし、巻き付こうとする欲望があつて成長をする、ということを検証できました。

アサガオのつるの検証には、つるが巻き付けるものの細さあるいは太さがどのくらいのものまでなら巻き付けるのか、についてもぼくは関心を持っていました。

ぼくは、細さが3ミリくらいのネットから、二・五センチくらい太い棒までいろいろと試してみました。

アサガオのつるは、細いものには、つるの長さが短いうちから、どんどんと絡みついて伸びていきました。

そして、絡みつくものが太くなると、巻き付くことができるようにつるを十分に長く伸ばしてから、巻き付いて伸びていきました。

ぼくは、アサガオのつるが、とても細くても太くても、巻き付けるようにつるの先のセンサーを使って、環境に適応して、子孫を残すために、たくましく成長し、花をつけようとしていく様子を目の当たりにして、植物の生命力はすごいなあと思いました。

四つめは、開花する前の花と開花した後の花のつくりを比較し、自動受粉の仕組みを調べる、についてです。

アサガオは、自動受粉する植物です。ぼくは、自動受粉の仕組みを調べるには、咲く前の晩のつぼみの中のものとおしべの長さ等の様子を確認してから、咲いた後の花の中の様子を確認し、どのようにめしべとおしべの様子に変化が起るのかを確認しようと考えました。

まず、次の日に咲きそうなアサガオのつぼみを探し、

夜になった頃に、めしべとおしべを見えるように花びらを指で丁寧に割いて、中の様子を観察をしました。

この時は、めしべが一番長く、五本あるおしべは、多少の長さの違いはあるものの、どれもめしべより短くて、花粉をまだ出していませんでした。

アサガオの花が自動受粉を成功させるためには、開花にあわせておしべが伸びて、めしべの先に花粉を受粉させなければいけません。

ぼくは、開花前に短かった五本のおしべが、開花後、めしべの辺りに集まるように伸び、花粉をいっぱいつけているか、を確認して検証しようと考えました。

次の日の朝、花びらを割かれたアサガオのつぼみは、何事もなかったかのように、五本のおしべを伸ばし、自動受粉を成功させていました。

アサガオは、つぼみのときに、花びらを割かれていても、アサガオそのものが「花を咲かせる」というメカニズムを持っていて、おしべをめしべよりも長く伸ばし、おしべの先からは花粉をたくさん出して、めしべに受粉

をさせていました。

ぼくは、ある日、つぼみのまま咲くことなく次の日の朝にしておいたつぼみを採取し、分解しました。

ぼくは、分解して、めしべがおしべよりも長いところ注目しました。

めしべの方が五本のおしべよりも長いということは、自動受粉をすることなく、しおれたということです。

この事実は、アサガオの花が、「開花した」というアサガオの仕組みの中のスイッチが入ることによって、おしべがめしべよりも伸びて自動受粉するのであり、花びらが「開く」という事実がなければ、スイッチが入らないので、自動受粉という次のステップにつながらないことを証明しているとぼくは考えました。

五つめは、アサガオの花は、前の日が暗くなってから九〜十時間後に開く(つまり、朝日を受けて「朝」と感じてから開花するわけではない)、についてです。

ぼくは、同じ環境に育っているのに、同じ時間に既に開花しているアサガオとまだつぼみのままのアサガオが

あることに気が付きました。

アサガオの花は、朝が来たことを太陽の光等を感じて開花するのではないことは、朝が来て、開花したものがあつた一方、つぼみのままだったものがあつたことや、アサガオが太陽の光を受けて、一斉に開花するわけではない、という事実から、確認することができました。

六つめは、アサガオの花びらが五枚あること、花粉の様子等を観察する、についてです。

アサガオの花びらは、くつついていますが、外側の輪郭をよく見ると、三日月のように、少し膨らんでいるところと、少しへこんでいるところが、五か所あります。これが、一枚ずつの花びらの境界線になっているとぼくは考えました。少しへこんでいる五か所のところには、アサガオの花の内側に、白い筋が少し長いところがあつて、星のようになっています。

ぼくは、小さいころ、アサガオの花を描くとき、大きく一つの丸を描いて、その中に星の形を描いて丸の内側と星の外側の部分を色で塗っていました。ぼくは、花び

らが五枚だからこのように描くのだという明確な認識をもって描いていたわけではなかったけれど、今はその意味がよくわかります。

アサガオの花びらは、触るとつるつるしていて、しかも、とても薄いです。でも、ぼくが観察をした間、花びらの上に花粉がこぼれ落ちたアサガオの花をいくつも見つけましたが、おしべから花粉がこぼれ落ちても、花粉そのものが花びらから落ちることはありませんでした。花粉は、一つ一つが丸い形の小さな粒になっていて、ちゃんと花びらの上に残っていました。

ぼくは、花粉が花びらからこぼれ落ちないのは、アサガオの花びらに、何か理由があると考えました。

ぼくは、もっとよく調べるために、顕微鏡を用意して、観察をしようと決めました。

そこで、顕微鏡を用意できた日の朝に咲いた薄紫色のアサガオの花を使って、顕微鏡で観察をしました。ぼくは、まず、朝に咲いたアサガオの花の中から花粉を出していたおしべにスライドガラスを擦り付けて、花粉を落

とし、そのスライドガラスを顕微鏡にセットして、花粉を拡大して観察をしました。

花粉の周りには、凹凸があるのが見えました。花粉が花びらの上にこぼれ落ちても、花びらの上から落ちなかったのは、花粉の周りに細かい凹凸がたくさんあるからだということがわかりました。

なにより、花粉の周りがある細かい凹凸がたくさんあることで、めしべの先にくっつきやすいような形になっていることがよくわかりました。

ぼくは、次に、花びらの表面を観察しました。アサガオの花の表面は、とてもきめが細かくて、なめらかでした。

ぼくは、アサガオの花の花びら一枚分に割いたアサガオの花びらを顕微鏡にセットして、表面の様子を観察しました。アサガオの花びらの表面には、とても細かくてつるつるした小さな細胞が、たくさんぎっしりとつまっています。

ぼくが、アサガオの花びらを指で触ったときに、とて

もなめらかで、すべすべしていて、でこぼこが感じられず、つるつるしたのは、こんなにも小さな細胞がたくさん、ぎっしりとつまっていたからなのだと、ぼくは考えました。

そして、花粉が花びらにこぼれ落ちたときに、花びらに残っていたのは、とても小さな細胞がぎっしりとつまっていたのも、もっと小さな花粉にとっては、細胞と細胞の間みぞ（すきま）があるから、すべり落ちることなく、花びらの上に残っていたのだと、ぼくは考えました。

次に、ぼくは、葉っぱを顕微鏡で観察しました。

ぼくは、葉っぱの観察には、表側よりも裏側の方に気孔がたくさんあることから、裏側の方がいろいろわかると考え、裏側を調べました。

葉脈が白い筋で、緑色のところが葉緑素で、葉緑素には、黄色い小さな点がいくつもありました。これは、気孔といって、葉っぱが呼吸をするところです。

顕微鏡で観察をすることができて、ぼくは感激しまし

た。

ぼくは、お母さんを呼んで、アサガオの花びらと葉っぱを顕微鏡から観察した様子を再現して見せてあげました。お母さんは、ぼくに、

「すごいものを見せてくれてありがとう！」

と興奮した様子でほめてくれました。

ぼくは、ほかに、観察をしていて、わかったことがあります。

アサガオの花は、つるの下の方から上に向かってつぼみができ、咲いていくことがわかりました。

アサガオのつるは、ぼくが毎日記録したところ、暑い日は一日に十センチくらい伸びて、長いものは三メートルを超えました。

ぼくが植えたアサガオは、全部で一八本の芽を出して、八月三十一日までに一六二個の濃いピンク色や薄紫色や濃い紫色の三種類の花をたくさん咲かせてくれました。

花の大きさは、直径が十センチくらいのものが多かったけれど、中には五〜七センチくらいの少し小さいもの

もありました。

ぼくが驚いたのは、アサガオの花は自動受粉なので、雨が降るなどの天候不順がなければ、全部の花が受粉するのだと思っていたけれど、たくさんのお花が受粉に失敗をして、種を作ることができなかったことです。

アサガオの花が咲いて、翌日にしおれると、数日くらいでがくの中にある子房が膨らんできます。そうすると、受粉に成功をして、種を作り始めていることが分かります。しかし、受粉に失敗をしたアサガオの花は、がくの中にある子房が膨らむことなく、そのまま黄色っぽくなって、茶色になり、ひからびたようになって、その部分だけが、枯れて、落ちます。

一方で、受粉に成功をしたがくの中にある子房は、ふくらみ始めてから半月くらいもするとパンパンに大きく膨らんで、まん丸になります。さらに半月くらいの間、黄緑色のまん丸のまままで過ごした後、その部分だけが少しずつ黄色っぽくなって、茶色になっていきます。

ぼくは、初めて膨らんだがくの中にある子房が茶色に

なったのを見つけたとき、種ができる途中で枯れてしまったのだ、と思つて、がくの中にある子房のところをつみとつて、中の様子を確認しました。

すると、がくの中にある子房のところだけが茶色くなったのは、中で種がちゃんとできて、黒く硬く、ぼくが五月に種をまいたあの種とおなじようになっていたからでした。

それからのぼくは、ふくらんだがくの中にある子房が茶色くなったのは、中で種が成熟したから茶色くなったのであつて、枯れたのではないので、茶色くなつたまん丸のがくの中にある子房をみつけると、嬉しくなりました。

九月に入り、秋分の日を過ぎたころ、気温が少しずつ涼しくなり、日の長さも短くなつてきたのをアサガオが感じたからなのか、アサガオの花が咲かない日が一週間ほど続きました。

しかし、九月の終わりから十月に入つてすぐの頃、また気温が三十度を超えるような毎日になったのをアサガ

オが感じたからなのか、また、アサガオの花を毎日のように咲かせ始めました。

アサガオは、暦の上では秋になつても、気温が高くて一定の条件を満たせば、毎日のように花を咲かせて、受粉をして、種を作ることができるということがわかりました。

二〇二二年十月六日の雨が降つて急速に秋が深まった寒い日、薄紫色と濃い紫色のアサガオの花が二つずつ咲きました。この日までに咲いたアサガオの花は、二四五個になりました。その後は、数日おきにアサガオの花が咲き、十月十三日には二四九個になりました。

ぼくは、周りの木が落葉をはじめ、冬の支度をはじめているにもかかわらず、まだ、全ての葉が枯れることなく緑色をして、光合成をして栄養を作り、花を咲かせ続けるアサガオの様子を見て、その生命力の強さにとても驚きました。

種の収穫は、がくの中にある子房がまだ茶色になつていないものもたくさんあるので、全てを終えていません。

しかし、ぼくが収穫をしたアサガオの種は、二〇二二年十月六日の時点で、一〇四粒、十月十三日の時点で二九粒でした。

アサガオの花が一つ咲いた後、できた種の数は、一粒から五粒のものまでいろいろありました。アサガオの花が一つ咲いた後、多いときは六つの種ができることを考えると、ぼくが収穫したアサガオの種は、決して多い数ではないことがわかりました。

というのは、咲いたアサガオの数二四五×一つのアサガオの花が咲いた後にできる一番多い種の数六個÷一四七〇です。でも、ぼくが収穫したアサガオの種の数は、一二九粒だから、一二九個÷一四七〇個≒〇・〇九となり、一割にも満たないのです。

ぼくは、収穫できたアサガオの種の数の割合が少ない理由を考えました。

一つ目は、アサガオの花が咲いても、受粉に失敗して種が全くだけなかったものがたくさんあったことです。アサガオの花が咲いても、必ず受粉に成功するわけでは

なく、結果として、種ができませんでした。

二つ目は、アサガオの花が咲いて、受粉に成功して、種ができて、一つの子房の中にできた種の数が、一粒から三粒のように、少ないことの方が多かったことです。一つの子房の中に種が六個あることの方が珍しいくらいでした。

それでも、ぼくが五月にまいたアサガオの種は一八粒ですが、十月十三日の時点では一二九粒の種を収穫できたので、一二九÷一八≒七・二倍にアサガオの種が増えたことになりました。

それに、一つの子房の中にできた種の数は少なくとも、数が少ないのがよかったのか、ぼくが五月にまいた時の種の大きさよりも、一つ一つの種が大きいです。種が大きいということは、丈夫に育ってくれるということでしょう。収穫できたアサガオの種の数が少なくても、来年の春、一つ一つのアサガオの種が丈夫に育てば、たくさんのお花を咲かせて、たくさんのお種を残していくことでしょう。

アサガオの花は、たくさん花を咲かせて、少しでもたくさんの種をつくって子孫を残せるように、夏のような暑い日でなくても花を咲かせて種をつくろうとしているのだ、とぼくは考えました。

ぼくは、アサガオの生態を知れば知るほど、とても興味深いと思いました。



小学生の部  
選考委員特別賞

## あさのあつこ賞

しょうゆがみをつくるけんきゆう

さいたま市立尾間木小学校 二年

川名 蒔子

わたしは、しょうゆかすをかみにできるということを  
しました。りゆうは、おかあさんがインターネットで  
しらべたからです。おかあさんがなんでしらべたかせつ  
めいします。

五月十五日にかぞくで金ぶえしょうゆがっ校にいきま  
した。しゃちょうさんにしょうゆのつくり方をおしえて

もらいました。

まずまめを水に一ばんひたします。つぎにだいをむ  
します。こむぎをいってくださいます。おまめとこむぎを  
いっしょにしてこうじぎんをいれます。五日たったらし  
お水をいれます。おけにいれて二年間おいておきます。  
しばって火にかけてかんせいです。

さいごに、しょうゆかすがあるところに、つれていっ  
てくれて、こまっていることは、しょうゆかすをたくさ  
んすてなきやいけなくてお金がたくさんかかることだと  
いっていました。でもぜんぶをすっているわけでは、あ  
りません。うしのえさや、さかなのえさにもできていま  
す。しゃちょうさんは、ぜんぶのしょうゆかすをりさい  
くるとしたかったといったのでしょうゆかすをもらいけん  
きゆうをはじめました。

しょうゆかすのみためは、ちやいろだけどしょうゆよ  
りは、うすいかんじでした。さわるとふにやふにやして  
います。ふくろの上からさわってもしょうゆのにおいに  
なります。

おかあさんがインターネットでしらべたらキックコーマンという大きなかいしゃは、しょうゆかすをかみのざいりょうにできるほうほうをしていることがわかったので、そのほうほうをしらべて金ぶえしようゆのしゃちょうさんに、おしえてあげたいとおもいました。

だけどそのほうほうがわからなかったからかみのはくぶつかんにいってみました。かみのはくぶつかんでは、かみをぎゅうにゅうパックでつくれるのでたいけんしてみしました。かざりをつけてみました。

いえでつくったかみには、しょうゆかすをいれてみたので、ちやいろのかみができました。そのちやいろのかみは、プツプツしたものがついていて、それがかざりみたいだったので、かざりはいらなと思います。そのかみは、えんぴつだとうすくなっちゃうけど、マイネームペンだときれいにかけます。

つぎは、かみのつくりかたをしようかします。まず、ぎゅうにゅうのパックをひらいて、一パックで八こに切ってしょつきをあらうせんざいで、グツグツにます。

さめてさわれるようになったら、フィルムをはがします。フィルムは、りょうめんについているので、つるつるするしろいものもとりましょう。フィルムのなかにはさんであるかみをちぎって水としょうゆかすをかみといっしょにミキサーでドロドロにします。そのあと水とドロドロのかみをタッパーにいれます。それからすきわくをつかってしょうゆとかみのどろどろのものをすくいます。このかみをしたじきにはりつけてうつしました。たおるとしんぶんで水けをとってベランダでほします。アイロンもかけていいです。

つぎは、フォトフレームでつくれるすきわくのつくりかたをしようかします。フォトフレームについているいたをはずして、あみどのあみをつけます。せつちやくざいでつけます。すきわくは、かみのはくぶつかんでもかえるけどつくったほうがやすいです。

しょうゆかすをへらせられるほうがかわかったから金ぶえしようゆのしゃちょうさんにおしえてあげたかったので、てがみと自分で作った本をおくりました。本に

は、しょうゆがみの作り方を書きました。この本は、おもしろいから、しょうをとったら、見せます。てがみは、こんなてがみです。

「金ぶえしょうゆのしゃちょうさんへ」

まえしょうゆのつくりかたをおしえてくれてありがとうございます。ありがとうございます。

『しょうゆかすがたくさんありすぎて、こまっている。』  
と聞いていたので、しょうゆのかすを、へらせるように、けんきゅうしたらしょうゆのかすを、へらせるように、できました。なので、そのけんきゅうを、本にしておきます。いつ、あえますか。川名まき子。」

そうしたら、おかあさんの、パソコンで、メールがきて、きていいことになりました。

八月八日また、金ぶえしょうゆにいきました。さき、おみせにはいったら、しょうゆかすの紙がしょうゆのビンについていました。わたしは、びっくりしました。しょうゆかすの紙がしられていたからです。しょうゆかすの紙が、はってあったのに、こさせてもらえたから、なん

で!!しってたのにと思いました。

じむ室でしゃちょうさんとはなしました。かみのつくりかたは、わかるけど、おきやくさんが、けんきゅうをがんばってくれたから、はなしたかったと、いつていました。かみのつくりかたをなんでみんなにおしえないのかきいたら、おきやくさんがすぎて、あたらしいことを、やる時間がなくて、できないといっていました。ゆげたしょうゆというこうじょうは、ちいさいのに、ちかくにばくじょうがあるから、しょうゆかすをうしさんのえさにして、しょうゆかすを、すていないみたいです。

わたしは、すっきりしませんでした。なんですすっきりしなかったかは、わたしのしょうゆ紙をおしえてあげて、わかってたけど、あたらしいことをやるのは、むりですっていわれちゃったからです。でも、おしえてあげたから、うれしかなしいってかんじです。このかいしゃは、いまでもしょうゆかすを、すてつつけています。がっかりです。



小学生の部  
選考委員特別賞

## 最相葉月賞

### 私ができる恩返し

墨田区立第四吾嬬小学校 六年

中村 心美

大きなたらいにバスタオルとお気に入りのアロマオイル。それを持って階段を降りて一階へ行く。階段を上るのが辛くなった祖父は二年前に部屋を一階へ移した。お湯を沸かし、たらいにはった水と合わせていい湯加減にする。今日の香りを祖父と相談し、アロマオイルを垂らす。祖父のお気入りはラベンダーだ。部屋にほんの

りと香りが広がり、足湯の時間が始まる。足がむくんでしまった祖父に、足湯をしながらマッサージをするのが夏休みの日課となっていた。初めは母と一緒にやっていたが、今では私一人でも手慣れたものだ。

足湯をしていると、テレビで戦争の話題が始まった。もうすぐ終戦記念日だ。私が

「じいじ、戦争を体験してたんだけ。」  
と聞くと、祖父がぼつりぼつりと語りだす。

祖父が小学一年生のころ。祖父は母、妹、弟と一緒に荒川の近くの家の防空壕の中にいる。父は、見回りに行っていて家にはいない。防空壕に入るのは、父の言いつけだ。攻撃されたとアラームがなった。祖父の胸がドキドキとなつている。すると防空壕のドアをたたく音が聞こえた。誰かが叫んでいる。

「逃げてください！ここにいたら死んでしまいます！」  
町会の見回りの人だった。祖父たちはあわてて外に出た。自分の家も周りの家も燃えていて、暑苦しい。はやく逃げないと！祖父たちは、たくさんの人が逃げていく場所

へ向かった。しかし、その場所へ行くには橋を渡らないといけないのだが、橋は壊れてしまっていた。橋が壊れているので戻る人達と壊れていることも知らずに向かう人達がぶつかった。そんな状況の中で、弟が転んでしまった。逃げる人々は、弟をよけようとしながらも踏んでいく。弟は母に助けられた。けれど、周りの人は誰も助けられなかった。自分のことで精一杯で周りが見えなくなってしまうほど戦争は大変だった。祖父たちは、橋が壊れていることを知り引き返した。そして、以前、父から教えられていた安全な場所へ避難した。そこはゴミの焼却場。鉄でできていて安全だからだ。祖父たちは、そこで一晩過ごした。

次の日。空は、ピンク色だった。町中の煙といつもよりも真つ赤な太陽が混ざったからだ。いつもと違う空に祖父は驚いた。しばらくすると、祖父の姉が会社の人達と一緒におにぎりを作って持ってきてくれた。そのときのおにぎりは、いつもより何倍もおいしかった。

祖父の話聞きながら、私はマッサージの手が止まっ

た。ピンク色の空とは、きつと悲しい色だっただろう。想像していた以上に戦争は、恐ろしかった。

私は、祖父の弟が転んだ話が忘れられない。普段なら、転んでいる子がいたら助けてあげるのは、当たり前のことだ。しかし、戦争になると、助けてあげられなくなる。私は、助けてあげない人達をひどいと思った。しかし、本当に戦争が起きたら私は、祖父の弟を助けてあげられるだろうか。

戦争では失われるものしかない。ぜったいにやってはいけないと改めて感じた。最近、戦うゲームで遊び、盛り上がっている友達がいる。ゲームで遊ぶことは、決して悪いことではない。しかし、そのゲームをやったことで戦うことはかっこいいと勘違いしないでほしい。

戦争を実際に体験していない私は、戦争の全てが分かったわけでもなければ、戦争の景色を見たこともない。しかし、今、戦争を少しでも知っておかなければ、戦争を体験した人が日本からいなくなるとき、戦争の怖さを伝える人がいなくなってしまう。戦争を少しでも理解

して、それを伝えることが大切だと感じた。

戦争の話が隣で聞いていた妹は、分からない言葉がある」と、

「それって、どういう意味？」

と聞くが、足湯のお湯で遊ぶのに夢中だ。祖父が戦争を経験したのは、一年生。妹も一年生。同じ年の妹にも私にも戦争は難しい。私たちは、戦争を知らない世代なのだ。そんな妹の様子を見た祖父は、

「じいじも、なるべく戦争の話はしたくないなあ。」

と大人になった時の話をしてくれた。

祖父は、そのころ「ミスターロボット」と呼ばれていた。

今のようにロボットをプログラミングで作るのではなく、ブリキのおもちゃを作っていた。祖父は、海外へもブリキの技術を教えに行った。また、工場で部品も作っていた。車やコピー機の小さな部品、ハンガーなど種類は様々だ。祖父の話聞いていたら、私はまだ祖父が工場で仕事をしていた時のことを思い出した。

祖父の工場は、我が家の一階。ガタゴト動く機械や積

み重なった段ボール、コンクリートの壁など力強い感じだ。祖父の人差し指は、短い。仕事をやっている途中、大きな機械に挟まれてしまったのだ。その話を聞いて私は、途端に目の前の機械が恐ろしく見えた。祖父は、かつて作ったブリキのおもちゃを私と妹にくれた。くるくる回るテントウムシに、とことこ歩くかめ。どのおもちゃもおもしろかった。母が、

「包丁の切れ味が悪くなった。」

と言った時は、包丁を研いでくれた。母はとても助かっていた。

さらに、祖父は町会長もやっていた。

「地域のためなら。」

とお願いされたことは、全て断らなかった。私は、祖父が頑張ってくれたおかげで近所の人と仲良くなれた。

「いってらっしゃい。」

「お帰りなさい。」

といつもあいさつしてもらえる。だから、一人で暗い道を歩く時も少し安心できる。当たり前だと思いがちだけ

れど、改めて考えてみると当たり前ではないことに気付いた。

町会長はボランティアだ。とても忙しそうで町会長をやる意味はあるのかと不思議に思った。私が

「なんで、町会長になったの？」

と聞いたら、祖父は

「戦争のとき防空壕に入っていた自分と家族を救ってくれたのは町会の人だったんだよ。だから自分も色々な人の役に立ちたい。」

と教えてくれた。祖父にとって町会の人命の恩人だったのだ。

祖父は、今はもう工場も町会長もやめてしまった。けれど祖父が作ったたくさんの部品の誰かの生活の役に立っているし、まだ町会の相談にも乗っている。地域の人とも、とても仲良しだ。

私は、祖父にとっても感謝している。祖父は私が留守番をする時、寂しくならないように一緒に留守番してくれる。私の嫌いな虫がいたら退治もしてくれる。誕生日も

祝ってくれるし、クリスマスプレゼントもくれる。私が毎日のように使っているランドセルもプレゼントしてもらったものだ。

祖父からは物を大事にすることも教わった。祖父は壊れたものでもすぐには捨てず、まずは直そうとする。SDGsの立派な見本だ。

そんな祖父に私も何かしてあげたい。だから足湯をしたり、祖父の部屋の掃除をしたりしている。けれど、返しきれないくらい祖父にはたくさんのことをしてもらっている。私の祖父への恩返しは足りているだろうか。まだ何かできるかもしれない。

恩返しとは、直接何かしてあげるだけじゃない。自分が頑張っている姿を見せることでもあると母に教えてもらった。だから、習い事を頑張ったり、テストで良い点を取ったりして、頑張っている姿をたくさん見せたい。

色々なことをおしゃべりしていたら、お湯が冷めてしまった。たらいのお湯を流して、祖父の足をふく。たらいとバスタオルとアロマオイルを持って二階へ戻る。

ちょうど母がテーブルに昼ご飯を並べているところだった。一仕事終えた後の昼ごはんは格別だ。けれど、戦争中のおにぎりにはかなわないだろう。



小学生の部  
選考委員特別賞

## リリー・フランキー賞

僕は、いつだって空を想う

大分市立滝尾小学校 五年

柚野 薫三郎

毎朝、僕はこの言葉で学校に送り出される。

「頑張らなくていいからね。ムリしないでいいよ。いつてらっしゃい」。友だちに聞くと「頑張ってるね。いつてらっしゃい」と言われるらしい。「なんで僕は頑張らなくていいのだろう。お父さんもお母さんも僕に何も期待してないのかな?」と思ってしまう。お母さんは何度も同じ

言葉をくり返す。しつこいしうるさい。僕は「わかってる」といつも怒って言い返して家を出る。

学校に行きたくないと思う日もあるけど、学校では友だちと会えるから楽しい。勉強は、あまり好きではないけれど、楽しい時間もある。

学校が早く終わったときは、たくさん友だちと遊べるからうれしい。ある日、友だちとゲームをして遊んでいたときのこと。

「死ぬ」

「もう、死んだ?」

「やっつけろ」

そんな言葉を繰り返す。友だちも楽しんでるからその時は、深く考えなかったけど、後から何だかいやな気持ちになった。少しだけ胸が痛くなった。その夜、幼稚園のころの出来事を思い返した。

僕には、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいる。いつも2人は僕の取り合いをします。

「にいにいの方が好きやろう?」

「ねえねの方が好きやろう?」

いつもいつも、取り合いごっこ。それは僕にとつて、気持ちのいい時間だった。だつてお兄ちゃんもお姉ちゃんも僕のことが好きだとわかるから。

そんな毎日がある日突然なくなった。お兄ちゃんがお家に帰らなくなった。みんな、みんな、泣いている。お父さんもお母さんも。おじいちゃんもおばあちゃんも。きつと、お兄ちゃんがいなくなったから……。

僕にはわからないことがひとつあった。それは、お兄ちゃんは、どこに行つたかわからないこと。きつとお父さんもお母さんも、みんなもわからないから泣いているんだと思つていた。それでも僕は「お母さん、お兄ちゃんは、どこにいるの?」と聞くしかなかった。

「どこにいるのかなあ」とお母さんは答えた。やつぱり、お母さんも知らないから悲しいのだ。そう思った。お母さんの目からまた涙がこぼれていた。

もうすぐ七夕だ。

幼稚園の頃、七夕かざりをたくさん作った。僕は折り紙で作る輪かざりが好きだった。色んな色を使って、長くつくると、きれいな虹みたいになるからだ。

その年の短冊には、お願いごとを書かなかつた。願い事がわからないし、考えられなかつた。そんな時に、七夕のお話しを先生がしてくれた。一年に一度だけ空の上でおり姫とひこ星が会える話だ。

友だちのさきちゃんがその話を終えたとき、「私のおばあちゃんがなくなつたけど、空にいるよつてお母さんが言つていた」と教えてくれた。僕は、その話を聞いて早くお家に帰つてお母さんに教えてあげようと思つた。幼稚園から帰る車の中ですぐに僕は、お母さんに話した。

「お兄ちゃんはねえ、空にいるよ。お星さまになつて僕たちを見ているよ」

「誰から教えてもらったの?」びっくりした顔でお母さんがきいてきた。

「さきちゃん。先生も七夕の話をしてくれて、おり姫とひこ星も空にいる。お兄ちゃんも空にいるよ」と僕が言った。

お母さんは「お兄ちゃんは、くんちゃんのことずっと見守ってくれているね」と言った。

僕は「うん、うん、だからお母さん大丈夫。お兄ちゃん、空にいるから大丈夫」と言った。お兄ちゃんがいることがわかって少しうれしくなった。お母さんもうれしそうだった。

僕は願い事を短冊には書けなかったけど、「お兄ちゃんとまた、一緒に遊べますように」と思った。

ある夜の帰り道、車の外を眺めていると一つだけとても明るい星が僕についてきた。びっくりして大声で「お母さん、あの星、絶対お兄ちゃん。だって、さっきから、ずっと僕についてくるよ。僕と鬼ごっこしてくれているみたい」と言った。

「お兄ちゃん、くんちゃんと遊んでくれているね。うれ

しいね」。お母さんが言った。

「うん、うれしい。お母さんもうれしい?」

「すごく、うれしいよ」

ずっと、ずっと、お兄ちゃんは、お空の上で見守ってくれる。時々遊んでもくれる。

僕は、つらい時や悲しい時、楽しい時も空を見る。見上げたら大好きなお兄ちゃんを感じ安心する。

僕は、思う。死んでも終わりではない。ゲームの世界では死んだらその時のゲームは終わってしまう。けれど僕の世界では、死んでもずっと生きていられる。僕が、ずっとお兄ちゃんのことを感じられるように、ほかの誰かの中で生き続けることができると思う。

僕も、これからも生きていく。

お母さんには悪いけど、みんなも頑張っているから、僕も頑張る。少しだけ無理をすることもあると思う。



中学生の部

# 大賞

## 鳥取に飛来する黄砂

鳥取大学附属中学校 一年

田村 萌梨

と、きれいな鉱物がはつきりと見えます。

私は、小さい頃からアフリカやアジアの絵本が大好きで県立図書館や市立図書館には置いていない特別な絵本を国際交流センターの図書室で読むのが好きでした。

幼稚園の頃、黄砂のセミナーに参加したことがあります。砂漠で生活しているラクダが砂嵐で目が真っ赤になっっている写真を見たのを覚えています。

小学生になり、鳥取大学乾燥地研究センターで開催された夏休みの公開講座に友達と一緒に参加するようになりました。塩害について実験したり、植物が水を吸う力を体験したり、先生のお話を聞いたり、アフリカの食べ物を食べさせてもらったりと楽しい時間を過ごしました。

### 【ジュニアドクター育成塾に参加】

私が小学校五年生の時、鳥取大学ジュニアドクター育成塾に参加しました。ジュニアドクター基礎コースでは、環境分野について毎回いろんな分野の先生が講座を開催してくれました。講義内容や実験の記録の仕方、グループで議論した内容などをまとめてレポートを提出する

### 【不思議な鉱物との出会い】

私の住む町に黄砂が飛来してくる様子を大学の先生と一緒に、二年間かけて観察しています。四マイクrometer以下の小さな鉱物が日本から何千キロメートル離れた砂漠から中国大陸を横断して、私の住む鳥取市まで飛来してくる様子は感動的です。また、顕微鏡でのぞく

と、担当の先生から毎回くわしいコメントがもらえます。先生からのコメントは、いつもやさしくて頑張りうという気持ちやワクワクする気持ちをもたらるので、すごく楽しかったです。また、どうしたらもっと良くなるのかも教えてもらいました。資料の作り方についてもヒントをいくつかもらいました。

最終日は、自分が興味のあるテーマでプレゼンテーションをしました。私は、中学生のお兄さんと一緒にグループを組んで発表しました。乾燥地研究センターでやった砂の実験を丁寧にまとめました。また、乾燥地研究センターでもらった砂の様子を毎日観察し続けました。生まれて初めてのプレゼンテーションはとても緊張しました。

もっともっと詳しく勉強したいと思い、次のステップ「ジュニアドクター育成塾探究コース」で黄砂について勉強を始めました。乾燥地研究センターでの受け入れは初めてだったそうで、先生たちから「試行錯誤して頑張りましょう。」とメッセージをもらいました。

乾燥地研究センターというのは国の研究機関で、砂漠化の研究、乾燥地農業の研究、環境を守る研究をしています。世界中から研究者たちが集まっているので、センターの壁にはいろいろな言語のポスターが貼ってあります。だから外国にいるような気分になります。

小学校六年生の夏から、大学での本格的な研究が始まりました。小学校は、小規模校転入制度を使って少し遠い学校に通っていたので、週一回のサンプリングの日は大変でした。学校が終わったらバスと汽車を乗り継いで大学に行きます。地域学部の先生がサンプリングに付き添ってくれたので、先生の研究室から屋上の実験するところまでおしゃべりしながら歩きました。私が一番好きな時間でした。

そして私は、実験に集中できる環境と大好きな陸上ができる環境を考えて、六年生の夏に、研究施設がある鳥取大学の附属中学校を受験することを決意しました。

#### 【黄砂の研究のスタート】

黄砂というと「車が汚れる」、「身体によくない」など

あまり良いイメージはありません。私もはじめは、そうでした。

私の研究は、鳥取に飛来する黄砂を手作りの装置でサンプリングし、季節によってどのような変化があるかを調査することでした。サンプリングした黄砂については顕微鏡で確認をします。

私は手作りでサンプリング装置を作りました。壊れたとき、自分で修理ができるようにするためです。ゴムやクリップを使用して細かいところにも工夫しました。特に気を付けたのは、風で飛んでいかないようにしたことです。それは自分のデータを失うだけでなく、ものを壊したり、人にけがをさせてしまったりする恐れがあるからです。サンプリングは、週に一回、同じ時間に鳥取大学地域学部の屋上で行いました。

黄砂は大陸から日本海を越えて日本に飛来するのでサンプリング地点として日本海から直接影響を受ける鳥取大学はベストな場所です。鳥取大学の時計台がある地域学部の屋上からはきれいな景色が見渡せます。北側は日

本海がみえて、南側は日本一大きな湖山池が見えます。日本海からの風が湖山池側まで吹き抜けるため、黄砂をサンプリングするにはとても良い場所です。週に一回十七時にサンプリングしました。

夏の暑い日も雨の日も、冬の寒い日も。時には大雪で雪かきのスコップを持って雪かきしながらサンプリング地点までたどり着いたこともあります。一緒にサンプリングにつきそってくれた先生と雪の中、大の字になって寝ころんだこともあります。地域学部の先生は、毎週私のサンプリングに付き合ってくれたので、本当に感謝しています。実験が楽しくできるように、お話をたくさんしてくれました。学校のこと、部活のこと、好きなこと、将来のことなどたくさんお話ができたのも楽しく続けることができたうれしいことでした。

サンプリングというのは、手作りの装置に設置されている漏斗を純水で洗浄して（この作業で漏斗についての沈着物を水の中に入れることができるので、沈着物をサンプリングすることができる）沈着物を集める作業です。

「雨がたくさん降った時は、漏斗とペットボトルの接続部分まで水がたまっているので、細い管を注射器につけて回収します。雪の日は漏斗にもった雪を純水で洗った容器にいれるため、消毒したおたまで雪をすくいました。その後、回収した水に圧力をかけてる過し、黄砂をフィルターに集めます。ここまでの作業は、はじめ四十分くらいかかりました。今では、少し早くできるようにになりました。でも、大雨が降ったときは大量の水があるので何時間もかかることができました。なぜなら、一回二百ミリリットルずつしかる過できないからです。

また、サンプリングしたフィルターをパソコンに取り込むのは、とても大変な作業でした。光が入ってしまうと色の変化が分かりにくくなるので、段ボールで囲んでスキヤナーで読み込み、それらをパソコンに保存しました。これは、週末になるとまとめてやる作業なので、一日に五時間近くパソコンの前で集中する日もありました。取り込んだデータを比較すると、「黄砂が飛んできている時期」「黄砂が飛んできていない時期」「黄砂と大

気汚染がくつついた時期」「大気汚染物質だけの時期」に分けられることがわかりました。

黄砂は、春にもっとも多く飛来するので、春は茶色のフィルターが目立ちます。反対に夏は、黄砂があまりないので、白っぽいフィルターのままです。北京市の暖房開始が十一月中旬ごろで、その時期は大陸からの大気汚染物質も飛来してくるため、冬は黒色のフィルターが目立ちます。冬から春にかけては、大気汚染物質と黄砂がまじって茶色のフィルターが多くなります。

黄砂は砂漠から飛んできた鉱物で、四マイクロメートルくらいの大きさです。大気汚染物質の $\text{pm}2.5$ というのは $2.5$ マイクロメートル以下の大きさを意味するので黄砂と大気汚染物質の大きさは違います。大気汚染物質については、難しくて今の私には詳しくはわかりません。しかし、大気汚染物質の粒子は小さいので水に溶けてフィルターが黒くなることもあるそうです。

乾燥地研究センターのマイクロスコプという顕微鏡で黄砂をみせてもらいました。きれいな鉱物がキラキラ

していました。透明で角張った鉱物粒子が黄砂だと教えてもらいました。今まで、黄砂は身体にも環境にも悪いからよくないと思っていましたが一瞬にして、明るい気持ちになりました。すごく感動しました。顕微鏡をのぞくと、未確認生物や花粉、いろんなものが見えて、とさどき歓声をあげてしまいました。

#### 【サイエンスカンファレンスに参加】

全国から集まったジュニアドクター育成塾の生徒たちの発表会（サイエンスカンファレンス）に参加することになりました。本当だったら、東京で開催される予定でしたが、コロナが流行していたのでオンラインでした。

十分間の発表のあと、十分間の質疑応答、午前と午後二回発表しました。発表は練習していたし、オンラインだったので、あまり緊張しませんでした。質疑応答は午前、午後合わせると二十分間違う質問でした。審査員の先生（他の大学の先生方）からたくさん質問がありました。質問に答えるために、事前に想定質問と回答案を用意しておきました。二十個くらいの質問に対応で

きるように準備しました。しかし、専門分野が違う先生が多かったので、想定外の質問ばかりでびっくりしました。でも、頑張つて答えました。休憩時間は、ジュニアドクター育成塾の事務の先生と一緒に大学の広場でお弁当を食べたり、一緒に大学構内を走ったりしてリフレッシュしました。

一日目のサイエンスカンファレンスは全国からの発表者たちがそれぞれ審査員の先生に発表を聞いてもらう時間でした。しかし、オンラインだったので他の人たちの発表は聞くことが出来ませんでした。終了後に、発表者のビデオが送られてきて自分で聞きました。なぜなら、次の日のサイエンスカンファレンスで、グループにわかれての意見交換があるからです。自分の発表をさらにまとめた資料を作成し、グループで討論しました。司会の先生や審査員の先生からもたくさん質問を受けました。その中で共通していたことは、みんな学校の勉強や部活以外にもたくさん研究に関する勉強をしているという事です。受け答えができるのもその努力があるから

なのかもしれません。私は、最終的にプレゼンテーション賞をもらうことが出来ました。鳥取大学の先生方も「よく頑張ったね。」と喋ってくれてうれしかったです。私は、一年目の研究だったので来年も頑張ろうという気持ちになりました。

【悔しいという思い】

私の住む町には鳥取砂丘があります。「飛来してきたものは、本当は、黄砂じゃなくて鳥取砂丘の砂じゃないの?」という審査員の先生からの質問に、私は大きなショックを受けました。

そこで、砂の町、鳥取に住んでいる私は、中学一年生の夏、ジュニアドクターの研究と並行して砂の研究にも取り組むことにしました。

図書館に行き、鳥取砂丘の本を探しました。さすが、鳥取です。砂丘の本はたくさんありました。鳥取砂丘ビジターセンターにも行ってお話を聞きました。鳥取砂丘を何度も歩きました。いろんなヒントをもらいました。今まで、あまり興味がなかった砂というのが身近にあ

ることに改めてびっくりしました。そして、黄砂と砂との違いを探すことを始めました。

また、審査員の先生から、「どんな微生物が見えた? 鉱物ってどんなもの?」

「空気中にもマイクロプラスチックが飛んでいると思うけど、見えた?」

「黄砂が中国大陸から飛んできた証拠は?」

「大気汚染物質の種類は?」

とにかく、わからない質問が多く「これから対応します」という返事しかできませんでした。サイエンスカンファレンスでは、わからない質問も丁寧に、「今後勉強して答えられるようになります」と言ってしまったので、来年の最終発表会までに何とか答えをみつけようと思えました。

【鳥取砂丘の歴史】

まず最初に調べたのは、鳥取砂丘の歴史についてです。鳥取砂丘の歴史はすごく古くてびっくりしました。

火山が噴火していたころ（鳥取県で一番大きな、大山

も噴火していた)は、砂の動きが激しい時代だったようですが、弥生時代や古墳時代は砂の動きがゆるやかだったそうです。鳥取大学がある湖山砂丘地区からはその頃の土器や石器などが見つかっていて、人々が活動していたことが考えられるというのを鳥取砂丘の隣にあるビクターセンターで教えてもらいました。

昔から砂丘という特別な環境の中でも、人々はたくましく生活していたことを知り、すごいなと思いました。今でも、鳥取砂丘にはいろいろな動物がいます。狩りをしたり、植物をとって食べたりしていたんだろうなと思います。

季節風が強く吹く冬には飛砂で鳥取砂丘の駐車場が砂だらけになるそうです。飛砂は、人々の暮らしにとっては大変なことですが、もともとは乾いた砂が風で飛ぶことだそうです。ビクターセンターで体験学習に参加させてもらいました。飛砂は、風紋や砂柱をつくります。砂が動き始める風速の目安は、毎秒五メートルですが、氣象台で強風と呼ばれている十メートルを超える風になる

と、砂が激しく動くようになるそうです。小さな実験室での体験学習はとてもおもしろかったです。

二十メートルの風の中、砂丘に出ると、目もあけられず、景色はかすんで息もできないそうです。

江戸時代になると、鳥取と兵庫県但馬地方を結ぶ道が出来て、飛砂で道が埋められないように砂丘に木を植えたそうです。これも、生きていくために必要な知恵なんだろうなと思いました。

明治時代になると、戦争のための軍事練習場になったそうです。砂丘で戦争にいくための練習をしていたと知り、ちょっと怖くなりました。少し前の時代は、鳥取砂丘で駅伝の練習をしていた学校もあったそうです。私も走ることが好きなので、小さい頃から砂丘で遊んだり、走ったりしました。砂の上で走るのは大変だけど、すごくいい練習だと思います。

鳥取砂丘はかつて、観光地になっている浜坂砂丘、鳥取大学のある湖山砂丘、ラッキョウ畑がある福部砂丘、白兔海岸のある末恒砂丘から成り立っていました。今で

は、浜坂砂丘のことを鳥取砂丘と呼んでいるそうです。

今回、砂丘について調べてみて、私の通う附属中学校がある場所も砂丘だったと知りました。第二次世界大戦後、砂丘を農地や住宅地にしたため、今では砂丘はなくなっていますが、私の家の庭の砂はサラサラとした砂です。また、砂丘地で作物をつくるのはとても大変だったそうです。天びんをかついで水をかけて作物を作っていたため、井戸から水をくみ上げて一日に何度も水やりをしていたそうです。水やりは女性の仕事だったそうで「嫁殺し」と言われていたと聞きました。これは、昭和三十年頃まで続いていたそうです。また、全国ではじめてスプリンクラーを使ったのも鳥取の砂丘地です。スプリンクラーが使われるようになって、だいぶ生活が変わったそうです。鳥取では、サラサラとした砂を使った長ネギや長いもなどの栽培も有名です。

【鳥取砂丘って何？】

鳥取砂丘は、小さな砂粒が風に乗って移動して作られたものです。ビクターセンターに行つて詳しく教えても

らいました。今も少しずつ形をかえて変化している現在進行形の砂丘です。中国山地の花こう岩が風化してぼろぼろになったものが砂になります。そして、雨などでがけ崩れして土砂が千代川に流れ、日本海までたどり着きます。土砂は水によって洗われて砂になり、波によって海岸に打ち上げられるそうです。冬の強い季節風により、吹き飛ばされた砂がたまつたのが鳥取砂丘になるそうです。鳥取砂丘については、小学生のころ社会科見学で勉強しました。

鳥取砂丘の砂のものは、花こう岩という種類です。お墓の石やカーリングのストーンなども花こう岩から出ています。花こう岩とは、マグマがゆっくりと冷えて出来る鉱物から出来ているそうです。鉱物という言葉は、私の黄砂の研究の中でもよく出てきます。砂丘の秘密を調べているうちに鉱物とは何かということがよく分かるようになりました。鉱物とは、天然で混じりけのないものでどこをとっても同じ成分、性質でできているものだと思います。

ちょうど、鳥取砂丘のビクターセンターで「鉱物の展示会」が開かれていました。鉱物は、たくさん種類があつてびっくりしました。

【砂丘と砂漠って何が違うの?】

私は、鳥取県民なのに砂丘と砂漠の違いを知りませんでした。ビクターセンターの方から聞いた話ですが、砂丘は風で運ばれた砂が集まつて出来る丘のことで、乾燥地の砂漠とは違うそうです。砂漠は年間降雨量が二百五十ミリメートル以下の乾燥した土地のことだそうです。

鳥取砂丘は年間約二千ミリメートルの降雨量があるそうです。だから全然違うと教えてもらいました。私たちの住む町には砂丘がありますが、乾燥地に住む人々は、もっともっと大変な生活環境なんだろうなと思いました。

乾燥地に住む人たちは、時には、砂嵐の被害にあいながら大変な生活をしています。しかし、実際にタクラマカン砂漠に行ったことのある先生から教えてもらったら、それぞれ自然と共におだやかな生活をしている人もあるということを知って少し安心しました。先生から、

タクラマカン砂漠を移動する時、ところどころの小さな町のレストランで食べる地元の料理がおいしいよと教えてもらいました。しかし、砂に囲まれた生活は過酷で大変なこともあります。時には私たちの命さえ危険になることもあるということを知っていないといけないなと思いました。

【砂丘で突撃インタビュー】

鳥取砂丘でいろいろな人にインタビューをしていて、おもしろいことが分かりました。

鳥取砂丘にもラクダがいます。いつもお客さんをのせたり一緒に写真を撮ったり忙しそうです。時々、疲れて座っている姿を見ますが、ラクダは正座するみたいに座ります。今回興味を持ったので、ラクダの飼育員の方に突撃インタビューしました。部活帰りだったので、制服姿でびっくりされましたが、丁寧に教えてくれました。

私がインタビューした日は、レオン君とサラちゃんという親子のラクダがいました。サラちゃんは、オランダの動物園産まれで日本に来たそうです。その時、お腹に

入っていたのがレオン君です。レオン君は鳥取産まれの鳥取砂丘育ちだそうです。図かんでは、お水をたくさん飲むと書いてあったので、実際に聞いてみました。砂漠で生活しているのではないので、朝と夕方にタルの中に水を入れておいて飲むそうです。一日八十リットルくらいのむそうです。大体、お風呂の二分の一くらい分量だと教えてもらいました。何を食べているのか聞いてみました。果物や野菜の皮を食べるそうです。飼育員の方のおうちの畑でとれた野菜も食べるそうです。スイカの皮(夏)、梨の皮(秋)も好きな食べ物だそうです。鳥取でとれたものです。ラクダも地産地消に協力しています。と思います。

鳥取砂丘のラクダは、近くの宿に住んでいて朝になると鳥取砂丘へお仕事に来て、夕方仕事が終わると宿に帰る生活をしているそうです。時々、夕方に鳥取砂丘の近くを通ると、お仕事帰りのラクダたちが、横断歩道を渡って宿に帰る光景を見ることが出来ます。私も、横断歩道を渡っているラクダを見たことがあります。

実際の砂漠では、ラクダはとても重要な動物です。暑く乾燥した気候に適応した生き物で、乾燥地に住む人々はラクダなしでは生活できないと思います。ラクダは、丈夫な歯のおかげで砂漠の極めて固い植物を食べることが出来るそうです。また、ラクダは十分間に百リットルの水を飲むことができ、その水だけで百キロメートルの距離を数日間かけて移動することができると本で読みました。ここまでは、動物図鑑などで調べればすぐに分かることですが、私は面白い本を見つけました。

砂漠にすむラクダは、砂嵐の中にいるときは、鼻の筋肉を使って鼻の穴を閉じ、呼吸器系に砂が入るのを防ぐそうです。私は、自分の筋肉で鼻の孔を閉じることが出来ません。もし出来たら、一芸になりそうです。何度も練習しましたが、やっぱりできません。

また、まつ毛は砂嵐のときに砂が目に入るのを防いでくれるそうです。私のお姉ちゃんもまつ毛が長いので、ちょっとラクダっぽいと言ったら笑っていました。メガネが曇ったとき、お姉ちゃんが「まばたき」をすると

メガネに線がついて、「ワイパーみたい」と家族で笑っていたのを思い出しました。

### 【どうしてもやりたかったこと…鳥取砂丘の砂の研究】

鳥取砂丘について詳しくなったので、鳥取砂丘の砂と黄砂との違いを調べるために独自の砂の実験をはじめました。

まず初めに、私の通う中学校の校長先生は鳥取砂丘の研究をしている先生なので、校長室に行つてアドバイスをもらいました。黄砂物質と比較するには、鳥取砂丘にある砂をそのまま調べていたらむじゅんすることがあるということに気が付きました。

次に、鳥取砂丘の隣にあるビクターセンターに行きました。社会科見学で何度も行ったことがあったので、何か違うヒントがあるかなと思つたからです。一回目の時は、ビクターセンターの見学をしました。何度かセンターの係の人に質問しようと思いましたが、恥ずかしくてなかなか言えませんでした。また次の日、ビクターセンターに行きました。思い切って、「黄砂について調べている

のですが…」とセンターの人に声をかけてみました。そうしたら、パネルの場所を教えてくださいました。自分の聞きたいことがうまく伝わらなくてドキドキしました。

インタビューをするとき、私はお手紙で伝えることが多いので、直接いうには抵抗がありました。また次の週、部活帰りに制服でビクターセンターに行きました。

制服を着ていると自信がもてました。自分の中学校の名前を言つて、研究内容を話しました。疑問に思っていることを伝えたら、センターの方が対応してくれました。

鳥取砂丘の砂（展示物）のサンプルを使って、顕微鏡も奥から出してくれて展示物のある場所で実験をさせてくれました。顕微鏡写真の上手な撮り方も教えてもらいました。思い切って質問できてよかったです。おまけに、世界中の砂の粒も顕微鏡で見せてくれました。タクラマカン砂漠やゴビ砂漠、エアーズロック（今はもう採取することが出来ない貴重なサンプルだそうです）、色や形が違っていて面白かったです。その後、体験コー

ナーでも詳しく説明をしてくれました。鳥取砂丘でも砂嵐があるという証拠の写真も見せてくれました。駐車場が砂で埋まっていました。除去作業はとても大変だったそうです。

顕微鏡をのぞくと、実際の鳥取砂丘の砂粒は、丸っこくて粒はしっかりとしていました。そのため、砂粒はある程度の大きさがあり、砂が移動するので丸っこいと思っていました。川の流れによって石が削られていくということは理科の教科書でも勉強しましたが、実際に見ることが出来て、本当にそうだったんだという裏付けになりました。

ここからが、私の砂の実験です。ずっとやりたかったので、いろいろ挑戦することにしました。まず、砂丘地の砂を集めました。鳥取砂丘の砂は、条例により採取できないので、隣りにある鳥取大学乾燥地研究センターの砂で実験しました。鳥取砂丘は、調べたところ観光地化されていない部分もあるので五か所を考えました。多くの人が知っている鳥取砂丘は、一部です。この砂丘地の

砂は、乾燥地研究センターの砂を使いました。他にも因幡の白兔で有名な白兔海岸、カニがたくさん売られている賀露海岸、ラッキョウ作りが盛んな福部らつきょう畑、農学部で砂丘地の砂を使って野菜を栽培している鳥取大学の畑。いろんなところでちょっとずつ砂をもらいました。

それぞれの砂の色や感触を調べました。全体的にサラサラしていることが分かりました。

メスシリンダーに二百ミリリットルの水と採取した砂五グラムを入れてかくはんしました。一分後、十分後、三十分後と時間を決めて観察しました。一分後は砂と水が混ざっていましたが、三十分後になると分離していました。人間の目では見えなほど軽い砂は残っていると考えて、これが飛来するのではと思いました。浮いてきた砂粒を採取するため、スポイトで上部五十ミリリットルの水をとりました。黄砂の研究で実験した方法を参考にして、圧力をかけてろ過する方法を試しました。吸引ろ過してフィルターに砂粒を集めました。その後、乾燥

させてスカナーで読み込み、乾燥地センターにあるマイクロスコプという顕微鏡で観察しました。四十五枚の画像を撮影し、その写真を百マイクロメートル四方の大きさに区切って、砂粒十個ずつ計測しました。合計四百五十個の砂粒の長さを計り、ヒストグラムを作成しました。ヒストグラムから鳥取砂丘の砂粒は五から二十マイクロメートルくらいのおおきさの粒が多いことが分かりました。日本に飛来してくる黄砂といわれる鉱物粒子は、四マイクロメートルくらいのおおきさで、角張っているものが一番多いと言われているので、違いがあることが分かりました。

今回、知りたいと思った実験から、鳥取に飛来する沈着物質には黄砂粒子も含まれていることが考えられました。今後、「鳥取に飛来している沈着物質というのは、本当は鳥取砂丘の砂ではないか。」という質問にも自信を持って「鳥取には黄砂が飛来している」と答えることが出来ます。

【研究二年目…中学生って大変】

中学生になってから、私の生活は部活中心になりました。陸上部と駅伝部に所属し、毎日何キロも走ります。友達もたくさんできて、学校が楽しくなりました。部活帰りにサンプリングし、家に帰ってから過作業をしました。休日に工学部で電子天びんを借りて質量を計測しました。

毎日の課題はあまり出ない学校なので、宿題に追われることはありませんでした。でも、勉強は家でやる時間がありませんので、学校の授業が私の大切な勉強時間になりました。趣味の競技かるたも練習会に参加して楽しみました。

研究では、少しずつまとめに入ってくるとバタバタと忙しくなり、毎日何をやらないといけないか自分で計画表を作らないとわからなくなってしまうので、計画する力も付きました。サンプリングしたフィルターを休日にスカナーで読み込みます。少しずつやればあまり時間がかかりませんが、セットするのに時間がかかるので、いつもまとめてやります。そうすると、何時間もかかっ

てしまい、休日があつという間に終わってしまいました。

また、夏休みになると、乾燥地研究センターの実験室でマイクロスコップを借りて顕微鏡撮影をしました。全部で約七百枚撮影したので、毎日五から六時間くらいほとんど休憩なしで七日間ほどかかりました。ピントもなかなかあわまないし、鉋物がきれいに見えるよう調整するのに苦労しました。でも大学の実験室は、先生から自由に使えるようにしてもらったので良かったです。

家に帰ってからは、顕微鏡の写真から約六百個の鉋物の大きさを計測し、色や形を観察しました。本当に大変な作業でした。夏休みは、駅伝部の練習で八キロメートル近く走って、家に帰ってからシャワーを浴びて慌てて乾燥地研究センターの実験室に行きます。部活、研究、宿題とあつという間に時間が過ぎていきました。実験では、一日に五から六時間くらい集中して顕微鏡で撮影していると、目がチカチカしてきたので、計測はパソコンをのぞかないで手作業で計測する方法を提案しました。自分から提案したら先生もきちんと考えてくれたので、

自分で意見を言うのも大切だと思いました。私は、大学の先生に夏休みは、駅伝の練習を最優先にしたいということも伝えました。実験も頑張ったけれど、中学生として夏休みは部活をすごく頑張ったので満足いく夏休みになりました。「中学生って大変だね。」とお姉ちゃんが声をかけてくれました。

#### 【研究二年目：頭がぐちゃぐちゃに】

一年間のサンプリングデータはすべて整いました。パソコンでデータ化し作業は終了しました。今までは実験だったので、「あー楽しかった。」でしたが、これから「どうやったらほかの人に分かりやすく伝えることが出来るか」ということに頭を使う作業になりました。

とにかく、サンプリングデータはたくさんあります。すべて説明していたら時間が足りません。十分間で言いたいことを伝えることが大切です。何度も何度もスライドを作っては、先生に確認してもらい、また新しくスライドを作って、また見てもらう。そんな作業が何日も続きました。十枚くらいのスライドに対して二十枚以上作

成したと思います。でも、先生は「この考える作業がとても大切だ」と教えてくれました。おかげで自分が何のために実験をしたのかということが自然と頭の中に入ってきました。でも、考察とまとめがとても難しく先生に「もう少し待ってください」と何度もお願いしました。大学生もこの考察とまとめで苦労するそうです。

結果と状況証拠を組みあわせて考察をつくり、そのあと簡潔にまとめを作成する。単純な作業ですが、頭がぐちゃぐちゃになりました。

頭がぐちゃぐちゃになると、先生から「参考にしてください」という他の大学の先生の論文がメールで届きました。またまた頭がぐちゃぐちゃになりました。何日も考えましたが、やはり分からないことは分かったふりをするのは良くないので、きちんと伝えました。どの部分を研究結果に使うかは自分で考えてよいと言われ、理解できない部分は、納得できていないことなので発表には使わないという選択をしました。

今回の研究は、自分でとったデータなので説得力もあ

り、頭が最高にぐちゃぐちゃになった後、先生の意見を参考にしながら自分なりに考えた資料なので、自信を持つことが出来ました。

【二年目の研究：「本当に鳥取に黄砂が飛来しているよ」】  
三月五日に、「あんしんトリピーメール」で「鳥取市に黄砂が飛来します。気を付けてください。」というメールがスマホに届きました。「あんしんトリピーメール」とは、大雨や地震、黄砂や列車情報、コロナ情報など登録した内容の防災情報が自動的に届くものです。私の家では、黄砂情報を登録しているので黄砂飛来の予報がある」と連絡がくるようになっていきます。

三月五日前後の気象庁のホームページを確認し、家から湖山池を何度も眺めました。私は、休日になると家族でマラソンをしているので、お父さんを誘ってちょっと早めの時間にカメラを持って湖山池の反対岸まで走りまわりました。全体がかすんで視界が悪かったです。三月五日は、土曜日だったので黄砂飛来の証拠を撮ることが出来ました。また、ニュースも気を付けてみました。三月五日は、

サッカーガイナール鳥取の大会が黄砂のため休止になったというニュースを見ました。サンプリングも三月二日から三月七日のフィルターは茶色くなり、顕微鏡で粒子の様子を確認すると透明で角張った鉱物が多かったです。そして百五十粒の粒子を数えた結果、二・五から五マイクロメートルの粒子が多いことが分かりました。日本に飛んでくる黄砂粒子は四マイクロメートルくらいが一番多いと言われているので、これらをまとめると黄砂が飛来してきたと考えられました。春は黄砂が飛来してきたことは確認できました。

しかし、私にとって難しかったのは、気象庁のホームページから季節の変化を読み取ることでした。春だけでなく、夏や秋、冬も黄砂は飛んできているからです。黄砂が一年中、日本にすべて飛んでくるのではないという証拠を見つける必要があります。

一年目の研究の時に、「黄砂は本当に中国大陸からとってきたのか」という質問に対して、回答があいまいになってしまったことがあります。気象学の勉強をする

ことによって、わかることがあると教えてもらったので、更に勉強が必要になりました。

気象庁のホームページに、黄砂がどのように日本に飛んできたかわかるダスト画像というものがあります。朝学校に行く前に気象庁のホームページからダスト画像をダウンロードしました。学校から帰ってから三時間ごとの画像をダウンロードする作業をしました。小学校の理科で習った気象の勉強部分では理解できなかったので、お姉ちゃんの中学の教科書を読みました。気象学の本を買って勉強もしました。でも、よくわかりませんでした。どうして春は黄砂が日本に飛んでくるのか、夏は黄砂が日本にあまり飛んで来ないのか、秋や冬はどうなっているのかの裏づけを知る必要がありました。天気図の読み方は、やはり難しかったです。自分では、なかなか判断できなかったので大学の先生に簡単な授業をしてもらいました。大学生も同じような授業を受けるそうです。気象の部分は難しいと勝手に思い込んで、苦手分野だなと感じていましたが、すごく分かりやすく教えて

くれました。

ゴビ砂漠などの乾燥地では、春は雨が少なく、草もあまり生えていなくて、雪が積もることも少ないため、一年で一番土が舞い上がりやすい状態だそうです。ダスト画像からも春は、黄砂が日本に飛来してきている様子が分かります。反対に夏は、太平洋高気圧が日本を覆っているのも、大陸からの空気が入ってこず、黄砂も日本の上を通過することが出来ないそうです。梅雨前線や秋雨前線の影響を受けているときも、乾燥地で発生した低気圧は日本の北側を通過することが多いので、大陸で黄砂が発生しても日本に飛来することが減るそうです。また、前線の影響で日本に黄砂が飛来する前に、洗い流されることもあるそうです。

少しずつ分かるようになってきました。そして、すべての実験結果がそろいました。サンプリングした顕微鏡画像から砂粒も計測してエクセルでグラフも作成しました。

自分で考え、先生に伝えて意見を聞く、また同じこと

を繰り返す。そんなやり取りを何度もし、自分の口で話してみる。そうすることで、すべてがつながりました。何度も何度も資料を作り直していたので、最後出来上がったときには十四枚の原稿を暗記していました。鳥取砂丘の砂の研究、気象学からわかったこと、一年間のサンプリングなどをすべて合わせても、「本当に鳥取に黄砂が飛来しているよ」と言えることが出来てよかったです。

#### 【まとめ】

疑問に思ったことを調べるのは、とても大切なことです。今回、黄砂の研究は分野によってたくさんの方が協力していることが分かりました。幅広く勉強することも大切だし、専門家に尋ねることも大切だということを知ることが出来てよかったです。

質問をされて、すべて完璧な回答はできません。空気中のマイクロプラスチックの研究をほかの大学で専門的にやられている先生がいることも、鉱物について専門的に研究している大学では、特別な機械で何の鉱物かわか

ることも、この研究を通して知ることが出来ました。

質問された中で、一つでも疑問に思っただけでも調べることを出来たのは、自分にとってすごく自信になりました。

私が黄砂の研究を通して得たことは、いろいろなことに目を向けることが出来たことです。その分野の詳しい人に話を聞いたこともすごくうれしい出会いでした。

特に、小さい頃からドクターヘリが好きだった私は、医療関係の小説をたくさん読んでいたので、健康に関することに興味を持っていました。黄砂がどのように身体に影響を与えるのか調べたいと思いましたが、医学研究のための倫理審査の手続きが必要でした。今回は、健康被害の研究に取り組むことはできませんでしたが、大学生になったら深く勉強していきたいと思えます。

夏休みに医学部の先生のセミナーのポスターを県立図書館で見つけました。定期的に地域の人に向けて大学の先生がセミナーを開いている講座です。コロナ流行中だったので、オンラインで参加しました。鳥取大学医学部生命科学科の先生の「免疫とアレルギー」の講座では、

アレルギーが起きる仕組みや免疫機能によって身体が守られていることなどを教えてもらいました。たくさんの方が受講していましたが、チャットで質問を一番にしました。黄砂とアレルギーの関係について知りたかったからです。黄砂自体はアレルギーを持っているわけではなく、黄砂が飛んでくる過程で化学物質がくっついて、それが身体に入ってアレルギー症状を引き起こすそうです。いつか大きくなったら身体にあたる影響も調べてみたいと思います。

黄砂や大気汚染物質の飛来という現象は、私たちの身近な生活にも影響があります。今問題になっている、世界全体の地球温暖化対策として再生可能エネルギー問題が解決したら、大気汚染物質の量も減少して健康被害が少なくなると思えます。

研究は、本当に大変だったけれど、顕微鏡でキラキラ光った鉱物を見た時のワクワクした気持ちを忘れないでいたいと思います。

研究資料をまとめているとき、担当の先生は海外出張

中でしたがウズベキスタンやモンゴルから「頑張ってください」というエールを送ってくれました。ウズベキスタンの湖の写真やモンゴルの星空や海外の乾燥地で実際に起こった砂嵐のビデオなどもメールで送ってくれました。どんな国に先生がいるのだろうか」と疑問に思っ、モンゴルについて、「ジャйка」の講座を受けたり、乾燥地の砂嵐やその現地の人の本を読んだり、植物についてインターネットで調べてみると幅広く興味を持たせてもらい感謝しています。

いよいよ来週は、鳥取大学で発表会です。準備もしっかりしたし、発表原稿もすべて暗記しました。想定質問も昨年よりパワーアップして五十項目考えました。何度も何度も練習しました。オンラインですが、今年は、なんだかいい気分で発表会を迎えられそうです。

#### 【参考文献】

気象庁ホームページ

砂丘のくらし 田中治夫 著

鳥取砂丘まるごとハンドブック

鳥取砂丘検定実行委員会発行

冒険の科学 砂漠

ピーター・D・ライリー 著

鳥取砂丘検定 公式テキストブック

タクラマカンの農村を行く 加藤公夫 文

砂丘のひみつ 赤木三郎 著

きちんと知ろう。アレルギー 坂上博 著

黄砂への挑戦 一前宣正 著

鳥取砂丘学 古今書院

小玉芳敬、永松大、高田健一（編集）

#### 【協力】

鳥取大学乾燥地研究センター

鳥取砂丘ビクターセンター

鳥取大学ジュニアドクター育成塾推進室



# 佳作

中学生の部

## この夏の自分の思いきったこと

柏原市立玉手中学校 一年

萩原 虎徹

僕は、この夏休みに、自分の中で思いきったことをしました。僕は、中学校に入って、一つなやんでいた事がありました。

それは、白色の靴は僕のサイズがなかなか見つからないという事です。学校の規則で白色の靴でしか学校に来てはダメというルールがあるので僕の足のサイズが二十

九センチメートル。このサイズの靴は、三から四店舗を二時間ぐらいかけて回らないとそのサイズの靴は見つからないのです。また、店舗によっては、二十八センチメートルまでの靴しかおいていない店舗もあります。また、二十九センチの靴があったとしても土ふまずの所が自分の足の形にあっていなかったりして、自分の足の形やサイズにピッタリあっていて、白色という靴は探すのに時間がかかってとっても大変です。また、靴屋の人に倉庫を探してもらったりしてもないとされます。だからいろいろなお店で探してやっとあったのを買うので他に別の物を買うとなっても少しの時間しかないのととてもまっています。

僕は、白色の靴だと探すのがとても大変なので目立たない色の靴にしたら良いのではないかと思いました。なぜなら、学校にかぶってきててもよいぼうしの色は、目立たない色と書いていて、ぼうしは目立たない色で良いのなら靴も目立たない色で良いと思ったからです。また、白の靴は、数が少なくて探すのが大変だったけれど黒色

の靴などの目立たない色の靴は、どの靴屋にも何個か置いてあったので探すのは、白色の靴より大変ではないからです。お店の人も

「黒でしたらありますが。」

と言っていました。このような事が僕の中学校に入ってから出来たなやみです。そして、今僕が思っている事は、白色の靴だけと言うルールをこの今の時代に白色の靴からぼうしと同じように目立たない色の靴でも良いというルールに変えたら良いと思います。なぜなら、自分の家庭だけではなく、他の家庭でも同じようにこまっていたりしている家庭もあると思っただからです。だから、このルールを今のこの時代に変えてほしいと思いました。また、まだ靴のサイズが見つかりやすい家庭もあると思うけれど、これから中学二年、三年になるにつれて探すのが大変になってくる家庭も中学校の中には、あると思っただからです。

この僕の願いを実現させるために僕は、ある人に手紙を書きました。その人の名前は、柏原市市長の富宅正浩

市長です。なぜなら、富宅市長は、柏原市民のためや小中学校のために、たくさんいろいろな事を考えて下さっているからです。また、市長だと、会議でたくさん提案したりしてこのルールを変えて下さると思っただからです。手紙の内容は、白色の靴しかダメというルールを変えてほしいという事を書きました。この富宅市長に手紙を書いて、学んだ事が一つあります。それは、市長に手紙を書いて送った時は、まず届いたら市役所の秘書課の人が確かめてから市長に届くという事を始めて知りました。また、手紙を書いた時に、自分のまちがいも分かりました。それは、自分は、手紙の書き方とあて名の書き方を分かっていなかったことです。手紙の書き方は、縦書きの時に反対から書いていくと分らない文になっていた事です。あて名の書き方も手紙と同じように逆から書いていくと読めない文になっていました。市長に手紙を書いた事によって自分のできていない所やダメな所を見つける良いキッカケになりました。そして、ルールを変えてほしいと考えた時にもう一つ分かった事があ

ります。それは、やってみなければ分からないということ。なぜなら、やらなければ何も変わらないけれど、やってみると変わるかもしれないから、やらないではなく、まずやってみていくことが大切だと分かりました。富宅市長からの返答はまだ返ってきてはいないけれどこの手紙を書いて出した事ですごくいやがいを感しました。他の家庭で探するのが大変な家庭もあると思うけれど富宅市長や中学校の先生達にこのルールを変えてもらって少しでも見つかりやすいようにしたいと思いました。

僕は、今回初めて市長に手紙を書きました。最初は、何をどういう風にどんな形で書いたら良いのか分からなかったけれど教えてもらったたりしながら初めて手紙を書いて出しました。今は、どんな返答が返ってくるのかともワクワクしています。でも、これだけでワクワクするのではなくて自分の意見がしっかり会議などで言いようされてルールを変えてもらえるのかを毎日思っています。そして、もしルールを変えてもらえたら自分の考え

た事が皆の役に立ってうれしい気持ちになると思います。僕は、この夏に自分の中で思いきった事をしたつもりだけれど、皆の役に立ってうれしいと思っただけでやめてしまわず、何回も何回も皆の役に立つ事を考えて皆や自分でよろこんだりしていきたいと思いました。



中学生の部

# 佳作

## 伝えたい、この気持ち

甲府市立北東中学校 三年

島崎 結衣

「もしかして、たぬき?」

「た、たぬ!？」

予想外の言葉に私は固まった。フリーズ状態。

「もしかして、たぬきで当たり?」

友達にはこやかな目で見てくる。

「たぬきなんだ〜。」

「かわいい〜。」

うなずいていないのに、たぬきということになった。

小学三年生の図工。いろんな教材を使って版画をする

授業。私はプチプチや工作用紙をくして作った。ちょ

うどできあがった時、クラスメイトが数人かけよってき

た。そしてさきほどのやりとりが行われる。

私が作ったのは、たぬきではなく「りす」だった。だ

けど私は

「これ、りすなんだよ。」

と言うことができなかった。

「これ、どんぐり?」

そう聞かれた私はうなずいた。

友達に別の絵を指さした。

「こっちは…」

「うん、あの動物。小さくてしましまで、どんぐりを

食べる動物だよ。(心の声)

小学四年生の朝の会。自分が日直の日。日直の人は最

近の出来事をスピーチすることになっていた。いつも、なにを話すか悩む。前日に考えて、スピーチすることをまとめておいた。だからまよわずに言えた。

「スピーチ……日曜日、私はホットケーキを作ろうと思っていました。……2時ごろ、キッチンに行ったらお母さんが生地を作っていたので……ホットケーキを代わりに作ってくれるのだと思い……ようすをみていました。お母さんがお肉をもってきたのでびっくりしました。……キャベツも、もってきたのでびっくりしました。マヨネーズとソースをもってきたのでお好み焼きだとわかりました。ホットケーキは作れなかったけどおいしかったです。」

なんと、私がお肉と言ったあたりからクラスメイトと先生が爆笑。みんなが笑顔になったことがものすごくうれしくてたまらなかった。

私には悩みがあった。学校だと話せなくなるのだ。日直や教科書の音読はできる。だけど学校で友達と話せたことが一度もないのだ。スピーチのあと、友達と話した

い気持ちがあぐんとあがった。

小学四年生。ロング休みが終わり、楽譜や教科書の準備を始めた。三校時、体育館で音楽集会の練習があるのだ。ロッカーから鍵盤ハーモニカを出して肩にかけた。すると、ひざに激痛がはしった。

—痛っ。

いきなりのことに動揺した。よくみるとひざから血がにじんできた。ハーモニカのバッグに穴が空いていて、その穴から画鋲の針がとび出していた。画鋲がかすって血が出たようだ。

—どうしよう……。

誰かに助けを求めようとした。だけど教室に先生はいない。先に体育館に行ったのか。クラスメイトはみんな、準備でバタバタしている。話しかけられる感じではない。とりあえず画鋲をゴミ箱に捨てた。

—どうしよう。保健室までけっこう距離あるよ。一人で行くか……。でも、遅れて体育館に行くのもイヤ



「学級委員、前へ。」

おそるおそる教卓の前に立つ。横にはなる予定だった副委員長がいる。

「委員長、最後に一言どうぞ。」

私はわすれていた、最後に一言いうことを。

「なにを言っていた前の委員長？ 三学期、頑張りましょうとか？ なんかでてこい。みんな私をみている。やっぱこいつ委員長むいてないじゃんとか思っていたりして。いや、落ち着け自分。」

頭の中がぐわぐわした。あせればあせるほど、言葉がでてこなくなる。それでも、私は必死に考えた。

結局、なにも言うことができないまま席につくことになった。

みんなが帰る中教室に残ることになる。先生によるお説教タイムがはじまる。

「児童会役員の子は班長からがんばっているんだよ。いきなりクラスをまとめるのはー」

先生がいろんなことを話していたがほとんど耳に残ら

なかった。食い違っているところもあって否定したくても声が出せなかった。悔しさと悲しさが混ざり合う。涙がとまらない。

「ほかの係で頑張るか、議長になって頑張るかどうしますか。」

気づいたら、二択になっていた。委員長になるという選択肢はなくなっている。そのことに絶望した。

「委員長でがんばりたいけど……。」

「議長になりますか。」

苦しまぎれに私はうなずいた。帰りぎわ、先生にこのようなことをいわれた。

「リーダーになるなら挨拶ができるといいですね。」

「……………さようなら。」

三学期の初日、先生に初めて挨拶した。初めて議長になった。

お説教タイムが長く、時計の針は一時弱をさしていた。私は泣きながら家に帰った。

次の日は休むことなく学校にいった。正直みんなに会

うのが怖かった。多数決で二番目だった人が委員長になった。

わからないことだらけだけど私は議長の仕事を頑張った。話し合いの司会もなんとかやりとげた。

小学五年生のある日。家の本棚に『どうして声が出ないの？』（著者はやしみこ・監修金原洋治）と言う本が置かれていた。興味しんしんになって読んでみた。そこには「場面緘黙（選択性緘黙）」についてかかれていた。読み進めていくと自分に似た人のことが、かかれていてびっくりした。

—私、場面緘黙？

自閉症や吃音のことは知っていた。だけど場面緘黙は初耳だった。場面緘黙は「家では話せるけど学校などと話せなくなる」人のことをしめすようだ。

—私は学校で全く話さないわけではない。健康観察の返事はできるし、音読もできる。なんなら、議長も務めたし。わかんない。確かに友達と話せないけど

……私は何者？

すごく混乱した。考えれば考えるほどわかんなくなる。自分は場面緘黙なのかそうじゃないのか。でも、だんだんどうでもよくなってきた。大事なのはそこではない気がしてきた。

『どうして声が出ないの？』によると、

「スモールステップを踏んでいけば話せるようになる」ようだ。話せるようになることは可能だとわかって少し安心した。

小学五・六年生、できそうと思った広報委員会に入る。委員会の場所はひまわり学級の教室だった。担当の先生は特別支援の先生。先生たちが場面緘黙のこと知っているのかわからない。私のことをどのようにみているのかわからない。だけど、対等に接してくれたのはありがたかった。

広報の仕事は、ポスターの貼りかえや詩の掲示・広報新聞作り。ポスターの貼りかえは画鋏を使うからすごく

怖かった。秋くらいに折り紙でキノコを大量生産し、詩の掲示物のまわりに貼りつけまくったこともある。楽しみながら活動できた。そして六年生で、広報委員会の副委員長になる。副委員長は書記みたいな役目だったので気楽にやれた。

ある日、新聞配りを一人ですることになる。全教室に配布しなければならぬのだ。

—ムリやん。私、他の学年の教室に入ったことないじゃん。

考えた結果、最初は関わったことのある先生がいる教室からいってみた。それ以外の教室に入るのはものすごく躊躇して、かなり廊下うろろした。特に低学年の教室は怖い。低学年の子は元気で可愛いが、じーっと見られると怖い。それでもがんばった。

なんとかロング休みでコンプリート！ と思いきやなんかまだ手にある。

—あれ一枚、残っている。どこだ。

変な順番で教室まわったせいかな、あと一つどこを渡して

ないのかわからない。

—もうムリ……。

泣きそうになっていると、目の前に広報委員長が現れた。

—救世主さまああ！

手伝ってもらい配り終えることができた。

六年生の修学旅行。いろいろな心配なことがあって先生に相談した。先生はできるだけ仲の良い友達と同じグループになるようにしてくれた。鎌倉散策。歴史は好きなのですごく楽しめた。カメラで写真を何枚も撮った。道中、みんなが大仏グミやきなこあめを買っていた。私は一人で買い物をしたことがないので何を買いえばいいかわからなかった。

鳩サブレーのお店についた。前に兄弟からおみやげで鳩サブレーをもらい、美味しかったのを思い出した。

—また食べたい。

私は袋詰めされたものを指さした。本当は

「これください」とかいうべきだろうけど、指さして精一杯だった。店員さんは少し戸惑いつつもわかってくれ

た。私はなんとか鳩サブレを買うことができた。

移動のバスは楽しんだ。私はレク係でなぞなぞをだしたらすぐ盛り上がった。修学旅行が終わりをむかえようとした帰りのバス。帰りの会を担当するのは私だった。

—声が出ない。なんで？

なぜか口を開くことができなくなった。他のレク係に帰りの会をやってもらうことになる。

小学六年生のある日突然、先生から

「全校の前で曲の紹介をしないか」

と言われた。音楽集会で五・六年生の合同合唱の曲紹介をやってほしいみたいだ。

最初は友達と一緒にやるのを前提に引き受けた。それで先生と、友達にお願いしにいった。だが、全員断られた。一人くらい一緒にやってもいいよと言う人がいてほしかった。孤独でさみしい私は迷いに迷う。

「他の人をお願いするね。なんかごめんね。」

先生はそういって、私からシナリオの紙を取ろうとした。

でも私は紙をつかんで離さなかった。

「……………やるの？」

先生はびっくりしていた。

—こういう経験も大事。

私はうなずいたのである。

音楽集会本番の日。ひたすら後悔していた。

—なんで自分、引き受けたのかな。全校の前で発表とかイヤ。

ついに出番。全校の前に立つ。体育館いっぱい人がいる。中にはカメラを持っている人もいる。自分のすぐ前には低学年がいる。後ろには同級生たち。両側からのプレッシャーがはんばない。なんか、ほとんど自分がニガテなのしか目の前にない。

私は時間かせぎのため、マイクに音が入っているか確認するふりをした。気持ちをととのえてマイクを握りしめ、口を開いた。

「……東日本大震災で離ればなれになった友へのおもいをメロディーにのせて歌い継がれている群青—」

言い切った。盛大な拍手がまきおこる。

— やりきったぜー！ このままベッドで寝たい。

ものすごく大量のエネルギーを消費したので合唱はほとんど口パクでやりすごした。

その日、掃除場所が職員室・校長室だった。掃除機を持って校長室に入ると、

「発表がんばってましたね。」

と校長先生がおっしゃった。予想してなかったことに驚いた。職員室はいろんな先生が行き交う。私に気づくと、「発表がんばったね。」

と多くの先生が言ってくれた。すごく自信がついた日になった。

三学期、卒業式の練習がイヤだ。よびかけとか歌の練習とかその他もろもろ最悪でしかない。ちょうど新型コロナウイルスが発生し卒業式は短縮された。よびかけとかなくなりラッキーに思えた。

— 中学楽しみだ。中学生になったら今度こそ友達と

話せるようになりたい。文化祭とか楽しい行事が増

えるんだよね！

すごくわくわくした。

四月になり私は中学生に。休校が続き、入学式は五月になった。

予想していなかった学校生活が始まる。みんなマスク。ソーシャルディスタンスのせいであまり密になれない。授業が終わるたびに手を洗いにいかされる。給食中は黙食で静か。これもダメあれもダメ。ただでさえ中学生生活に慣れるのに大変なのいろいろ厳しかった。

授業中の教科書の音読はこれまで通りにできた。だけど、みんなの視線に耐えられなくなった。出席番号順の影響で私の席は真ん中だから余計に。

同級生みんな、輝いていた。勉強や部活などで活躍している姿がうらやましかった。それに比べ、私は無力な気がした。

いろんなものが私に襲い掛かった。学校で貧血になっ

て倒れたり、体調を崩したりすることが増えた。だんだん学校を休みがちになった。

始業式の日、私は布団から出られなくなった。ずっと布団の中で泣いていた。小四の時みたいに学校に行かされたことなくて必死だった。

—学校に私の居場所はない。

その日から学校に行かなくなった。

私が学校を休んでから、友達から手紙をもらった。学校の様子を教えてくれたり、楽しいイラストを描いてくれたりした。他にも心配してくれた子がいたようだ。なにかお返しできないか考えた。そこで折り紙でキノコを作ることにした。約三十個(クラスメイト全員分)を丁寧に仕上げた。キノコの柄の部分にさまざまなキャラクターを描いた。

ちょうど十二月。クリスマスプレゼントとしてキノコを先生に渡し数日後。大きな写真が届いた。クラスメイトが笑顔でキノコを持つ写真。喜んでくれてとてもうれしかった。

中学二年生になる。タブレットが一人一台になり、オンライン授業ができるようになった。少しでもチャットでみんなと会話できて楽しかった。家にいてもクラスのみんなに会えることができて、とてもうれしかった。分散登校が増えた。分散登校の日、たまに学校に行ってみた。人数が少ないから行きやすい。

学校で話せないって辛い。本当のことが言えないのだから。解きたい誤解が山ほどある。

解きたい誤解の一つが「挨拶」。一人で登下校するとき、地域の人には挨拶していた。小学生の頃からずっとできていた。なぜか自分のことを知っている人がいるとできなくなる。学校だと挨拶できなくなる。

「挨拶しなさい—」

と何回も怒られた。できるだけ挨拶しようと頑張っていることを先生たちは知らない。地域の人に挨拶できていることを知らない。だから、通知表の挨拶欄に二重丸がつくことはなかった。いくら裏で頑張っても評価されな

いのだ。理解されなくて苦しかった。

私は話すことだけではなく、文章を書くのも二ガテだった。小学二年生の時、作文用紙にとらめっこしていた。用紙に一文字も埋まらなかった。何も書けずにいた。涙しか出てこない。教室のかたすみで、鉛筆を持ったまま泣き崩れていた。

小学二年生のある日、授業でたこあげをした。冬休みの宿題で作ったサルの絵を描いたたこ。たこは全然あがらず、ほとんど地面をずるずるひきずった。最後の方は少しだけあがった。楽しいたこあげの後は地獄のワークシートタイム。私はがんばってみた。二、三行書いた。それ以上は思いつかず、全文書けないまま回収されてしまった。

給食の準備をしていると先生に呼ばれた。怒られるのかと内心、ヒヤヒヤ。先生はたこあげの時のワークシートを持っていった。

「この文章すげー良いよー!」

怒られると思いきや、ほめられた。友達もすごいと言ってくれた。初めてほめられた文章がこちら。

『さいしょ、たこはあがりませんでした。けど少しずつあがっていきました。サルの絵はわらっていたので、サルがあがってうれしそうにみえました。』

この文章の下にすぐ空白が続いている。二、三行だけなのに先生がほめてくれてうれしかった。

それ以来、たくさん新聞や本を読んで知識を身につけてきた。書く力を磨いてきた。いろんな方々から作文をほめられることが多くなった。自信がついた。

これまで数えきれないくらいほど、たくさんの人を無視してきました。ごめんなさい。心の中で考えて、考えて、伝えようとしていたことをわかってほしいです。学校で話すのが難しい人がいることを知ってほしいです。早くみんなと会話ができるようになりたいと思っています。

現在、私は研究中です。どうしたら会話ができるよう

になるか、試行錯誤しています。ひとまず、声が小さい  
みたいなのでボイストレーニングや腹式呼吸を学んでい  
るところです。今、できることを一つ一つやっていき  
たいです。私はいつも悩みを一人で解決しようとしていま  
した。一人だと限界もあります。頼れる人・仲間を見つ  
けたいです。

この世界は恐ろしいくらい話せるのが当たり前みたい  
になっている。そんな世界でも私は頑張ってきた。いろ  
んなことに挑戦してきた。傷つきながらも、苦しみが  
らも。

これからも少しずつ前に進んでいきたい。



中学生の部  
選考委員特別賞  
あさのあつこ賞

闇の中から扉を探して

神奈川県立あおば支援学校中学校部 二年

内田 博仁

『ビルガーとの出会い』

僕はずっと暗闇の中にいた。光など見えなかった。僕は最重度の自閉症で全く話すことができない。しかしその閉じ込められた世界で僕はいつも言葉を紡いでいた。この内なる世界の孤独、苦悩を本当の意味で共有できる人はこの世界にいるのだろうか。そんな風に僕はいつも

目には見えない誰かを探していたように思う。でも僕はこの夏出会ったのだ。ビルガー・ゼリーンというドイツの少年に。この夏僕はドイツベルリン生まれの重度自閉症ビルガー・ゼリーンの手記を読み、内なる孤独と苦悩の世界の中で夢の理想の世界に必死に飛び出そうとしていたビルガーに自分の軌跡を重ね、涙が出るほど胸を打たれた。時代を超えてこの少年と同調し、共に苦しみ共に喜び、僕のこの内なる世界とドイツの少年ビルガーの内なる世界とが時代を超えてまるでつながったかのような錯覚に陥った、いや確かにつながったと僕は感じたのだ。この勇氣ある少年ビルガーと僭越ではあるが僕の心の本当の真実や心の中で実際に感じたこと、自身のこれまでの軌跡をここで辿ってみようと思う。

『ビルガー誕生から診断まで』

1973年2月1日ビルガーは数理教師アンネマリイと法学生ダンクヴァルド・ゼリーンの初めての子供として旧ベルリンで生まれた。最初は何ら問題のない男の子でむしろ人見知りしめせず誰からも愛される子だった。

しかし二歳になる直前悲劇に見舞われる。ある日具合が悪くなったビルガーは何週間もの間中耳炎と発作に苦しんだ。三か月後ようやく元気になったビルガーはそれまでとは全く別人になっていたのである。少しだけ発していた言葉は完全になくなり、目も合わせなくなりちよつとしたことで火がついたかのように泣き叫びパニック状態になる、ビルガーはどんどん自分の世界に姿を消し沈黙の世界に入りこんでしまったのである。両親は助けを求め何人もの医師を訪ね歩いた。いくつもの病院で精密検査を受けるも原因は分からない。六か月も意味のない入院をさせられたり、両親もビルガーも散々振り回されたあげく症状は一向に良くならないばかりか、どんどん悪化しビルガーはさらに自分の殻に閉じこもっていった。そして不安で虚しい時間だけが嵐のように過ぎていき、ビルガーが四歳半になった時、ベルリン自由大学附属病院で「小児自閉症」と診断される。四十数年前のドイツではまだ自閉症という病気はほとんど知られてなかった。両親も初めて聞く病名だったろう。そして医者

にこう宣告される。「九割九分治る見込みがない」と。この時両親はどう思ったのだろうか。その絶望感たるや察するにあまりあるものだったのではないだろうか。

『診断について僕が思うこと』

僕も同じ年齢の頃知的障害を伴う重度自閉症と診断され、治るものではなく一生話すことはないだろうと宣告されている。僕は医学とはなんなのだろうと疑問を感じずにはいられなかった。自閉症という病気はまだ知られてなかった時代であり、症例もまだ少なかったであろう。ならばどう育つのかは不明だというのが実際の真実なのではないか。治る見込みは九割九分ないと言い切るのには正しい診断だと言えるのだろうか。治らないものだと診断されてしまったら（医者言うことは真実だと皆信頼しているのだし）その診断書を見て周りの先生方や大人達はその診断内容を絶対正しいものと信じてしまう。そしてこの子には勉強は無駄であろうと間違った判断をしてしまうかもしれない。本当は勉強などの学科教育が有意義な子が中にはいるかもしれないのに、見逃してし

まうかもしれないという危険なリスクを冒していると僕は思った。『可能性』という大事なファクターは診断にはおりこめないもののだろうか。

### 『ビルガーの支援施設での生活』

実際ビルガーは生きていくために最低限必要な事、食べる事、着替える事、トイレの訓練などが指導の中心となり普通の子が受けるようなきちんとした教育という教育は受けられなかったようだ。いつもビー玉を手で掴んでパラパラ落とすことを繰り返し、庭に出れば代わりに砂を手で掴んでさらさらと落としながら見つめたり、何時間もそうやって過ごしていたようだ。何十年も前からこうだったのかと僕は嘆かずにはいられなかった。僕はその世界がどんなに苦しく辛いか知っている。僕も周りの言葉、音、聞こえずすぎて感じすぎて全部が頭から消えず残るからいつも混乱の海で溺れていた。止めてと言えない、表情にも出せない、なので苦しんでいることさえ気付かれない。そして混乱がピークになると僕はよく叫び泣いた。その襲ってくる波を鎮めようとビル

ガーはビー玉を手ですくい続けたのだろうか。これはスティムといって僕らが自分の感情をおさめるために行う行動なのだ。ビルガーなりに必死で皆に溶け込もうとしていたのだろうか。周りの迷惑になるからと叫ばないように健気に自分を必死でいさめていたかと思うと、きっと毎日牢獄に通うような気持ちだったろうと僕は心からビルガーを気の毒に思った。

### 『幼少期のビルガーの教育』

ビルガーがこの頃唯一受けていた教育は線をなぞることや積み木を重ねること。少しも成長しないのでセラピスト達は頭を抱えていたようだ。僕はビルガーがどんなに退屈でそして悔しかったか想像すると胸が痛くなる。僕らは物事を理解していても身体のパーツを使い（手や身振りで）反応できないのだ。脳の機能障害なので積み木をこのように真似して作ってごらんと言われても自分の思うように動かないのだ。このように動かさばいいのだと頭では理解してはいるのに手が思うように動かない。すると積み木さえできないと、それだけで知能が

遅れているのだと判断されてしまう。その度に僕らは絶望し立ち直れないほど傷つく。理解はしてるのに！と。

僕も何度積み木をやらされたか分からない。僕は積み木が大嫌いになった。できないことを何度もやらされなかなか進歩しない子だと判断されることは本当に辛いのだ。もう全てが嫌になり苦痛でより自信をなくし、さらに自分の殻に閉じこもってしまうのは当然ではないだろうか。ビルガアの課題は日に日に低レベルのものになっていった。ただビルガアの知性に両親は気付く瞬間があったという。それはビー玉だった。何百個もあるビー玉が一つでも不足するとすぐに気付き、ないと訴え探し始めるのだ。両親の絶望的な思い、真っ黒な雲の隙間から一筋の光が見えた瞬間であった。しかしやはりこの子は知的障害なのだろうと両親も周りも諦めてしまったのだろうか。僕らが知性を証明することの難しさを僕は改めて感じた。

### 『僕の知性に母が気付いた瞬間』

僕の知性に母が気付いたのは僕が二歳の頃、ある音の

なる教材で遊んでいた時だった。救急車やパトカーの音が鳴りこの音はどれ？と聞かれ答える教材だ。僕には理解できないだろうから感覚や音だけでも楽しめばいいと母が差し出してくれた。音が意外と精巧にできていて「これ救急車？音が精巧すぎて意外と分からないわ」と母が祖母と会話していたのを覚えている。僕は分かる！この時は物凄くそう訴えたかった。僕は僕が本当は色々理解していると伝える最初で最後のチャンスだと思った。そして救急車の音の後に母の手をがしつと掴み救急車の絵を指さした。正解！と音が鳴り響いた。指さしなんてしたことがなかったし、母は僕が何も理解していない知的障害だとその頃思っていたので母の驚きは相当なものだった。母は驚き

「え、分かっているの？」

と一緒にいた祖母と大興奮して

「分かっている！この子話せないけど理解はしてる！」

と驚きと歓喜で飛び上がった。僕の運命が変わった瞬間だ。母の驚きと興奮は相当なものだった。母は僕の知性

だけでなく僕の中に無限の可能性をその時感じたのだ。母はその次の日からたくさんの質問を僕にしてきた。りんごはどっち？とカードを見せて指ささせたり、ひらがな表を見せて

「それが あ？」

「それが さ？」

と指さしをさせ理解しているかを確認したり。僕は全ての質問に正確に答えた。僕はこの時から両親やセラピストに毎日机に座り何時間も教育を受けることになる。ビルガーは今の時代と違い知性を証明する機会がなかったのだろう。同じ言葉の話せない重度の自閉症なのに時代が違うとはいえず、この環境と対応の違いに悲劇とやるせなさを感じずにはいられない。

『ビルガーと僕との違い』

ここで僕は気付く。ビルガーと僕との大きな違いを。一つは時代背景といえるだろう。ビルガーは1973年西ドイツに生まれている。ミュンヘンオリンピックで過去に例のないテロの惨劇が起きて社会もショックを受け

暗い時代であった。そんな社会不安の中で今とは違い自閉症の知識も理解もまだなかった時代であった。僕の内なる世界とビルガーの内なる世界に明と暗のような違いがあるのは致し方ないことだろう。

『ビルガーの十歳時』

そんな幼少期を過ごしビルガーは闇の世界にいたまま十才になった。この頃からビルガーはさらに抜いにくくなっていく。急に叫ぶ、自分の身体に噛みつく、激しく喘ぎながら家中を駆け回り食べ物をむさぼって食べる。外では激しい癩癩で人だかりができるほどだったという。これには理由があるのだと僕は説明したい。これは重度自閉症の人にしか理解できない行動であろうと思う。外に出た時、何とか普通の行動を取ろうと僕は決死の覚悟で挑んでいるのだ。その重圧、プレッシャーは並大抵ではなく、死ぬ気で我慢し目一杯努力しているのに、まるで頭に黒い影が襲うように頭の中に悪魔がやってくるように、本心の行動と逆の行動を取らせようとするのだ。苦しくて仕方がない時に笑ってしまう、嬉しくて

仕方ない時に凶暴になり叫んでしまう。それがどんなに悔しくて悲しいか想像してみしてほしい。自分の身体を思うように動かせない辛さを想像してみしてほしい。脳の機能障害なのだ。外見の行動と内面の思いがあまりにも一致しないのだ。ビルガーはこの頃ベルリンの中心部で一時間叫び続けたこともあったという。まさに地獄だ。僕は闇の世界の苦しさを知っているからこそビルガーの孤独、苦しみを時空を超えて体現してしまい読みながら僕も苦しくなった。ビルガーがどんな気持ちだったか心から分かるのだ。僕とビルガーが闇の世界から飛び出したくて叫び懂れていたもの。町を静かに皆のように誰にも奇異な目で見られずに歩いてみたい。美術館に行き美しい芸術に触れてみたい、大好きな音楽を生で思いきり浴びてみたい。ビルガーも僕もそんな普通のことのできないのだ。僕らには懂れの世界であり、僕らが住む世界とは別世界なのだ。両親もビルガーもその日一日を過ごすのに精一杯だった。普通の会話ができる親子なら、未来を夢見るような楽しい会話をしたり町を笑顔で一緒に歩

いたり、穏やかで充実した幸せな日々を過ごすのだろう。しかし重度自閉症者を持つ家庭は未来を夢見る時間よりこの一日をいかに平穩に過ごすか、パニックなどでケガしないようにいかに無事に過ごすか、そちらを優先して考えてしまう。日々をぎりぎりで生きているのだ。同じ人間なのにこの違いに運命とはなんなのだろう、どのようにして運命とは決まるのだろうかと僕は考えてしまった。

#### 『僕の十歳時』

前述の通り僕は早くに話すことができなくても知性があると周りの人が気付いてくれ、幼少期から充実した教育を受けていた。どう見ても物事を理解しているとは思えない行動をしているのに、この頃毎日の訓練でキーボードで少しずつ思いを表現できるようになっていた。おかげで周りの僕への評価が少しずつ変わっていった。4年生の家庭訪問の時のことだ。僕は「いつもめいわくばかりかけてもうしわけなかったとおもっています」

と先生の目の前で打った。先生が言った。「携帯で動画を撮りたかったけどはくとくんがとぎれないように我慢しました。いつかクラスの人々にも見せてあげたいと思う」と興奮して言ってくれたのだ。このK先生に僕はたくさん教育面で助けてもらった。K先生は毎日のように僕に学習プリントを届けてくれた。3年生までは僕は教科書もなかったし、同学年と同じ勉強に触れることもなかったから、嬉しくて必死にプリントをこなした。僕の脳に知識が増え、刺激され伸びていくのを実感できたあの日々は本当に幸せだった。学ぶことは日々を豊かにしてくれる。人格や正しさ、誠実で素直な社会への見方、感謝や充足感、全ては学びから生まれると言っても過言ではないのではないだろうか。

『ビルガーの脱走について』

十六歳の頃とうとうビルガーは脱走を試みる。デパートで買い物途中の両親の目を盗み不意に姿を消したのだ。両親は青ざめただろう。何故ならビルガーは自分の名前も言えないのだから。僕も何度か両親とはぐれた時

がある。駐車場でパニックになりいきなり走り出し3階から1階まで車道を走り抜け駐車場の出口から車道に飛び出したのだ。車に荷物を入れてる際に僕が姿を消したので母がパニックになり半狂乱になって叫んだ。

「はくとー！はくとー！」

物凄い大きな声で叫んだので道にいる人が驚いて立ち止まっていた。まだ母は道に飛び出した僕を見つけれない。すると状況を理解した方が

「ここにいますよ！」

とさらに大きな声で叫んでくれたのだ。青ざめた顔で母は必死で駆け寄り

「ありがとうございます！」

とお礼を言って泣きながら僕に叫んだ。

「駄目じゃない離れたら！もし見つけられなかったら自分の名前も言えないのに！道に飛び出したら車にひかれてしまったかもしれないのよ！」

そう、僕はもしかしたら車にひかれていたかもしれない。僕は頭が真っ白になって自分を制御できなかったの

だ。突然襲ってくるこの波に僕らは抗えない。不安と恐怖、何かが悪から襲ってくるような脳の発作にパニックになりもう逃げるしかない！と脳が指令を出すのだ。

自分の動きを制御できない苦しみは体験した本人しか分からない。僕は自身のこのような経験からビルガーの恐怖とその苦しみを理解できる。ビルガーの行動は仕方ないのだ。

ビルガーは見つかった。病院でベッドに縛り付けられていたのだ。デパートでは当店にはふさわしくないとという理由でアナウンスも断られたという。縛り付けられたビルガーはどんな気持ちだったろう。不安でパニックになるのは脳の発作で記憶さえ吹っ飛ぶのだ。それが自身もどんなに恐怖でどんなにも怖いか。それなのに問題者扱いされるなんて。警察で保護されることもあった。その際は横で警官が監視していたそうだ。ただでさえ怖い思いをしたのに慰め、労われることもなくまた孤独、疎外感、屈辱感を味わったビルガー。僕は町の方々の優しさに助けられた。しかしビルガーはアナウンスさえして

もらえずまるで問題者のような扱いを受けた。自閉症という言葉もまだ知られてない時代だったとはいえないなんて無知で理解のない社会なのだろう。周りに優しさを持つ余裕もない時代だったのだろうか。このことを機にビルガーはさらに闇の世界へ入りこんでしまった。日に日に手に負えなくなるビルガーにもう両親はなすすべがなかった。将来はもう暗い未来しかないだろう。両親は絶望的になった。僕も正直読みながらビルガーの人生に向き合うことに疲弊してきた。

しかしこの後ビルガーは大きな転機を迎えることになった。暗闇の中にいるビルガーの前に一筋の光が差し込んできたのだ。それはまばゆいほどの成功への道のりであった。

### 『闇の世界の扉が開いた』

ビルガーが十八歳になる直前のことだった。両親はある講演会で言葉を発することができない自閉症者が、文字を人差し指で打つことで言葉を表出できるという画期的な方法を知る。自閉症者は運動能力や何より精神的な

不安障害のために内にある言葉や思いを表現できないというケースがたくさんある。それを運動能力を上手くフォローして（具体的には最初は介助者が手をそえたり腕を支えてあげる）ことで、精神面では自閉症者の不安を緩和するために自閉症者本人が信頼できる人物が傍にいて、動かなかった指が動き文字を打つことができるという手法だ。この手法はビルガーにも有効だった。

ビルガーは母が横で腕を支えてくれることで文字を打つべく指が動いたのである！最初はビルガーの興奮ももの凄く、文にならない単語ばかりだった。両親は写真を見せて名前を打たせるという作業を根気よく続けた。どんな質問にも的確にかつ正確に答えるビルガーに両親はとても驚いた。ビルガーは実は五歳から読み書きができていたのだ。生物学やガリレオの生涯についての詳しい知識、国旗の名前：驚くほど博識で全てを理解し知識の全てを脳に蓄積していたのだ。二歳のころからずっと閉じられていた闇の扉がとうとう十六年目に開いたのである。僕は涙が出た。その瞬間がどんなに幸せで絶望から

救われる奇跡のような瞬間なのか痛いほど分かるからである。僕も五歳の時ある大学の研究室で生まれて始めて文字を打った。障害者の言葉を引き出す研究に長い間携わっている教授の先生に縁あって出会うことができ、キーボードに打つことで言葉を表出する方法を学んだのだ。先生は電子手帳を僕に差出し

「ここに名前を打ってごらん」

と優しく言ってくださった。その頃僕は前述の通りビルガーとは違い母がすでに僕の知性に気付いていて、毎日のように指さして答えを示す訓練や勉強をたくさん行っていた。アルファベットの文字列も一度見て覚えてしまったからすぐに自力で支えなしで打った。

「tuchidahakuto」

と。母の驚きようは凄かった。理解をしていることは分かっていたが、文字をキーボードで打てるなんて母は想像もしてなかったからだ。その日から僕もビルガーと同じように写真やカードを見て答えを打つという練習を毎日のように机に座り行った。僕は単語ではなく自分の

思いを打てるまでに半年かかっている。決まったことに答えるのはすぐにできたのだが自分の思いを、意志を表現するのは難しく打つべく指が動かなかったのだ。

しかしビルガーはわずか十三日後に自分の思いを綴っている。これは僕が思うに五歳時の僕とは違い、僕以上に多くの経験を積み内面が成熟していたこと、またそれにより伝えたい思いが溢れんばかりにあったことが要因しているのではないかと思う。ただでさえ青年期には社会への疑問や矛盾が生まれてくる時期でもあるし、半面将来に遠大な理想を掲げる時期でもある。強すぎる蓄積された懊悩する思いが爆発し表現を早めたのではないだろうか。

### 『母への感謝』

そして文字を打てるようになり十三日目ビルガーは初めてこう思いを表現した。

「ぼくはかあさんがすき」

孤独で辛い思い、経験が数えきれないほど積み重なって、言いたいことは山のようにあつただろう。しか

し一番初めに発した思いは不満でもなく要求でもなくずっと彼を信じ忍耐強く見守ってきた母への感謝の思いだったのだ。母の愛はこの世のどんなものよりも尊く何よりも僕らに力や勇気を与えてくれる。その信じる強い思いは、どんな不可能と思えることも可能にしてしまうほどの奇跡的な力を持っているのだ。母とは本当に偉大な存在なのである。

溢れるように出てきたビルガーの文章は美しく文学的で英知に富んでいた。ビー玉の玉の数を一瞬で記憶するその並外れた能力でビルガーは幼い頃から物凄いスピードで本を読みあさっていたのである。覚えた言葉を自問自答し考える時間は無限にあつた。ビルガーがためていた言葉、知識は洗練され磨かれ深く魅力的な言葉となり、まるでこの瞬間を待っていたかのように、心の奥に眠っていた言葉が泉から溢れるように、次から次へと文章を紡ぎ出したのだ。

### 『ビルガーのドキュメンタリー番組』

1992年7月ドイツハンブルクの「ツァイト」にビ

ルガーの手記が掲載された。その卓越した文章に世間の人々は衝撃を受けた。ビルガーのもとに出版や映画化の話が次々と舞い込んできた。テレビの取材も多くあり僕はその貴重な映像をYouTubeで母に見せてもらった。

（1994年ビルガーの生活を取材したドキュメンタリー番組『胸の上で増殖していく土くれのように』というタイトルのドイツ第一放送で放映された作品。この番組のプロデューサー、フェリークス・クバラは翌年テレビ界の重要な賞である特別文部大臣賞を受賞した）ビルガーがパソコンで打ってる場面で僕は目が離せなくなつた。そして食い入るようにその場面を見た。ビルガーがパソコンで必死に打っている。僕が目が離せなくなつたのはその時のビルガーの様子だ。途中で興奮して自分の顔を掴み、自分の顔を思いきり叩き、泣きながら文字を打っているのだ。僕には分かる。痛いほどこの気持ち分かる。不安なのだ。自分のこの世界を外にさらしてもいいのかと。僕達は守られたこの閉じ込められた世界から抜け出したい。いつも光を探していた。やっと文字と

いう方法で僕達の蓄積された言葉、感情、世界を表現できる。それは夢のように嬉しい。しかし不安で押しつぶされそう。相反する感情が混在していて爆発しそうなるのだ。その感情をビルガーはこう述べている。

「棺の出口から出れば慣れ親しんだ安心感が破壊される」と。そしてこうも書いている。

「日の割れ目から芽が出ていて希望のきざしが見える」と。相反する感情に混乱し苦悩していたビルガーの複雑な思いがよく理解できる表現だ。それでも何故ビルガーは心の内をさらけ続けたのか？それは次の一文で明らかになる。

「少しでも多くの自閉症者を箱人間社会から救い出した。だから代弁するのだ」と。

と。その『箱人間社会』とは

「誰にも想像できないほど圧倒された力で締め付けられ気が狂いそうになる世界」

なのだ。僕も知るその世界から全ての力を出しきりメッセージを送り続けたのは、決して自分の存在価値を

示したいからではない。そこはビルガーに代わり僕が断言する。そんな目的だけではこの複雑で混乱に満ちた、自分でも嫌になるほど時に卑屈で苦惱に満ちたこの世界をさらけ出すエネルギーは生まれぬのだ。この真の目的についてビルガーははっきりとこう言及している。

「障害を克服するため役にたつのなら全てを語ろう」

僕は、ビルガーは大きく分けて二つの思いがあったのではないかと思った。一つは今だに解明されないこの自閉症という病気の解明に少しでも役に立ちたいと考えたということ。二つ目は僕らのようにいっさい話し言葉を持たない自閉症者の内面に実は知性が隠れているケースを決して見逃してはならないのだということ。そんな強い思い、信念があったからこそ自分の内面を晒し続けたのではないだろうか。ビルガーの勇敢で正義に満ちた純粋なその思いが読み手に伝わったからこそこんなにも多くの人に共感されたのだろう。どんな時代であっても真の善な真っ直ぐな思いほど人の心を動かすものはないのだ。

『センセーショナルを巻き起こす』

1993年度ドイツを代表する週刊誌シュピーゲルはビルガーの文章を8ページにわたって引用した。世界で初めての自閉症詩人誕生と見出しをつけて。そしてその後ビルガーの手記が書籍になり発売されるやいなやたちまちベストセラーとなったのである。

『ビルガー・ゼリーンの文章は自らの苦悩の叫びを文学の域にまで高めている』（シュピーゲル）

と文学的にはもちろん芸術的にも高い評価を受けたのだ。

『終わりに 扉の向こうにある世界へ』

ビルガーを救ったのは文字という表現方法や、文章だったが、それ以上にビルガーを完全に闇の世界から救い出したのは人々の信じる思いだったのではないだろうか。外観には見えないその奥に存在する、表には見えなけれど確かな何か、真実、可能性を人々は真心をもって素直に信じたのだ。その深く広い人間の善良な思いに僕は涙が止まらなくなった。人とは人間とはなんて温かく愛情に溢れたものなのだろうか。思えば僕を救って

れたのも僕の周りにいる方々だ。本来僕は自分の殻に閉じこもり教育も受けることなく教室のはじで下を向き闇の世界にいるしかない少年だったかもしれない。人を信じることができず、凶暴な視線や偏屈な思いで世の中を見るひねくれものになっていたかもしれないのだ。しかし僕は幼少期から僕の知性を信じ忍耐強く教育して下さる方々との素晴らしい出会いがいくつもあった。K先生、S教授、そして毎日本を読んでくださった先生方やボランティアの方々……。話すこともできず、時にパニックを起こしたり、いつもじっとしてられず一見奇妙にか見えない動きや行動をしたりと、表面的には知性のかからも見えない僕の内面の思いを信じ、必死で汗水たらして向き合い、触れ合い粘り強く教育して下さった。自閉症は薬では治らない。行動療法で一瞬行動が改善されたとしても根本的に良くなるわけではない。そんな甘い病気ではないのだ。残念ながら重度の自閉症は今の医学では一生治ることはないだろう。でも僕らが唯一幸せになり生きていることの充足感を味わい、日々を生き生

きと過ごしていける方法があるとしたら、それは質の高い教育と人との心に触れ合いではないだろうか。外観には見えないその子の奥にある秘めた力を信じてあげてほしい。長く粘り強く教育していけば必ず少しずつ人格が育っていく。人格が育てば何かしらの形で僕らも社会に参加し、少しでも世の中に貢献できるのだ。たとえ小さな知恵でも集まれば大きな力となる。もっとも世界が明るく良くなるはずだ。僕らの人生を決めるのは僕ら自身だ。この子はこのカテゴリーにいるからと検査の数値や表面的な行動でその子の人生を将来決めつけないでほしい。僕らにも夢を持たせてほしい。

僕の夢は僕の仲間達が皆と同じように教育してもらえる未来を作ること。そして今よりもっと豊かで幸せな世の中をつくること。三十年前、勇敢な少年ビルガーが勇気を出し必死の思いで訴えてくれたそのバトンを、時空を超えて僕は確かに受け取った。

僕も怖がらず勇氣と誠実さと強い意志をもって文章を綴り続けよう。そしてさらに世の中を良くするために今

自分ができることを使命感を持ってやり続けるのだ。人

う。

に救われ人の持つ優しさ、忍耐強さ、素晴らしさを身をもって実感してきた僕なら絶対できるはずだ。闇の中から光を見つけた瞬間僕は思ったのだ。たとえその光が遠く見えても決して届かないように見えても、ただ目の前のその光を信じ歩み続けていれば必ずいつかそこにたどり着くのだと。

扉を開くにはまず歩むこと。

草思社

ビルガーが十八年もの間闇の中で希望を信じ続けたように、どんな状況でもどんな世界であっても必ず光はあるのだと僕も信じ歩み続けよう。目の前にある扉を開くのは簡単だ。僕はまだ見えない扉を開きたいのだ。今はまだ目には見えないけれど、必ずその光の先にある扉を開ければ、そこには皆が平等に教育を受け本当の意味で豊かで幸せな理想の社会がきつとあるのだから。

(参考文献・引用)

もう闇のなかにはいたくない〜自閉症と闘う少年の日記

〜ビルガー・ゼリー

最後に。僕にまた書く意欲をくれたチャケレオン君に感謝の思いを伝えたい。チャケレオン君本当にありがとう



中学生の部  
選考委員特別賞  
**最相葉月賞**

仲間と共に

〜28人の努力、甲子園への切符〜

盈進中学校 二年

佐伯 皆人

九つの人九つの場をしめて

ベースボールの始まらんとす

(正岡 子規)

今年没後二〇〇年を迎える明治の俳人正岡子規が大の野球好きだったことはよく知られている。幼名「升」の

ぼる」をもじった「野球(のぼーる)」という雅号を用いた子規はアメリカより伝来して間もないその球技に大いに魅了されていたようだ。野球伝来から一五〇年を迎える今年、甲子園球児のヘルメットにはそれを記念するステッカーが貼られていた。今や国民的スポーツとして老若男女から愛される野球。とりわけ高校野球に対する人々の熱量には目を見張るものがある。

二〇二二年八月七日。僕は兵庫県西宮市にある甲子園球場のアルプススタンドにいた。青い空にくっきりと浮かぶ夏雲。黒土と緑のグラウンド。そしてスタンドを埋め尽くすスクールカラーのえんじ色。強烈な色のコントラストが十四歳の僕を圧倒した夏だった。

甲子園、それは言わずと知れた高校野球の聖地である。全国十三万一二五九人の高校球児(日本高等学校野球連盟令和四年統計)がしのぎを削り、全国の高等学校三五四七校(今大会)の頂点目がけて熱戦を繰り広げる。各校の甲子園のベンチ入りは一八人だから、実に0・67%

の確率でしか立てない舞台に僕たちの先輩がいる。その夢のような光景は今も僕の脳裏に焼き付いて離れない。

この夏、盈進高校は全国高校野球選手権広島大会において八三チームの頂点に立ち、見事甲子園への切符を手にした。ノーシードで臨んだ一回戦からの全七試合で先制を果たしリードを一度も許さない試合運びは地元福山を含む県東部を沸き立たせた。それもそのはず、古豪と呼ばれる盈進高校の甲子園出場は一九六〇年、一九七四年に続く実に四十八年ぶりの待ちわびた快挙だったからだ。

中学二年生の僕は、今、盈進中学校軟式野球部でピッチャーをしている。新チームに代わり部員は十人と少ないが、仲間と励まし合いながら練習に取り組む毎日だ。そんな僕たちの自慢は高校の先輩たちと同じデザインユニフォームに身を包んでいるということ。普段は高校野球部が使用している野球場と隣接した雨天練習場で練習し、先輩たちが球場で練習する姿をネット越しにずっと見てきた。泥だらけになりながらボールに喰らいつく

選手、監督の叱咤激励を受け一層気を引き締めて取り組む選手の姿を見ると、甲子園への強い思いが伝わってくる。だから先輩たちの甲子園出場は僕にとっては自分のことのように嬉しい出来事であり、実際に甲子園球場に足を踏み入れた瞬間のあの感動は忘れることができない。

この夏の感動を記録に残し、野球が大好きな自分自身の糧としたい、これが、今僕がこの文章を書いている最大の動機である。何が彼らを甲子園に導いたのか、先輩たちの強さの秘密を探りたい。彼らは甲子園という場所で何を感じたのか、先輩たちの思いに触れたい。僕はそんな気持ちで高校野球部員の三年生二十八人全員にインタビューを申し込んだ。この文章はその取材において一人ひとりが語った「高校野球」というものを僕なりに整理したものだ。

それではプレイボール！

◆なお文中、文章のリズムを重視して、尊敬する先輩たちの名前に敬称を用いていない箇所がある点を予めおこ

とわりしておく。

チームの要々キャプテンの役割、

コロナの蔓延防止のため、直前で入場行進がキャプテンだけになった。そこで広島代表の優勝旗を持って一人で堂々と行進したのが朝生弦大だ。プラカードを持って行進する女子生徒の姿で見えなくなってしまうような小さな巨人だが、その姿はチームの誰からも必要とされる唯一無二の存在感を放っている。

朝生選手について尋ねたとき、部員たちは声を揃えてその人間性、特に人への接し方において彼の右に出るものはいないと語る。周囲への気遣いが素晴らしく、何があっても相手を傷つけないように一緒に解決しようと動いてくれるのだ。どんなに小さなことでも、発言には細心の注意を払っている。メンバー以外にも、それがたとえ後輩であっても分け隔てなく「ありがとう」が言えること、朝生が誰からも愛されている理由だ。

それだけではない。リーダーとしての自覚が強く人の

前に立つ機会も多い分、その裏では準備を怠らない姿をメンバーは見ている。全体練習を終えても三十分残って最後まで個人練習をする姿、試合に出発する前の道具の準備は前日に全員で、帰りがけにマネージャーがおこなうが、当日朝、朝生がもう一度おこなう姿。そんな地道さの積み重ねが「キャプテン朝生」を作ったと言える。

五月の終わりの練習試合においてホームヘッドスライディングをした際、右膝の後縦靭帯を痛めた。直後の診断では一週間程度と言われたのだが、その痛みは夏大会、最終的に甲子園まで尾を引いた。キャプテン且つ不動の一番バッターが大事な場面で試合に出られない、そのことは朝生にとってもチームメイトにとっても大きな痛手だったはずだ。しかし、彼のすごいところはここでくじけなかったことである。選手たちに声をかけ続けチーム全体に目を配ることを怠らなかつた。

「甲子園には俺たちが連れていくから、今は休んでいろ」——同じポジションで試合に出ることになった梶岡航士朗のこの言葉は、責任感の強い朝生にとって大きな

励みになったという。

チームメイトが認める朝生のキャプテンシーについて、硬式野球部佐藤監督もこんなふうに語っている。

「このチームは）まさに、朝生のチーム。恐ろしい人間力です。困った時に彼が出ると、車なら給油ランプがついているところから真ん中辺りまで燃料が入る感じ。」

(デイリー・スポーツ二〇二二年七月二十七日朝刊)

広島大会準決勝まですべての試合で三塁コーチを務めた朝生は、決勝戦で同点に追いつかれた八回表という局面で打席に立った。沸き立つスタンドの期待に応える形で渾身の一打を放った瞬間を僕も鮮明に覚えている。

チームはここから一気に五点点し、広島大会優勝へと漕ぎつけたのである。

チームの要であるキャプテンの人間性は間違いなく甲子園出場の大きな理由の一つだと思う。とりわけその平等性を重んじ、時に自らの犠牲心で和を尊ぶ精神は仲間たちの心の一つに束ねる上で欠かすことのできないリーダーシップを発揮したはずだ。

ピッチャー／背番号1をめぐって

「背番号1」。チームを牽引する称号であるエースナンバーが高校野球において果たす役割にはかり知れないものがある。

佐々木大和は一年生の頃から数々の公式戦で登板してきた。陸上の指導者でもあった父親のトレーニングのもと、高校入学時には鋼のようにしなやかな身体のプロトタイプを武器に強打者に立ち向かう存在は、チームメイトにとっても「こんなピッチャーがいたら、俺たちは（甲子園に）行ける」と思わせる程頼れる絶対的エースそのものだった。

そんな投手陣を牽引する佐々木にとって忘れられない試合が二つある。一つ目は一年生の秋、広島県二位で勝ち上がった中国地区大会の初戦、関西高等学校（岡山）との対決。七回ワンアウト一・三塁のピンチで登板、延長十三回のタイブレークまでもつれる死闘を制し、七対六で勝利した試合だ。苦しい試合が終わった直後、ポ一

カーフェイスを意識してきた佐々木の目にも思わず涙が溢れ出た。そんな時佐々木の先輩たちが「お前のおかげだ」と声を掛けてくれたことは今でも心に刻まれている。

佐々木が自身のライバルとして名を挙げるピッチャーがいる。岡謙介。一年生の頃からずっと佐々木と一緒にレギュラー争いを続けてきた。彼のことを語る上で欠かすことのできない試合は一年生秋の三次高校戦だろう。

一年生ながら先発を任されたことが嬉しく、そして投げ切る自信もあったという岡の思いに反してまさかの初回四失点降板。チームは八対七で辛うじて勝利したものの、自分の力不足が情けなく、それ以上に先輩たちにも迷惑をかけてしまったことでメンタル崩壊をきたした岡。二日後の練習でもそのショックを引きずり続け、監督から櫛を飛ばされるという何とも苦い経験だ。しかしそんなときも先輩や同級生たちは彼を励まし続けてくれた。「今の自分があるのはあの試合のあとみんなが支えてくれたからだ」と笑顔で振り返る。

佐々木の忘れられないもう一つの試合。それは二年生

秋の広陵高校戦。途中から登板し甲子園常連校相手に一点リードで迎えた最終回、代打のホームランを浴びた流れで逆転負けを喫した。その後広陵は中国大会を制し、神宮大会では準優勝。そのままトントン拍子で春のセンバツへの切符を手にするようになるのだが、自分たちのチームを変えたターニングポイントになった試合として、この試合のことを思い起こす選手は多い。一瞬の気の緩み、一点の重みを、それぞれの悔しさで強く記憶に残すことになった一戦だ。

佐々木・岡のエース争いかと思いきや、実際甲子園の舞台でエースナンバーを背負ったのは向井勇だった。もともと外野手だった向井は夏大会直前で調子を崩している佐々木とは対照的な伸びを見せ、チームを甲子園に導く立役者となった。怪我也多く、メンバーを外れることも多かった向井が野球をやめずに続けることができたのは母親の存在が大きいという。

向井が小学二年生の頃、母親が仕事先の機械に手を挟む大事故に遭った。機械ごと病院に搬送されたが右手の

指をすべて失ってしまったのだ。大好きだったバレーもできなくなり体調不良の日々が続く中で、それでも試合を見に来てくれたりお弁当を作ってくれたりした母親。

「お母さんの笑顔が見たい」、その一心で彼は野球に打ち込んだ。「盈進の野球部は全員いいピッチャー。そんな中で自分には何かがあるか考えたとき、スピードでは勝てないからコントロールと変化球をもっと磨いてレギュラー争いに勝ち抜きたい」。このまっすぐな思いの向こうにはいつも母親の笑顔があった。彼を甲子園のマウンドに立たせた大きな原動力である。

一方の佐々木は、夏大会直前にスランプを迎えそれまで不動の背番号1から11へと変更。ライバル視してきた岡ではなく、外野手だった向井がピッチャーをすることに大きな衝撃を受けたという。特に甲子園球場にはそれまで仕事の都合で応援に来てもらえなかった母親が来てくれていて、1イニングだけの登板しか見せることができなかつたことは大きな心残りであるという。

それでも、佐々木は大好きなメンバーとして向井の名

を挙げる。「寮でも同じ部屋。朝夕の食堂にも一緒に行く。キャッチボールの相手も向井だし、映画も一緒に見る」。四国の独立リーグに入団し、プロを目指す佐々木と大学に進学し野球を続ける決断をした向井。次のステージを見つめる二人には、さらに強い絆が育まれつつあるようだ。

ここでエースナンバーを巡る三人の投手について記したが、野球部にはまだまだ多くの控え投手が存在する。今中学野球部でピッチャーをしている僕にとってはどの選手の話も心に刻まれるものばかりだ。これについてはのちほど記すことにする。

### つなぐ打線①、最強のバッター陣

今夏の広島大会の全ての試合で先制点を挙げている盈進打線。そんな強力打線の中軸を担う選手たちはどんな練習をしてきたのだろうか。不動の一番、朝生弦大については前述したので、以下打順二番から話そう。

## 二番 鶴田海斗

もともとピッチャーとして入学してきた強肩の鶴田は、二年次の秋の大会高陽東高校戦においてレフトからのバックホームでランナーを刺殺しピンチを切り抜けた経験を持つ。監督からも「こういう時にやってくれる」と褒められたことで続く広陵高校戦でホームランを打つなど大活躍。寮生活でも練習後の学習を夜中まで続ける勉強家で、成績はオール5。周囲からは「すごいことをやっているのにすごいと思っていない」と評価される謙虚さが光る。

## 三番 秋田浩佑

秋田は監督曰く「一番ワイルドな選手」だそうだが、実際には監督から最も厳しい指導を受けた選手の一人だった。それはまさに「立っただけで注意される」ほど厳しいものだった。二年生の秋の大会でベンチ入りメンバーから外され、本気で野球部を辞めようと監督へ申し出るセリフまで考えたそう。しかし、自分を応援

してくれる家族や地元の人たちの期待に応えたいという思いがそれを押しとどめさせた。三年生春の大会でレギュラー入りを果たし、そこで監督から「今まで散々厳しく指導されてきたから、あとは楽しんでいいぞ」と言われたことは忘れられない瞬間だ。広島大会で打率六割越えをマークした強打者の勝負強さは、監督の戦略通りに鍛えられたメンタルによるところが大きいと思われる。

## 四番 杉浦和宏

一年次から試合に出場し、トップレベルの技術力を誇る杉浦。愛称スギ。夕食後の個人練習でも一番遅くまでバットを握り、黙々と練習に励む姿は、「盈進の四番」を背中で語るバッターであった。「スギがいるから大丈夫」という安心感を与えるチームの大黒柱的存在の杉浦も、しかし甲子園という舞台は特別な場所だった。セカンドベースとサードベースの間でランナーを挟んだ際深追いしすぎてアウトを取ることができなかったのである。「まさかスギがあんなプレーをするなんて」。序盤の大量失

点を招ききつかけとなったプレーはチームを明らかに動揺させた。さらにそのミスをバッティングで挽回しようとするも、焦りから空回り。「自分の幼稚さを痛感した。周りを見ることができていなかったことに気付かされた。」これまで試合に負けて泣くことなどなかった杉浦の大粒の涙は後悔の涙だったという。四番でよかったか、という僕の問いに「四番という打順は、自分にできることは何かという問いを常に自分に投げかけてくれた。だから四番という立場が自分を成長させてくれたと思って感謝している」と語る杉浦。そこで僕は気づいた。だから、この選手が四番なのだということに。

#### 五番 山藤龍希

俊足強打の選手として広島県大会では先制点を挙げる内野安打、甲子園においても二塁打二本と犠牲フライで計三打点の大活躍。そんな山藤を周囲は「バッティングに対する向上心がすごい。いつ見てもバットを持って素振りをしている」と評する。寮の点呼は朝六時だが、そ

れより前から素振りしている姿を多くの選手が知っているのだ。五月の終わりフルスイングをした際に右手のひらを骨折した山藤は痛みをこらえながらバットを振り続けた。大舞台での活躍の裏には一本を捻出するための努力を惜しまないひたむきな選手の姿があった。

#### 六番 中島知寛

甲子園ではチーム初打点となる右中間三塁打を打ち、五打数四安打二打点という華々しい結果を残した中島。「ああいう大舞台ではやってきたことしか出ない」という監督のことば通り、バッティングゲージの中で一打一打悩みながら「考える」野球を続けてきた成果が最後に花開いた。

同じ理系で勉強も野球も両立する「四番杉浦」の背中をずっと見続け、大きく影響を受けた。寮生活を選んだのは二年生の三月。学校の行き帰りの時間をバッティング練習に充てたいと考えた上での決断だった。そこから寮の点呼ぎりぎりまでバットを振り続け、ようやくレ

ギューラーに定着するようになったという。それでも夏の県大会が始まる前最後の練習試合、開星高校（島根）戦の前までは二十打席ノーヒットに苦しんだ。杉浦と一緒におこなった前夜の自主練習では、二人で山に向かって「打ちたい！」と大声で叫び、無心でバットを振りまくったそう。その結果小学一年生で野球を始めた中島から人生初のホームランが飛び出すというスランプ脱出に成功したのである。

阪神ファンでもある中島にとって甲子園という舞台は人一倍特別な場所だった。でもそこで結果を残すことができたのは一打一打で悩み、それを仲間と共に乗り越えようとし続けたからだ。「自分一人では絶対にできないことが、このメンバーだからできた」。このチームはどのチームより強いと中島が確信する理由は、仲間への信頼と彼らとの絆にある。

#### 八番 西本翔清

中学時代はキャプテンの朝生と同じクラブチームに所

属していた。長い期間Aチーム入れず同級生たちの活躍を横目に、守備やバントの精度を高めるための練習を重ね続けた。最後の最後にレギュラーを掴み取った「努力の人」である。そんな西本の象徴的なプレーがある。夏の広島大会決勝、西本のエラーで同点となってしまっても、その直後センターに抜けそうな打球をスライディングキャッチするという見事なファインプレーだ。勝ち越さなかったこと、自分のミスを自分で取り返す意地のプレーこそ、西本の野球の真骨頂とも言える。自分が出ない試合にも応援に來続けてくれた両親への感謝がこうしたプレーに結実しているはずだ。

◆七番バッター奥信へのインタビュー内容は捕手の選手のエピソードとして後述する。また、九番バッターは前述した投手陣となっている。

#### つなぐ打線② 控えメンバーの思い

ここまでのバッターはいわゆるレギュラー陣で、入学

後、一年生のときから目立った活躍を見せてきた選手が多い。もちろんその座を掴み取った背景には、彼らのたゆまぬ努力があるはずだが、彼らの影日向となってきた選手の存在があつたことも間違いない。ここではチーム力に直結する選手層の厚みを生み出した、控えメンバーたちの思いにも光を当ててみたい。

甲子園では西本に続いて六回から出場したセカンドの平塚颯太。内野全般を守ることができるユーティリティが持ち味で、チームの作戦に幅を生み出す遊軍である。

もともと正遊撃手の秋田より前にシヨートに入り、レギュラーを譲り渡す形になったが、「秋田が抜けても平塚がいる」「平塚がいるから秋田が生きる」と言わしめるほど、チームの安定剤的存在になった。

そんな平塚を高く評価するのが、前述したキャプテン朝生選手の穴を埋めた梶岡航士朗である。広島大会決勝尾道高校戦で先頭打者ヒットを放つなど、「ここ一番で打ってくれる」存在として打率以上のものを残した選手だが試合には出られなかった時期が長い。スタメンでレ

フトを守った秋のリーグ戦でランナー満塁の際にまさかのフライを落とす苦い失態以後、スタメンを外されたのである。本気で野球をやめようと悩んでいたとき、自分同様レギュラーを外された平塚の姿が目に見え込んできた。誰よりも夜遅くまでバットを握って練習に打ち込むひたむきな仲間がいる、一念発起した梶岡は苦手意識の強かった守備練習に一層打ち込んだ。最後に勝負強さを発揮するその精神力は仲間の姿によって覚醒されたものだと言えよう。

西野楓生。外野全般を守ることができ、さらに強肩で俊足という守備の名手である。レギュラーを掴むため、与えられたチャンスで結果を出そうと、質・量ともに考え抜いた練習を重ねてきた。マネージャーに頼んで後方からバッティングを見てもらったり、動画を撮って監督にもアドバイスを求めに行ったりするほどの熱心さが際立っている。入学直後の紅白戦でセンターの守備についていた西野はゴロを二回連続でトンネルするという失態でポジションを失った。バッティング以前に守備と走塁

ができなければメンバー入りは不可能だと悟り、それから守備の猛練習に励んだという。

梶岡は言う、「このメンバーは、チームの中でも同じような境遇に置かれていたメンバーである。チャンスを与えられてもそこで力を発揮することができずに悔しい思いをたくさん味わった。試合に出られなくて苦しい時期もあったし、正直やめたいと思ったことだって何度もある。でも、このメンバーだからやってこれたという思いがそれぞれにある。野球には仲間のために自分を犠牲にするという場面が多くあるが、その役割を果たすことができたのは、やっぱり仲間のおかげ。」

そんな梶岡のひたむきな姿をキャプテンの朝生も見ていた。自分がケガで出場できなかったときに梶岡がどんなに上手くなっていく姿を見て「あいつより練習量では勝とうと思っていた。少しでも長くグラウンドに残って練習をすることに決めていた」という。お互いがお互いを認め、それを超えようと必死になっている関係がチーム内のあちこちにある選手たちに話を聞けば聞くほど、

そうした相乗的な成長要因の存在が見えてきた。

### 縁の下が認める「縁の下」

さて控え選手たちのインタビューをおこなう中で、彼らが口を揃えて「尊敬する仲間」として挙げた人物がいる。それが新谷清だ。

中学時代からキャッチャーをしていた新谷。野球において「扇の要」と称されるほど重要なポジションを担う人物はコミュニケーション能力に長けたチームのムードメーカー的存在だ。常に周囲に気を配り、どんな人にも分け隔てなく話しかけ、場を和ませる。盈進野球部の中心人物であり、なおかつ学級でも率先して仲間をまとめるオールマイティさはチームメイトからも一目置かれている。

その新谷が「人と接する時に態度を変えることなく、誰とでも仲良くできる。試合でも一番声を出して野球以外の場面でも好かれる人物」と絶賛するのが奥信武憲。広島大会、そして甲子園で正捕手として活躍した選

手である。キャッチャーというポジションを巡って切磋琢磨した二人は高校三年間同じクラスに所属し、お互いを親友と呼ぶ関係にあったのだ。

奥信はチームの中でも特に監督から厳しい指導を受けてきた選手の一人だ。些細なことでも理不尽に指導を受けるので、そうならないようにプレーをしたことが逆にプレーを小さくしたり、ミスに繋がることもあったと振り返る。監督が自分に厳しく接する理由について奥信本人は「自分はレギュラー陣の中でも身体能力が高い方ではない。だから声だけは誰よりも出してきた。監督は厳しく当たることができると思った人にしかそうしない」と分析する。監督の指導を受ける際も、監督の話が終わっていないうちから食い気味に返事をするほどの向こうっ気の強い奥信だが、実際は放課後が近づくにつれて、今日の練習も怒られるのか：とお腹が痛くなり始めたそうだ。声出しだけでなく、練習量と練習時間はナンバーワンだとチームメイトからも認められるほど、監督へのアピールを続けた奥信への檄は、監督からの愛の鞭だった。

たに違いない。

そんな奥信の野球人生で一番大きな出来事はキャッチャーへのポジション転向だった。入学時点ではサードをしていたが、怪我をした先輩の穴を埋めるべくショートへコンバート、その後ファーストも一年間ほどやってみたが、どうしてもしっくりこない。なかなか自分に合ったポジションが定まらない中、山藤や佐々木の勧めもあって新チームの初日にキャッチャーを志願する旨を監督に伝えたそうだ。

もちろん奥信はキャッチャーへの転向を親友の新谷に事前に伝えていた。その時のことを新谷はこう振り返る。「奥信がキャッチャーをしようと思うと言ってきたときは、ポジション争いに負けないように、自分が頑張ればいいだけだと素直に思った。でも元々四人いたキャッチャー陣の中に最後に飛び込んできた奥信が着々と実力をつけ起用される姿を見て、自分はここまで長くキャッチャーをやってきたのに：という思いが生まれたのも事実だ。奥信がミスをした時は、自分だったらできていた

かも……とも思ったことだ。でも奥信は「(新谷) 済に追い越されたくないから、とにかく練習した」と正直に言ってくれるし、自分がマスクを被ったときは、試合の中で気づいたことを教えてくれた」。

新谷は奥信を一番の親友だと断言する。チームの中では声出し、ムードメーカーというキャラクターが似ていたこともあるし、何より奥信が中学時代の親友にそっくりなのだという。チームメイト全員と仲のよい奥信だがチームの中に腹を割って何でも話せる存在がいたことは大きかったと語る。

キャッチャーとして飛躍的に頭角を現す奥信に対して新谷は、三年生の二月、肘の靭帯を損傷し、治療に半年かかるという診断を下された。夏大会に間に合わない自分にはサポートに回るべきかどうか監督に相談すると意外にもまずは治療に専念するようにと指示された。八十人近い部員を三十人に絞る最初のセレクションも通過し、まだ野球ができることの喜びも感じたが、やはり夏の地方大会のベンチ入り二十人には入れなかった。

その発表の直後、新谷は監督に呼ばれ、そこで「応援団長」を任命される。これから始まる夏大会で応援を取りまとめ選手を鼓舞する大役に抜擢されたのである。

高校野球において「サポート」の果たす役割は大きい。夏大会が近づくにつれ、徐々にメンバーが絞られ、最終的にベンチ入りの二十名が確定すると、外れた約六十名は「サポート」メンバーとなる。自分たちの練習時間を削って二十人の選手たちのための環境づくりに徹するのだ。その中でも特に応援を取りまとめる「応援団長」は試合において選手が力を発揮できるように応援体制を整えるという重要な任務である。新谷はベンチ入りのメンバーからは外れてしまったが、この任務を与えられたことに大きな誇りを感じたという。

選手たちは新谷の姿をよく見てきた。「最後まで諦めない精神力はチーム」(西野談)「結果が出なくても努力できる、すば抜けたメンタルの強さ」(西本談)「新谷もやっているのに自分がやらなくてどうすると思っただ」(平塚談)「誰よりも悔しかったのにみんなを引っ張っ

てサポートしてくれた。新谷のために勝たんといけんと思つたことが何度もある」(梶岡談)

新谷は仲間たちを思い、献身的にサポート役を務めた。甲子園入りしたチームメイトに向けて動画メッセージを送るなど、ユーモアも忘れない応援団長の思いに応えようと、選手たちは心をつにしたのである。

高校野球を終えた夏休み、校内の学習スペースには新谷と奥信が二人で勉強する姿があった。甲子園から帰つて一日だけ休んだ二人はすぐにそれぞれの進路に向けて受験勉強を始めたのだ。同級生の仲間たちからは少し遅れをとっていたが、高校野球で磨き上げた精神力は誰にも負けはしない。キャッチャーポジションを競い合った親友の二人は、このあとそろって希望する国公立大学への進学を決めることになるのだから。

まだまだいる「縁の下」の存在、投手編、

寺田大和。盈進中学校出身で僕が所属する軟式野球部の偉大なる先輩だ。主に中継ぎとして先発投手の後を繋

ぐ重要な役割を担う。寺田と言えば広島大会準決勝、誰もいない一塁へ牽制球を投げたという伝説的なプレーが記憶に残る。前代未聞のミスに内心「帰りたいかった」と漏らす寺田であったが、ファースト中島の「俺がベースに入れなかつたのが悪い。予測できなかった俺のせい」という一言に救われたという。しかし、このプレーが実はチームの緊張感を和らげ、のびのびと戦えるきっかけになったことは、その後の試合展開が物語っている。

花岡航大。試合に出られなかった期間の方が長く、同級生が試合でプレーする姿を見て悔しさを感じ続けたという。登板機会に恵まれなくてもベンチの中を明るくしようと率先して声出しをしていた花岡にある仲間の人々がこんな声をかけてくれた。「お前が(ピッチャーとして)こんな投げられるようになるとは思わなかつた」。自分の成長を認めてくれる仲間の存在に気付かされた瞬間だった。

佐藤涼生。ピッチャーで新チームには一人しかいないサウスポーだったため、ワンポイントとして試合に登板

する機会もあった。二年生の途中までは遠征にも帯同していたが、結果が出ずに苦しい時期を迎えメンバーからも外れてしまう。悔しい気持ちはもちろんあったが「頑張っている仲間が右にも左にもいる。チームの目標である甲子園に自分は出られなくても仲間には出てほしい」という気持ち芽生え、バッティングピッチャーやマシンのボール入れを率先して買って出た。

平松拓真。俊足で「冬練の平松」という異名を持つほど冬季のランメニューでは仲間たちを引っ張った。しかしプレーにおいては周囲に置いていかれることもしばしば。同級生たちにできて自分にできないことはない、と歯を食いしばって練習に耐えた。夏大会のメンバー発表後「越えるにはどうすればよいか」と常にライバル視してきたレギュラー陣たちへの視線が「甲子園に行かせるにはどうすればよいか」というものに変ったという。チームメイトの存在の大きさを思い知らされるエピソードである。

椿博翔。授業中にうっかり居眠りをしたりする姿が監

督や部長の耳に入ると、「そんなんじゃ野球部員として認められない」と厳しく指導された。でも一つ、野球が好きという思いは持ち続けてきたからこそ仲間たちと一緒に最後まで続けることができたという。特にピッチャーというポジションは、バッティングピッチャーや後輩たちのバッティング練習の際のピッチャーとして自分以外の仲間たちや次世代の育成に役立てる場面が多く、チームのために高校野球を続けた三年間だったと自負している。

まだまだいる「縁の下」の存在、野手編、

竹邊大祐。小さな身体から繰り出される球筋には勢いがあり、夏大会メンバー選考の三十人に入るほどの実力の持ち主だったが、最終的にベンチ入りメンバーから外れた。最後に自分の力を出せなかったこと、これまで応援してくれた両親や野球でお世話になった方々の期待に応えられなかったことは本当に悔しかった。しかし甲子園に立つメンバーの姿は「めっちゃくちゃ恰好よかった。

彼らを応援できる嬉しさを感じた」という。応援団長の  
新谷と二人で応援団を引っぱった影の立役者である。

森元混大。メンバーには入れなかったが、チームのため  
に自分ができることは何かと考え、竹邊と共に交互で  
バッティングピッチャーをしてきた。打たせるのもきつ  
い任務ではあるが、ベンチ入りメンバーがいつも「あり  
がとう」と声掛けしてくれたことに生き甲斐を見出すこ  
とができたという。そんな森元は寝坊して大急ぎで学校  
へ向かうも途中、車におつかつてしまったことがある。

監督から「寝坊するという気の緩みは、命を大切にしてい  
ないということ」と叱られ、草取りを命じられること  
も。盈進球場を美しく保つための草取りも、今となって  
は高校野球の思い出の一つだ。

田邊泰成。彼の忘れることのできないエピソードは、  
多くの選手が恐れおののく盈進の冬練習、通称「浜トレ」  
と呼ばれるものである。

やりきって涙を流す選手もいるほどきつい年末のト  
レーニングを乗り越え「もう怖いものはない」と語る田

邊は、ベンチ入りメンバーを外れたあと、ノックを周り  
から声で盛り上げるなど様々なサポートに回った。県大  
会に優勝した時、ようやく達成感を感じ、安堵したとい  
うチーム思いの選手である。

光成悠真。三月のリーグ戦で一塁にヘッドスライディ  
ングで帰塁するも、逸れたボールに喰らいつこうとした  
一塁手に肩を踏まれ脱臼してしまった。「手術したら夏  
は間に合わない」と医者から言われ、夜家で大泣きをし  
たという。最後の三十人にも残り、夏も練習に入ってい  
たが、おそらくベンチ入りメンバーに入るであろう選手  
を練習に専念させるため一歩下がる気遣いをしてきたと  
いう。「辛いことがあっても仲間がいたから辞めずにやっ  
てくれた」。チームの勝利の裏には、選手を思いやる心  
がいつも見え隠れしている。

森山直哉。ずっと試合に出られなかった。二年生で新  
チームになった時は、野球をやめるか続けるかを本気で  
悩み、練習から離脱したこともあった。そうしてグラ  
ンドから一歩外に出て全員を見渡してみたとき、しんどい

練習でも声を出し続けて踏ん張る同級生の姿を目にする  
ことになる。自分の一番しんどい時に声を掛けてくれる  
仲間たち。野球を続けたのはそうした仲間たちを甲子園  
に行かせ恩返しをすることにあつたという森山。最後の  
紅白戦で三打数三安打を打ったときの気持ちよさは忘れ  
られない。「自分が野球をやってきたのはこの気持ちを  
味わいたかったからなんだ」。野球が大好きだった少年  
時代の思いをもう一度思い出してユニフォームを脱いだ  
森山に、こうしたチャンスをくれたのも仲間たちだった。

岡崎颯太。野球の知識が深く、戦略的なアドバイスも  
できる頭脳派・理論派として監督からの信頼も厚い。そ  
のためベンチ入りメンバーからは外れたがベンチ入りメ  
ンバーに帯同し練習を手伝う名簿に名を連ねた。主に相  
手チームの偵察などを担当しており、ビデオチェックな  
ども中心的にリードしてきた岡崎。自分だってスタンド  
で仲間たちがプレーしている姿を見たいけれど、チーム  
は自分の情報と分析力を必要としてくれている。広島大  
会準決勝までずっと他チームの試合を孤独に見続けた岡

崎は常にそうしたジレンマの中で選手と一緒に戦い抜  
き、選手たちは最後の決勝戦を岡崎に見せてくれたのだ。  
まさに「縁の下」と言える岡崎はチームに欠かすことが  
できない存在だった。

これぞまさに「縁の下」マネージャー

盈進高校野球部には二人の三年生マネージャーが存在  
する。いずれももともと野球部選手として入部した男子  
生徒である。

平本壘己。もう一人のマネージャーが「表」のマネー  
ジャーだとすれば、平本は「裏」のマネージャーである。  
必ず二人でアイデアを出し合って選手一人ひとり、そし  
てチームを支えてきた。気を配るということを最も大切  
にしてきた平本。選手たちの表情に注意して普段と変  
わったところ、違和感を感じるところがないかチェック  
し続けた。例えばキャッチボールの際に抜けた球が多い  
選手がいれば、「肩、大丈夫か」と声を掛け、ランニング  
の際に足を引きずっている選手を見かければ大きなケガ

につながらないように心配したりといった具合にだ。盈進のマネージャーはユニフォームの洗濯をしたり、選手の食べるおにぎりを握ったりすることはない。選手たちが自らやるべきことは選手たち自身でおこなうからだ。

その代わり同じプレイヤーの目線から、仲間のいいプレーを引き出すためのサポートはとことんおこなうのである。平本は選手として大成したわけではないが、マネージャー業を三年間継続できたことに大きな誇りと充実感を感じている。

そして最後に、甲子園のマネージャーベンチ入りを平本の方から譲り受けたもう一人のマネージャーがいる。内海太陽。平本が暗がりでも足元を照らす「月」ならば、まさに光を与え続けた「太陽」としてチームを牽引した敏腕マネージャーである。彼こそキャプテン朝生とはまた異なったリーダーシップを発揮したチームの要なのだ。選手として第一線で活躍していた内海がマネージャーへ転向したのは二年生の夏、走塁練習で肩を外し手術、完治まで一年を要すると宣告されたタイミンングだった。

一時は退部し学業に専念する道も考えたが、野球を続けることにこそ意味があるのではないかと思直した。

内海のマネージャー業は多岐に渡る。アップ前には「今日の練習はこういう意識でやっていこう」、練習終わりには「今日の練習のマイナス面を明日の練習でリカバーしていこう」と常に選手に語り掛け、まさに監督のような存在が仲間にいるという新しい光景を生み出した。

選手に向けて毎日話をするのだから、話題にも気を遣う。野球ボールの紐をほどくと379・6cmだったことから、「ボールを使う競技は大変だ。結果が出ない時もある。でもみなくろう(3796)している。この紐が教えてくれるんだから、みんなしんどいことも一緒に楽しくやっていこう」。選手たちが内海の話に素直に耳を傾け、彼らの表情が綻ぶ瞬間である。

メンバーを見つめる観察力にも卓越したものがある。実は僕がこの文章を書き上げるまでの全てのインタビューを内海先輩に同行して頂いた。その都度内海先輩は選手たちのエピソードを引き出して、話しやすい環境

で整えてくださった。誰よりも選手たちを見続けて支え続けたマネージャーの存在に、すべての仲間たちが信頼を寄せているのが手に取るようになった。

そしていざ、甲子園へ

四十八年ぶりの甲子園での活躍を一目見ようと、スタンドを埋め尽くす約三千人の大応援団。僕たちが長蛇をなす入場エリアをくぐり抜けアルプススタンドに到着するとまもなく、試合は開始された。

一回、先発向井が三短長打で四点を先制されると、二回は左翼席に今大会一号となる2ランホームランを浴び暗雲立ち込める立ち上がり。広島大会では見せたことのない失策や判断ミスが続くと、そのたびにスタンドからため息が漏れた。

「とにかく人が多い。これまで全ての大会で外野に人がいなかったのに、周りは見渡す限り人が埋め尽くして、僕らの一挙手一投足に反応がある。甲子園独特の風は見たことのない打球をつくり出し、ゴロもウェーブしてく

る」(鶴田談)「どうやって守ったらいいか分からなくなった。イメージが湧かないまま目測を誤った」(山藤談)「異様な空気感。これまでの練習や試合でもかなりの暑さを経験してきたが、それとは何か違う暑さだった」(秋田談)甲子園には魔物がいるというが、盈進野球部も見事にその魔物に憑りつかれていたと言っていてよい。

しかしこのままでこの大応援団を帰すわけにはいかない。二回裏に五番山藤、六番中島が連続長打で反撃を開始すると三回は再び山藤が右翼線へ二点二塁打を放つ活躍ぶり。六回、三点差に迫ると大応援団のボルテージが一気に最高潮に。点を取られては取り返す展開という粘り強さを見せた。七点を追う八回裏には三番秋田の二塁打を皮切りに、山藤の右犠飛と中島の左中間への適時二塁打で二点を返すも、反撃もここまで。対戦校を上回る意地の十三安打という反骨心を見せたが、12対7で初戦敗退という結果となった。

新谷率いる盈進の大応援団はアルプススタンドをえんじ色に埋め尽くし、大熱戦を大いに盛り上げた。三年前

コロナとともに高校野球の生活をスタートさせた彼らにとって、プラスバンドや応援団、チアリーダー、そして在校生と保護者とが一体になった応援は初めての経験であり、人生で忘れられない一日になった。「甲子園のアルプスは一回戦で終わるには勿体ないほどすばらしい応援だった。あの応援はお前の人間性のおかげだ」。のちに新谷が佐藤監督から労われたことばである。

おわりに

盈進野球部は甲子園で山形代表鶴岡東高校相手に終始苦戦を強いられていたが、僕は先輩たちの姿を見ていてどうしても負ける気がしなかった。山藤選手や中島選手の長打に限らず、平凡なゴロやフライでもセーフになるように全力で走り切る姿、ヘッドスライディングをしてユニフォームを真っ黒にする姿、どんな状況でも先輩たちは決して諦めずにプレーし続けていたからだ。負けた瞬間のことを僕は、正直よく覚えていない。ただ一つ確かに記憶していることは、僕はこの日甲子園において、

人生で最も大きな拍手をしていたことである。

盈進高校野球部の強さの秘密は何か。それを知りたくて二十八人の先輩たちから話を聞かせて頂いた。その結果分かったことは、とにかくこのチームは「仲が良い」ということだった。誰もが本気で野球に向き合い努力を惜しまない仲間が集い、お互いに敬意を抱きつつその努力を連鎖させてきたのである。「すごいと思う選手は誰ですか」という僕の問いに、名前が挙がる選手が一人じゃないこと、強さの秘訣はまさにここにある。佐藤監督も「このチームにスーパースターは存在しない」と話されるそうだが、そうしたチームだからこそ甲子園への重い扉を開くことができたのだ。そして、もう一つ、先輩たちが「仲間と共に自分で考え、行動する」習慣を身に付けていたことも大きなポイントである。先輩たちは僕の質問に対して常に自分のことばで答えてくれた。そのことばの一つひとつにはずっしりとした重みがあったと感じている。

僕も盈進中学野球部でピッチャーをしているが、ピッ

チャアが立つマウンドというものは孤独だ。少し高くなっているその場所に立つと、まるで大きな山に一人で登っているような、そんな気分になる。勝っても負けてもそこにどんな理由があろうとも最終的に責任を負うのはピッチャーだからである。悩みを抱えがちな僕は、ピッチャーをしていることで辛いことがあっても吐き出せない経験を何度もしてきた。

しかし、このインタビューを通して向井投手も佐々木投手も岡投手も決して一人で戦っていたわけではないことを知った。彼らの後ろには多くのピッチャーが控え、またいつも八人の野手が背中を押してくれているのだ。それだけではない。試合に出る仲間も、試合に出ない仲間も、スタンドで応援するメンバーもマネージャーも、二十八人全ての三年生と後輩たちすべてがいて初めて野球というものができているのだということに改めて気づかされた。

僕の周りにも常に明るく接してくれる仲間がいる。そんな仲間たちと一緒に、一つの勝利めがけて投げるこ

のできる「エース」に僕もなりたい。膨大な時間をかけて先輩たちにインタビューをおこない、この文章を書き終える今、そんなふうを考えている。

甲子園から帰ってきた盈進球児を代表して朝生選手がこう締めくくった。「伝統のこのユニフォームで、好きな野球を、好きな仲間たちとやれたことはとても幸せでした」。同じユニフォームで戦い抜いた高校三年間。先輩たちは、広島でいちばん野球が上手かったのではない。自分たちの力で信頼と絆がもつとも強いチームを作り、チームとしていちばん輝いていたのだ。僕はそう確信している。

それではゲームセット！

二十八の心ひとつに九つの

場をしめ励むよき仲間たち(佐伯皆人)

◆インタビューに協力してくださいました二十八人の先輩たちを、先輩たちが作った短歌と共に紹介する。(順番はこの文章に登場する順とする)

◆半世紀待ちわびていた甲子園

アルプスに咲く歴代の笑顔

(朝生弦大)

◆ツーンアウト追っかけた舞台目の前に

気づけば掲げる勝利のメダル

(佐々木大和)

◆三年間目指し続けた夢の地の

スコアボードに盈進の文字

(岡 謙介)

◆碧い空熱き戦い青春の

勇往邁進ボールに込める

(向井 勇)

◆サイレン音鳴った直後に涙出る

高校野球に今終止符を

(鶴田海斗)

◆坊主にし親元離れ山の上

私の恋人野球だけかな

(秋田浩侑)

◆甲子園支えてくれた人たちが

繋げてくれた出逢いに感謝

(杉浦和宏)

◆土壇場で心が揺れて口に出す

ALLIZZWELLきつとうまくいく

(山藤龍希)

◆「大丈夫」日々の努力は裏切らない

仲間を信じて自分を信じて

(中島知寛)

◆二年半艱難辛苦の連続で

やっと来た夏最高の夏

(西本翔清)

◆コロナ禍で制限多く困ったが

我慢の先に甲子園あり

(平塚颯太)

◆甲子園夢の舞台で堂々と

響き渡せる「盈進」の音

(梶岡航士朗)

◆甲子園球児の心また集う

今年の夏も熱き戦い

(西野楓生)

◆甲子園表情も見えぬその先に

大きくうつる君の姿

(新谷 済)

◆三年間高校野球きつかった

それでも一生野球大好き

(奥信武憲)

- ◆ 全員で夢の舞台でプレーした  
この経験をこれからの糧に  
(寺田大和)
- ◆ 二回裏臙脂に染まる三塁側  
聖地に響く矜れよ盈進  
(花岡航大)
- ◆ 夏終わり恋しくなったユニフォーム  
また着れるかなさらば青春  
(佐藤涼生)
- ◆ 三年の努力が実った夏大会  
スタンドからの熱き応援  
(平松拓真)
- ◆ 甲子園ベンチ入れずスタンドで  
みんなで奏でた最高の音色  
(椿 博翔)
- ◆ 立っていたアルプススタンド最後の夏  
前を向いて全力応援  
(竹邊大祐)
- ◆ 甲子園スタンドからの叫び声  
あいつらに届いているかな  
(森元滉大)
- ◆ 甲子園球児の気持ちまた集う  
今年の夏も熱き戦い  
(田邊泰成)
- ◆ まだいけるその声かけが背中おす  
きつい浜トレ終われば涙  
(光成悠真)

◆ つらい中がむしゃらにメンバーへ

みんなでつないだ広島の上  
(森山直哉)

◆ 澄んだ空燃えるえんじとやまぬ声

天まで届け仲間と共に  
(岡崎颯太)

◆ 何度でも苦しい時期を乗り越えて

最後に変えた盈進の歴史  
(平本壘己)

◆ 白球を握らず終わる今年の夏

蔭の戦力悔いなき青春  
(内海太陽)

#### ◆ 参考文献

復本一郎編『正岡子規ベースボール文集』  
(岩波文庫)



中学生の部  
選考委員特別賞

リリー・フランキー賞

父は誇り

大阪府柏原市立玉手中学校 一年

チャン コク アン

私の父さんは、一九八〇年（昭和五十五年）四月三日にベトナムの北部のナムデインの農家の子どもとして生まれました。私の父さんは、三人兄弟の真ん中の子どもでした。そして、あまり裕福な暮らしではなく、貧しい暮らしでした。常に食べ物不足していて、着る物にも困っていました。

しかし、そんなきびしい暮らしでも、私の父さんは勉強にはげみ、田植えの手伝いなどもがんばりました。しかし、小学校から高校まで働きながら勉強をしていたので成績はあまり良くなかったです。なので、一九九九年（平成十一年）に大学受験を試みましたが、成績があまり良くなかったので、結果は落ちました。当時の私の父さんの夢は大学の生徒になることでした。だから夢をかなえるためとして大学への入学を目指していました。しかし、一回目は落ちてしまったので、私の父さんは二回目で絶対に大学に合格するという目標を立てて、勉強にはげみました。そしてついに、二〇〇〇年（平成十二年）と二回目の大学受験で大学に受かりました。私の父はとっても喜びました。私のおじいちゃんもすごく喜んでいました。大学に入学する時私の父さんは、「機械専門科」という科目を選びました。そして大学に入学しても、食事店の手伝い、家を建てるのを手伝ったり、タクシーの運転などの仕事もしながら勉強をしています。昼間は大学に行って勉強し、夜間に、仕事をしてい

ました。そして、二〇〇五年に私の父さんは大学を卒業しました。その後、私の父さんはベトナムにある「NI DEC」という日本の会社に入社しました。そこで一年間働きました。そして二〇〇六年に私の父さんは日本に渡って仕事をすると決心しました。なぜ日本に渡ろうと思ったかという、日本の国は発展している国で現代に近い環境で仕事がしたいということで行きました。そして機械専門科について勉強していたので機械が発達している日本の国を選んだわけです。二〇〇九年（平成二十一年）に私の母さんと出会って結こんしました。さらに、二〇一〇年（平成二十二年）に私が誕生しました。その後、私が一才になったとき、私の母さんはベトナムに住み、私の父さんは再び日本に渡って仕事をしました。そして、私が6才になった時に、私の父さんは、私の母さんと私を日本に連れて行きました。私の父さんはたくさんの手続きを済ませて私の近所にある「柏原市立玉手小学校」に入学させてくれました。しかし、その時の私はずっとベトナムにいたので、日本語は一言も話せず、

友達とは何も話しができませんでした。そんなきびしい時でも私の父さんは、日本語を教えてください、学校で教わった内容の復習を手伝ってくれたりしてくれました。学習でつらいことや嫌なことがあった時は、やさしくはげましてくれました。いつも、楽しい空気を作ろうと一生懸命でした。公園にも連れていってくれました。半年が経ったころ（一年生の二学期半ばころ）には、すっかり日本語を使う生活にも慣れました。日本人の友達もたくさん作ることができました。日本人の友達とも話ができるようになりました。すべては私の父さんが私に日本語を毎日教えてくれたからです。私の父さんのおかげでこんなたくさんの方ができたにもかかわらず私の父さんはいつも

「今までもずっとがんばってきたね。」

「がんばってえらいね。」

と、はげましの言葉をかけてくれました。一年生の三学期には、二〇一四年（平成二十六年）に生まれた弟が日本に来ました。その時の私の父さんはうれしい気持ちも

ありましたが、不安な気持ちや心配する気持ちが少しだけありました。今では、私の家族の日本で暮らす生活はすっかり安定しました。私は「柏原市立玉手中学校」に入学して今は一年生です。私の弟は、「柏原市立玉手中学校」に入学して二年生です。今の私の父さんは毎朝の七時から十八時まで会社で仕事をしています。仕事が終わると家に帰って夜ごはんを食べてから風呂に入りまゝす。それからは私と私の弟に勉強を教えてください、いっしょに遊んだりしてくれています。私の父さんは私が良い成績をとると、寿司屋につれていってくれたりと、勉強に熱心になるようなことをいつも考えてくれます。そして今年の夏休みには、私の故郷であるベトナムに連れて帰ってくれました。私の父さんは今年の夏休みをたくさんのお思い出があふれた最高の夏休みにしてくれました。私の父さんはどんなに忙しくても私の母さんの料理の手伝いや洗濯物を干してからたたむなどの家事の手伝いもしてくれる家族想いでやさしい父親です。

私の父さんはたとえ、どんな環境におかれても最後まで

でねばり続け、どんなに難しい事しても決めた目標は必ず最後まであきらめずに成しとげていました。こんなやさしくてたくましい父さんの息子として生まれてきたことは光栄としか言えません。一生懸命に努力をしてきてきな家庭を築き上げ、家族を思いやる父さんを超えるという目標を達成する第一歩としてこれからも勉強にはげみます。私は父さんを誇りに思っています。



## 小学生の部

### 受賞作品



大賞 ゆらゆらゆれる、かかのこと

藤本千尋 愛知県 八事東小学校 一年

佳作 小学三年生、アクセサリーショップを開く

久保 咲楽 北海道 帯広サドベリーの風 三年  
大正小学校

アサガオの観察記録

志賀 優龍 愛知県 福岡小学校 三年

選考委員特別賞

あさの あつこ賞 しょうゆがみをつくるけんきゆう

川名 蒔子 埼玉県 尾間木小学校 二年

最相葉月賞 私ができる恩返し

中村 心美 東京都 第四吾嬬小学校 六年

リリー・フランキー賞 僕は、いつだって空を想う

柚野 薫三郎 大分県 滝尾小学校 五年

### 最終候補作品

私たちの平和

生きるということ

きれいな海をいつまでも

く犬からの教訓

ひと夏をすごしたあいつ

ぼくのおばあちゃんは

リリー・フランキーが大好き

ぼうけんへの道のり

ザリガニ会議

私と乳歯の20日間のふんとう記

そこにいるのは、だれ

私が学んだこと

おおばあば

清田 眞子 熊本県 六年

鬼塚 雄大 福岡県 二年

角田 真菜 神奈川県 五年

山崎 怜美 東京都 三年

谷藤 緑 東京都 五年

永安寺 翔 大阪府 四年

藤田 椿 東京都 四年

坂本 美玲 福岡県 四年

川角 星愛 京都府 四年

坂井 美咲 福岡県 五年

青木 龍之介 福岡県 六年

### 学校団体賞

(五十首順)

北九州市立小石小学校

智辯学園和歌山小学校

横浜市立茅ヶ崎台小学校

## 中学生の部

## 受賞作品



## 大賞 鳥取に飛来する黄砂

田村 萌梨 鳥取県 鳥取大学附属中学校一年

## 佳作 この夏の自分の思いきったこと

萩原 虎徹 新潟県 大阪府 玉手中学校一年

伝えたい、この気持ち

島崎 結衣 山梨県 北東中学校三年

## 選考委員特別賞

あさの  
あつこ賞 闇の中から扉を探して

内田 博仁 神奈川県 あおば支援学校中学部二年

最相葉月賞 仲間と共に、28人の努力、甲子園への切符、

佐伯 皆人 広島県 盈進中学校二年

リリー・  
フランキー賞 父は誇り

チャン コクアン 大阪府 玉手中学校一年

## 最終候補作品

未来につながる僕達のランドセル 岩崎 成吾 福島県一年

僅少の可能性 チャケ・レオン ドイツ二年

スフォルツアンドー四十六日ー 森環 貴 埼玉県二年

私たちは歴史の中に暮らしている 小林 隼 熊本県一年

合唱男〜僕と歌〜 がっしょたん 眞田 隆之介 長野県一年

おばあちゃんへ 藤澤 なずな 東京都二年

— 貴女が生き抜いた二年間 —

ケアンズ旅行記 栗原 幸太郎 東京都二年

〜 固有種とのふれあいに学ぶ〜 伊東 葵 大阪府二年

ちいさな大地とおおきな桜

## 学校団体賞

(五十音順)

柏原市立玉手中学校

熊本大学教育学部附属中学校

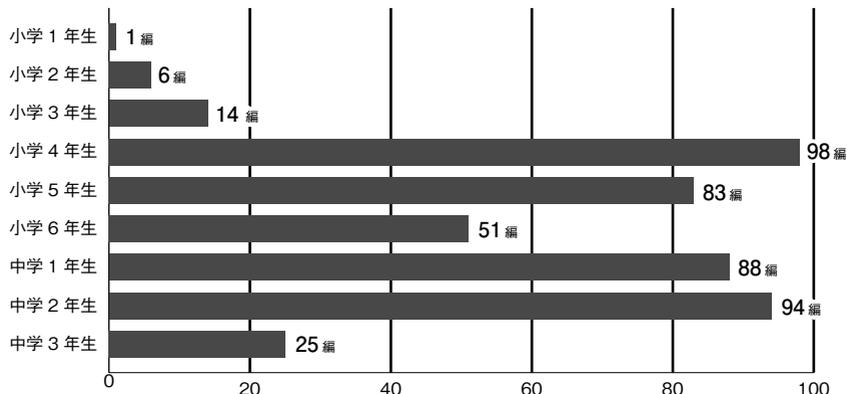
筑波大学附属中学校

# (令和4年度) 第14回 子どもノンフィクション文学賞応募結果

◎応募受付数 **460** 編

小学生**253**編(昨年342編)／中学生**207**編(昨年428編)

## ◎応募者学年別構成



## ◎応募者地域別構成

地域	応募数			九州内訳(再掲)	応募数		
	小学生	中学生	合計		小学生	中学生	合計
北海道	2	6	8	福岡県	12	31	43
東北	2	14	16	(うち市内)	(8)	(6)	(14)
関東	70	44	114	佐賀県	3	0	3
信越	1	1	2	長崎県	1	0	1
北陸	0	0	0	熊本県	1	33	34
東海	14	4	18	大分県	2	0	2
近畿	142	64	206	宮崎県	0	0	0
中国	2	2	4	鹿児島県	0	0	0
四国	1	7	8	沖縄県	0	0	0
九州	19	64	83				
海外	0	1	1				
合計	253	207	460	合計	19	64	83

## 事前選考委員

(五十音順)

相本 倫子 石橋 聡 伊藤 和人 岩淵 邦夫 上野 浩昭 神村 恭子

第14回子どもノンフィクション文学賞

# 受賞作品集

二〇二三年三月一八日 発行

編集・発行 北九州市立文学館

〒八〇三二〇八一三 北九州市小倉北区内四一

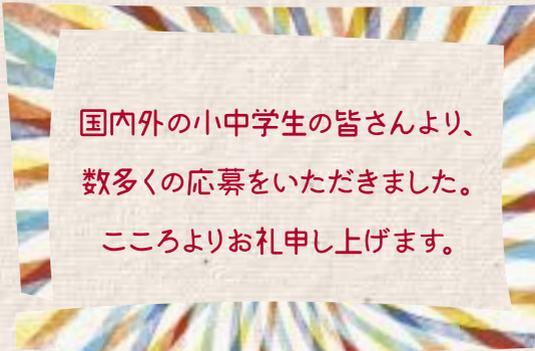
電話 〇九三二五七一五〇五

FAX 〇九三二五七一五二五

印刷・製本 瞬報社写真印刷株式会社

登録番号 北九州市印刷登録番号 2210133A号

※本書掲載の記事及び写真の無断転載・複製を禁じます。



国内外の小中学生の皆さんより、  
数多くの応募をいただきました。  
こころよりお礼申し上げます。



子どもノンフィクション文学賞



主催：北九州市 共催：北九州市教育委員会 協賛：日本児童図書出版協会  
後援：朝日学生新聞社 公益社団法人全国学校図書館協議会 公益財団法人海外子女教育振興財団